

モモンガ様迷惑を受ける

大きな像の金槌

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

初めての書き物です。

モモンガ様を怒らせることをした場合、プレイヤーがどうなるかを書いてみたくなつた。

ほぼ書き終わってますので、修正出来次第順次UPしたいと思います。

1〜9話はオリ主の設定を固めるためのストーリーです。

10話目からメインとなります。

捏造を含むのでご了承ください。

目次

1.	迷惑の始まり	1
2.	異世界?	7
3.	カルネ村	18
4.	王国戦士長	43
5.	陽光聖典	62
6.	ナザリツク地下大墳墓	74
7.	王国	87
8.	六腕	112
9.	魔術師ギルド	129
10.	スレイン法国からの道筋で	142
11.	エ・ランテル	159
11.	エ・ランテル	172
11.	2 エ・ランテル	185
12.	スレイン法国の情報収集中	191
12.	1 スレイン法国の情報を集めるために2	197
12.	2 スレイン法国の情報を集めるために3	202
13.	スレイン法国から王国への道筋で	209
14.	再び王国	216
15.	アインズVSグレン	222
17.	1 アインズVSグレン	235

18.	戦いの後で	247
19.	ナザリツク地下大墳墓、玉座の間	257
20.	ナザリツクVS人間種	264
21.	アインズ・ウール・ゴウン宗教国	288
22.	やっぱりモモンガ様迷惑を受ける	294

1. 迷惑の始まり

DMMO—RPG かつて日本の、世界のゲームに革新ももたらした技術であった。

その中で「無限の楽しみを追求できる。」そんな宣伝文句さえあった、日本でDMMO
と言えば『コレ』と呼ばれるほどの

大人気ゲーム——『ユグドラシル』

そう、ここでの生活はとっても楽しかったんだ……

12年、オープンβテストからずっとプレイしてきたこの日本古残のゲームもついに
終わりを向けることとなった。

「ついに、このゲームも終わりか……リアルでは飼えなかった動物（ティムモンスター）
達との別れがくるなんてね……」

地球が技術的革新を進めると同時に、失ってしまったもの。

それが自然だった。人間だって、外を出歩くときは酸素マスクなどいくつもの道具を
身に着ける必要があった。

であれば、自然界に生きる動物達は？

当然生きているわけがない。人間の屋内動物園や水族館で生きているものがすべてであつた。

当然それらに触れることができないわけがない。それどころか個人で飼うなんてことは極々一部の金持ちの特権であつた。

当然ながら俺自身、そんな金はない………

なればこそ、仮想現実世界にそれを求めてもいいだろ？

と思つてプレイし続けて来たんだけど、

「今日でユグドラシルも終わりか……」

この世界で初めてティムに成功して、歓喜し続けて気絶しそうになつた場所にやつてきたんだ。

ビーストティマー

この職業は、ユグドラシルを初めて暫くしてからから気づいた職業だつた。

というのも、俺はゲームにあまり興味がなく、動物園や水族館巡りが趣味だつたから。初めは昔は歩くことが出来たという森を散策できるつてことを聞いた。

興味につられて、ユグドラシルを始めてみたんだが今どきのゲームつてのはこれほどすごいのかつ!!

て思ったよ。

匂いや触感はいまいちというか、匂いは全く無い。

触感も、んんん？

触れている触感はあるんだけど、何か当たっているだけ？って感じだった。

それでも、この目に映るものは感動の嵐だったよ。

で、サモナーって職業がある。

ああ、これって狼とか悪魔とかを召喚できる職業なんだって思ってた。

狼が召喚できるなら、疑似的にでも動物を飼った気分になれるんじゃないかね？って思ってた。サモナーを取得するべくゲームを進めていった。

初めて狼召喚を使ったときは感動と同時に不満だった……

俺に従うのはいいんだが、触ってみても毛のふさふさした感触がまったく感じられなかったんだよ……

でも、狼を飼うっていうのを疑似的にでも体験できるのはいいなって思った。

召喚モンスターを強化するべく、プリースト系スキルを取得して、召喚中に回復できたらしいね。つてくらいで色々所感して

いった。

プレイしていくうちに、このゲームを教えてくださいました人たちと交流を持つうちにゲーム

かったんだよ。

電脳法だかなんだか知らないが、この手に感じる触感くらい再現してもいいだろうに。

その世界もこれでお別れつてことで、一番印象深いこのエリアへやってきた。

モンスターを初めてテイムしたこの場所。

今でもユグドラシルで一番可愛いと思っっているモンスターがいる場所だ。

『スピアニードル』レベル67のモンスターで、決して強くはないが狩るためには面倒くさい能力をもっているため、生息してい

る狩場の割に、Lvの高いプレイヤーがいることで有名な場所だ。

最後だと思っつて飼っていたモンスターは全て逃がしていた。奇跡に近い確率だがテイムを解除した場合、野生化はするがモンスター達は

こちらの事を覚えているというシステムになっていて、いつでも再テイムが可能だ。

・・・誰にも狩られなければという条件が付くが。

でも最初のテイムモンスターである、この子くらいは飼っていたい。

そう思っつて、スピアニードルのテイムを行っていた。

23 : 42

タイムに成功し、残り2分弱

「ああ、リアルにこの子を持って帰れたらなあ。いやまあ無理なんだけどさ。なんで終わっちゃうかなあ……」

23 : 59

目の前で大人しくしている2m弱の可愛らしい兎。

名前をどうしよつか？って考えていたら、もう終わりだしつけなくても？

と思いつつ、もふもふを感じる名前、シロモフにしようと思った。

今日からお前はシロモフだっ

その瞬間、世界は変貌した。

2. 異世界？

あれ？

0：00を示した筈なのに、リアルの感触であるヘッドディスプレイが感じられない？

というか、この匂い、香りは何だ？

強制ログアウトと思って目をつぶっていたんだが、目を開けてみると周り一帯が

これって、もしかして森？

森林?????

本や映像記録でしか見たことのない世界が広がっていた。

え？

いままで嗅いだことがない、

生命が息吹く香りを嗅いだ。これが森林の香りなんだろうか？

そう表現することができる香りを嗅いだ。

「え〜つと、ハハハハハハ〜」

強制ログアウトのせいで、幻想を見ているのか？

と思ったが、身体が違うと感じている。

この感じリアルな感じと寸分違わない。

「あ、もしかしてユグドラシルはサービス終了となったけど、ユグドラシルⅡとか新しいゲームになった？」

俺自身言つて疑問に思ったのだが、電腦法で嗅覚と味覚の再現つて許可されてないんじゃないか？

いつのまにか、法律が変わつて嗅覚だけ許可されたとか？

味覚を確かめるためには、何か口にしないといけないけど食料なんてサービス終了時に買い集めなんてしなかったから

持つてないしなあ。

まさかその辺の木に嘔り付きたくは無い。

あれ、いつもなら表示されてるHPやMPその他のコンソールが表示されてない？

???????? ??
と、疑問だらけだったんだけど、いきなり声をかけられる。

「ご主人さま、どうかしたっすか？」

ナニコノシロイケノカタマリ

耳が2本

ほほがぷつくり

白い毛がもこもこ

もしかして、スピアニードル？

しかも、ご主人さまって？

ユグドラシル最後の瞬間にタイムした子？

いやいあ。

ありえんだろ。

でも、ご主人さまって

最後の瞬間に名前を付けたから、その名前で反応したらそうなんだけど・・・

「もしかして、シロモフ？」

「？なにを、言っついていつてるすか？ご主人さまに名前をつけてもらった『シロモフ』っす」

そういわれた瞬間、シロモフに抱き付いてしまった。

そうして分かったことが一つ。

触感が、毛のふさふさもふもふを伝えてくれた。

ああ、何この幸せ……

ずっとこのままこうしていたい……

10分ほど経過して、シロモフから抗議の声が上がった。

「ご主人さま。撫でてくれるのは気持ちいいんですけど、お腹すいたっすっはっはっ」

我に返ったが、どういうことだ？

お腹がすいた??? って、NPCに相当するティムモンスターがそれを直接言うか？

じつと見てみると、毛の一本一本が確かに再現されている。

というか、シロモフの口が動いている上に、俺の口もしっかり動いている上に

しつかりとした触覚まである???

少し冷静になれ……

触覚があり、嗅覚がある。

これは、俺が知っている（とはいっても、素人の範囲で）法律では厳しく定められていたはず。だよな？

そして、NPCに相当するはずのモンスターがしゃべっている？

「あゝ、シロモフ君?」

「なんつすか？ご主人さま？」

やっぱり喋ってる……

いやいや、まず、お腹すいたつす

って言うってたんだからエサを上げないと、せつかくティム状態？にいる、シロモフがどこかに行つてしまおう

それだけは絶対に避けなければならぬ。

この『ふさふさもふもふ』だけは絶対に手放してはならない

今までなら、ティムモンスター用のエサは買えばいいだけだったから問題なかったんだが、

現在地が分からないので街なり村に買いに行けない。

どこかに人が集まってるところないかな？

あ、でも金がない……

ポケットには何も入ってないし

あ、でも『シロモフ』がいるってことはやっぱりユグドラシルなのか？

コンソール開かないといし、

そういえば持ち物ってどうなってるんだ？

あ、なんとなく分かった。

四次元ポケットっぽくアイテムボックスが開く。

見慣れたアイテムが全部あるかな？

何を放り込んであるかイマイチ覚えてないけど、大抵のものはありそうだった。

あまりにごちやごちやしているの、今度整理するでしょう。

無限の背負い袋――の中身はだいたい分かるし回復アイテムとか、その辺は当面問題ないだろう。

とりあえずエサを

『スキル：ペットのエサ作成』

ドックフードのような固形状のペレットがいくつも出現した。

「ご主人さま、食べてもいいいっすか?」 どうやらおあずけが出来るようだ。

「よし、食べていいよ。お前のために作ったんだ。食べるだけ食え」

その小さい? 手にもって、一個づつカリカリと食べている姿をみるとハムスターみただなあと、思っただけ食べる姿を見ていた。

抜けていった感じがMPの消費だとすると、べじたぶるのエサは当面問題ないかな?

当時は、エサ代節約のためスキルを使うのが当たり前って言われたけど、やっぱりちやんとした自然食（買ったエサ）

を与えたいよなあ。

どこかにペットショップがあればいいんだけど。

というか、シロモフ見てて忘れてたけど、ここどこだろ？

スキルが使用できたから、ユグドラシルのサービスが延期になったとか？

でも、そうしたら五感の件で疑問が……

まあいつか

目の前には『ふさふさもふもふ』の代名詞、シロモフいるのだから。

当面は、この世界を楽しむとしようかと心に決めたのだった。

でも、俺も腹が減ってきたぞ？

シロモフは、俺のMPが持つ限りは当面良いとして自分自身の食事はどうしよう。

この森林の飲食可能な植物でも生えていればいいんだけど、毒とかあつたら怖いしなあ。

まさか、ペットのエサスキルのこれ……食べれるのかな。

というのも、リアルでは自生している植物なんて絶対に食べるこなんて出来なかつ

た。

だって、大地の汚れを吸っている植物を人間が食べれば確実に食中毒、度が過ぎれば死ぬのだから。

そう思って、自分の体を見回してみる。

人間のそれだよなあ？

でも、元の世界の俺の身体はあおびょうたんというか、色白く死にかけ、という体だった。

でも、こうしてみる限りユグドラシルで作成した通りのアバターっぽい？

顔は鏡が無いから見れないけど、中肉中背というよりは、スリムマッチョ？っぽい自分が理想とする身体だった。

まあユグドラシルのアバターが俺が作った物だったんだだけどき。

そういえばエサの作成って、なんとなく使ったけど、どうやったんだろ？

意識をしつかりと認識すると分かる。

俺のMPの量、スキル使用回数、タイムの仕方等、ユグドラシルで経験したことがはつきりと技術の行使の仕方まで分かるのだ。

理由はわからないけど、まあいいや。

考えてもわからないことは、考えないようにしよう。

とりあえず、現状で得られる情報が無い以上、何を優先するか優先順位をはっきりさせて、行動して行こう。

当然ながら

- 1、シロモフを永遠にそばに置く
- 2、空腹をどうにかする
- 3、・・・思い浮かばない

これが夢なら朝になれば覚めるだろ・・・うし、いや、どう考えても現実だ。向こうの腐りきった自然環境に比べれば、当然こっちで生きていきたい。

夢なら永遠に覚めないでくれ・・・
シロモフ可愛すぎるっ

考えをまとめているうちに、シロモフがペレットを食べ終わったようだ。

「ご主人さま〜ごちそうさまっす」

シロモフの頭を撫でつつ、よしよししてやる。

甘えたように懐いてくるのだが、俺自身の食糧の確保も必要だ。

無駄と思いつつも「シロモフ、ここってどこかわかるか？」

「ご主人さまがここに連れて来たんじゃないっすか？」

ああ、当然知らないよなあ

『シロモフ』の耳がびこびこ動いてる

「でも、あっちの方から、金属がぶつかる音がするっす。」

およっ、俺には聞こえないけど、さすが動物。聴覚が違うのかな？

「食後ですまないが案内してくれないか？」

「まかせるっす！背にのるっす」

え……………

でかいけど、兎っぽいのにのるって……………いいのか？

「お前に乗るつもりはないから、案内してくれればいいんだが」

「ご主人さまなんだから、遠慮せず背にのるっす」

ちよつと恥ずかしいけど、このふわふわもふもふが感じられて、眠ってしまいそうだった。

3. カルネ村

森の切れ目が見えてきた。

昔、本で見たことがある木の家があった。

あちこちから煙が上がってるから、昼食の準備でもしているんだろうか？
なんにせよ人がいるなら、この辺りの話を聞くことができるだろう。

あわよくば食事を分けてもらえるかもしれない・・・腹減った・・・

「ご主人さま、血の匂いがするっす」

ん？家畜の解体でもしてるのか？

これだけ自然があるんだから、過去に行われていたという放牧なるものでもしているんじゃないか？

もしかして、肉を食べれるかも？

あつちでは固形状の味気ない食事ばかりで、何かの記念日でもなければ自然食品なんて食えなかったからなあ。

これって悲鳴？

こつそり近づくと騎士っぽい恰好をした人達が村人を襲っているっ

ひ、人殺しだ……

思わず息をのむ。

こ、これは殺人現場だ。

け、警察に電話をしなれば。

……この世界に警察ってあるのか？

下らないことを考えている場合じゃない。

村の人には悪いが自分の命には代えられん。

このまま立ち去ってしまおう。

後ろを向くと シロモフがいる……

「ご主人さま、村に行かないですか？」

「大変なことになっているみたいだ。人がたくさん殺されている。あんな怖い場所に行く気はない」

「ご主人さま？怖いつすか？」

「うん、怖い」

「ん、でもあそこにいるのは、どうみても弱い奴らばっかりつすよ？ご主人さまが怖いなら僕が殺すつすよ？」

え……何言ってるのこの子……

突然のことにびつくりしていた。

よく見ると弱そうに見える。遊んでいるのか？

そう思ったら何を怯えていたんだろう。

自分の能力を確かめる。

回復魔法……使用できそう

武器……腰に付いている鞭がある

この鞭って、ユグドラシルと同じものだろうか？

なら、現実となったこの世界でも俺に使用できるはずだ。

安全は確保したい。

べじたぶるに乗って逃げ足を確保すれば大丈夫かな？（森の中を結構な速度で跳ねていたし）

でも、もう一つ何かないかな。

……あ、なんで忘れていたんだらう。

——サモン・ムーンウルフ

3匹の獣が姿を現せた。

ユグドラシルと同じだなあ

じゃあ、能力も同じ？

このモンスターは特別な能力はないが、とにかく足が速い。奇襲要因としては最適だ。

召喚魔法が成功したことに安堵し、命令をだす。

「あの騎士の姿をした連中を襲って。可能な限り殺さずに」

奇襲用によく使っていた、獣が一気に散る。

殺人者の命を奪ってもいい気がしなくてもないが、さすがに人を殺すのは嫌だしなあ。

って、一気に散ったっ!!!

召喚モンスターの割と範囲は広いはずだけど、目に届く程度の範囲だ。効果が変わっているのか？

ま、俺も行くか。ムーンウルフが俺と繋がっているような感覚がある。

これが無くなるってことは、召喚モンスターがやられたってことなのかな。

シロモフにまたがって、村の中を跳ね進む。

進んだ先に、剣を振り下ろそうとしている騎士を見つける。

よし、鞭を試そう。

手持ち唯一の神器級武器。神器級の装備はもう一個あるけど。

鞭っていうのは、扱いが難しく結構な練習が必要となる。狙ったところに当てるだけ

でも一苦勞なのだ。

だが、この鞭は違う。ターゲットを認識して腕を振れば勝手に向ってくれる。

しかも伸縮自在。鞭で掴むことも可能。しかも不可視状態にすることもできる。

ようは命中率を上げる効果と、召喚モンスターからタイムモンスターの能力を向上さ

せる効果を持っている。

ビーストテイマーといえ、鞭だつ。

昔の友達とどういいう装備がいいか話し合って決めたんだけど、使い勝手を求めたために威力が低めになっちゃった一品。

聖遺物級の攻撃力はあるけど他の神器級と比べると明らかに攻撃力が低い。でも、RPの一環としては必須。

剣の柄を狙い振るう。狙い通り剣を絡めてこちらに引き寄せる。

・・・この剣はもらっておこう。売れば少しはお金になるかもしれない・・・
剣を失い、空振りした騎士は手を見ていた。まるでありえないことが起こったとでも思っているようだ。

「ああ、そのあんた。なんでそんなことをやってい

「ひ、ひいいいいいいいい」

脱兎のごとく逃げていった。

逃げられるのは困るので、首を狙い鞭をふるう。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

え

首が……ふつとんだ……

「え、え、え、え、え、ちよtyとちよちよつと」

こんなに弱いのかよ……

これで俺も殺人の前科者か……

お父さんお母さんごめんなさい

あなたの息子は犯罪者となつてしまいました……

いやまで、諦めるな。

ユグドラシルと同じなら蘇生魔法が使えるはずだつ

死者^{Raise}の復活^{Dead}

あ……灰になっちゃった……

そういうえば死者^{Raise}の復活^{Dead}って、金貨を消費するんじゃないかな？

アイテムボックスを覗くと減ってるかな？

もともといくらあつたか分からないけど、今後注意するでしょう。

灰になつたんだから、証拠隠滅されたし捕まらない……よね？

もう自分で自己弁護をし続けていたが、面倒くさくなってきた。いや、人を殺したの

に面倒くさくなってきた？

元々いた場所と違うせいで命の重みを感じてないのか？ だけど、殺しても、ちよつとした罪悪感しか感じないんだけど。

こいつらが村を襲ったのが悪いんだと思ってるのかもしれない。と思うことにしよう。

きつと今日眠るときにうなされるだろうけど、その時はその時だ。

酒でも飲めばなんとか・・・酒あるかなあ・・・

あ、忘れていたけど今殺されかけていた村人はどうなった？

今更ながらに気づく。

この村の老人？ だろうか。

「あ、の、大丈夫ですか？」

穩便にことが進むようにと声をかける。

「あ、あんたは一体、それにそのまたがっているモンスターは・・・」

「おっと、失礼」

年上の人に上から話すのは失礼かと思ひ降りることにする。

「この子は私のペットのシロモフと言います。私は、ただの迷子でして名前は

Glenn・Turner
グレン・ターナーです」

「ペット・・・ですか。このすごい魔獣がですか？もしや森の賢王？」

「森の賢王？なんですかそれは」

「昔から言い伝えられている、トブの大森林にすむ伝説の魔獣です。話に聞いただけで私も見たことはありませんが・・・」

「では、違うと思いますよ。この森でタイムしたわけではありませんから。それより、この村の惨状は一体？」

「はっそうです。通りすがりの方にお願ひするのは申し訳ないのですが、助けていただけませんか・・・」

この老人と連れ立って村の中央広場へ行くと、そこには死の騎士がいた。

周囲にはムーンウルフが2匹いる。

あれ？どうということ？

死の騎士と一緒に騎士を狩ってるけど、ムーンウルフは当然ながら行動不能にしているだけだが（それでも足をかみ砕いてるし）

あの死の騎士は、明らかに殺している・・・

念のため老人に問いかけるとしよう。

「あの、ちよつとお聞きしたいのですが、あの黒い鎧の騎士はご存知で？」
「……………」

声が出ないらしい。まあアンデットを見慣れていなければ怖いよなあ

というのも、俺もアンデットというか、ゾンビ系や、昆虫系モンスターは苦手だ。

ユグドラシルでも、ゾンビの再現度上げつない。

何回見ても慣れることはないし。

異業種のプレイヤーでもスケルトン系は割といたけど、ゾンビ系はあんまりいなかったしね。

でも、この老人が見たことがない雰囲気といい、明らかに騎士のみを攻撃しているところを見ると他の召喚者か？

なら、あれは倒さない方がいいかな？

ユグドラシル通りの性能なら、問題なく狩れる。

のんびりと、死の騎士の戦いを見てみると（時々鞭を振って剣を奪っていたけど）

もう盗賊の領域だなあと思ってた。いやほら、お金がないと食っていけないし……

あ、でもどこにいったら剣を買ってもらえるんだろう？

この村にアイテムショップとかってあるんだろうか？

「き、貴様らあ俺を助ける。助けたやつには金をやるつ200、いや500つ1000金貨だつ」

今叫んだ隊長つぽいやつは助けようかと鞭を飛ばす。

だが、忘れつぽいせいか・・・威力を考えてない。

胴に巻き付いたと思つて引つ張つたら胴体ごと真つ二つにしてしまつた・・・

ああ・・・これで2人めの殺人か・・・

なんかこの世界に来てから、どんどん汚れていく気がする・・・

「ご主人さま、なんか疲れているみたいっすけど、大丈夫っすか？」

「あ、ああ気にしないでくれ・・・」

癒しがいてくれてよかつたよ

空から声が聞こえた。

「死の騎士、そこまでだ」

あれが死の騎士の召喚者かな？

召喚者の声は村全部に響くんじやないかと思うくらい響いた気がする。

ん？俺を見ているのか？

「はじめまして、諸君。俺はアインズ・ウール・ゴウンという。投降すれば今は命の保証はしよう。まだ戦いたいと」

生き残っていた騎士達の剣が即座に地面に投げ出された。ただ恐怖の気配だけがそこには渦巻いている。

「ふん。よほどお疲れの様子——ああ、いいぞ。生きて帰るがいいさ。だが——今度また村を襲うというのなら……」

飼い主に伝える。この辺りで騒ぎを起こすな。騒ぐようなら、今度は貴様らの国まで死を告げに行つてやる」

おお、なんかこの口上格好いいぞ。覚えておこう。

「だけど、ただ逃がすのももったいない。

俺も村を救ったはずなんだから、ひとこと言ってもいいだろう

「だが、このまま逃げられては、村のものが納得いかないと思うだろう？」

そんなわけで、お前たち脱いでくれ」

「……え」アインズさんと名乗った人がぼそつとつぶやいたように聞こえる

あ、いやまで、ただ脱げと言ったら変態じゃないか。

無事に、こちらの意図したことは伝わったのか、鎧だけを脱いでくれた。……なんとか装備の半分は貰えるように話を持っていこう。

「そのあなた、失礼だがお名前を伺ってもよろしいかな？」

あ、やっぱり俺を見てたのか

「私はグレン・ターナー。ただの旅人ですよ」

「このムーン・ウルフもあなたなので？」

アインズと名乗った嫉妬マスクそっくりの仮面を被ったかたの手には、一匹いないなあと思っていた子がいた。

首根っこを捉まれているので、どう動いても逃げることが出来ない。

何より絶対の1v差があるのだから……

1v20程度のモンスターであれば、1v100カンストプレイヤーには絶対に逃げる事が出来ない。

1v差というのは、それだけ埋めがたいものなのだから……

「おつと失礼、召喚モンスターの一匹がご迷惑をかけたようで」

「いえいえ、何もされていませんよ。ただ、つい捕まえてしまったのでお返ししますね」

足元に捕まえられていた一匹が帰ってくる。頭を軽くなでてやると甘えてくるようにすり寄ってきた。

可愛がりたいが、嫉妬の目で見てくるシロモフがいたので召喚を解除することにした。

3匹のムーンウルフは光の粒となって、俺の身体に戻ってくる。

あ、なんかMP回復したかも？

全部じゃないけど、召喚解除すると一部のMP戻ってくるのかな？

やっぱり、この人はユグドラシルプレイヤーじゃないか？

嫉妬マスクといい、死の騎士を従えているといい、感じ取れる能力値といい、やっぱりそうだよなあ？

でも、横にいる黒いフルプレートの方もそうなのかな？けど、女性っぽい？

考えても仕方がないか。あとで聞いてみよう。

こっそりアイテムボックスを開けて、俺も持っている嫉妬マスクを取り出し装備してみよう。

お互い30以上の独身魔法使いなのだ。
このマスクが意味することを理解しあつた。お互い歩み寄りがつしりと握手を交わす。

「同志よ」「お互い、言葉には出さないがそう思ったんじゃないかと思う。

あ、でも横に女性？がいるから同志じゃないかも・・・

この流れで、少なくとも敵対するつもりが無いと伝わるといいなあ。

その後でマスクは外した。呼吸しづらいし・・・決して見栄を張ったわけじゃない。

「あの、アインズ殿？」

「え、あ、はい、なんででしょうか？」

「2, 3お伺いしたいのですが、構いませんか？」

アインズは軽く頷く。(なんか横からすっごい恐怖の視線を感じるんですけど〜)

「し、至高の御方に声をかけるなんて、身の程をし」

「黙れ、アルベドっ」

アインズの声が周囲を一括する。

村人も少し怯えているようだった。

「あく、申し訳ない。どうしても聞きたいことがあったものですから。ダメでしたら無理にとは……」

「あ、いえ、部下が失礼をしました。私もお伺いしたいことがあるのですから」
「では、落ち着いて話ができる場所に移動しませんか？ 屋外では聞きづらいこともあるもので」

へ
先ほど助けた老人に、屋内で話せる場所がないかと声を掛けると、ならば私どもの家

彼は、村長だった。

「さて、アインズ・ウール・ゴウンさん？ユグドラシルのプレイヤーじゃないかと思ったのですが？」

「ええ、実際はモモンガと名乗っていました。」

あ、アインズで構いませんよ？

色々あつてギルド名を名前にしようかと思ひまして。あなたも？」

「はい、ユグドラシルのプレイヤーです。基本ソロプレイヤーですけど、βテスト時代からです」

「おお、では最古残のプレイヤーですか!!」

「残念ながら、12年ちよつとで終わってしまった世界ですけどね」

「同郷の方とお会いできるとは嬉しい限りです。」

「あれ？あまりギルドを組んでいる人とは交流は無いというか、調べたりはしないのですが、そのギルド名って結構大ギルド

じゃありませんでした？動画が上がってたのを見たんですけど、41人VS1500人で守り切った動画の方で？」

「ええ、最盛期の頃UPされたものですね」

「ということは、そちらのフルプレートの方もお仲間ですか？」

「いえ、彼女は配下のNPCですよ。」

「NPC? てことは、もしかしてですけど、ギルド本拠地まる事こちらに来たんですか? でも聞いたんですけど、NPC って外に

連れ出せなかったと思うんですけど」

「いえ、こちらに来てからシステムが色々変わっているようですよ」

「そういえば、召喚モンスターの自由度が変わっているから、そういうこともありえるかあ……」

でも、ギルド本拠地ごと転移? してきたなんて羨ましい。

お金に困ることなんてないんだろうなあ。(いえ、のちほどすっごい困ります by

モモンガ)

一つ気になったのは、こちらへ転移して4日ほど経過しているそうさ。

俺は今日転移してきたんだけど……もしかして4日程寝てたとか……そんなわけないか。

アインズさんに、そのことを伝えると、すっごい驚いていた(いや、あれは喜んでいたら?)

「そうか、時間差で転移してくる可能性があるなら、ここで生きていけばいつかギルドメンバーが転移してくるかもしれない……」

「おくい、アインズさん？」

「あつと、失礼。もしかしたらの可能性を考えると希望をもったもので」

「そうですか、じゃあそろそろ村長に話を聞きたいと思うのですが」

「部屋をお借りして申し訳ない」

「いえ。こちらこそ、まずはお礼を言わせて下さい。村を救ってくださりありがとうございます」

村長が向かいの椅子に座り、お互い頭を下げあう。

いえ、お気になさらず。実はちよつとした下心があつてのことですから」

あれ、アインズさんも目的があつたのか？おれは食事を分けてもらいたかつたのと、何となくで村に近づいただけなんだけど

「……はあ」

それからアインズはまず金銭の要求をし、そこから見事な交渉術で話を繋げていった。

俺が頭から煙が出てエンストを起こしそうになっていた。

アインズは知りたい情報を最低限？手に入れたようでも満足していた。

俺……腹減った……

そんなわけで、村長に直球で要求を伝えることにした。

「村長さん、申し訳ないんですけど俺は金が無くって、村が見えたから食事を分けてもらえないかと思つて近づいただけです。」

村を助けたのは、たまたまでして、でも、腹減って申し訳ないので食事を少しでいい

から分けてもらえませんか？」

「こ、これは失礼しました。大したものには用意できませんが、すぐにお食事を」

火を起こすのに時間が掛かるようなので、こちらで第一階魔法、ファイアーを最少魔力を込めては使う。

こんなことに魔法を使うなんてって驚いていたけど、俺は腹減っているんだ。

でも、魔力を込める量を調整することで威力を調整できるなんて、なんて便利な仕様になっているんだらう。

そんなわけで簡単？なスープとパンを分けてもらって、それにがつつく。

すごいなこれ、肉も入ってる（少し）、野菜とパンって、どんだけの高級品だよ。

村長夫妻は、簡素で申し訳ないって言っていたけど、俺がいた世界では超高級品だよ。大変満足したよ。

食ってから、シロモフのエサを上げようとスキルを使用する。

「エサつすねっ!!」喜んで近づいてくる。

相変わらず美味しそうに食べるなあ。

試しに一口齧ってみると、ああ……リアルの世界での味がする……だけど食べることは可能なようだ。

さて、この世界での常識を少し手に入れたけど実は金貨1000枚って、結構な大金になるってことが分かった。

あの隊長さん殺さなきゃよかったよ……

………そうして話と食事を続けていると、村人がドアから入って来た。

村人は村長に声をかける。どうやら、死者の葬儀の準備が整ったらしく、これから村人達で集まるらしい。

村長は申し訳なきようにアインズとグレンを見たが、アインズは村長に気にしないように言った。

おれもエサ上げてる途中だしね。

Raise Dead / 死者の復活を使えば生き返らせるかもしれない……けど、ユグドラシル金貨が消費されるかもしれないし

何よりも、村人は弱すぎるんだ……先ほどの騎士が灰になったことから村人達は確実に復活できないだろう……

アインズさんにそれを伝えると

「死を与える魔法詠唱者マジック・キャスターと死者を蘇生させる魔法詠唱者マジック・キャスター。」

どちらがより面倒に巻き込まれるかと言えば、当然後者だと思います。自分の安全を考えるのであれば仕方がないでしょう。」

そう言われて少し救われた気がした。

だが、これは大きな間違いであり、ここで気づけなかったことが致命的な終わりを迎えることとなる。

グレンが、自分のペットを最優先に考えつつ、自分が生きるために必要な物を求めている。

アイNZは、仲間たちが残したNPC、拠点を最優先で考えていることに。

4. 王国戦士長

——そして葬儀が終わった後、再び二人は村長の家でこの周辺の常識を学んだ。それらの話が終わる頃には夕日が空を染めていた。

グレンは話が終わる頃に、村長にお願いを申し出てみた。

「……村長さん、お願いがあるのですが」

「はい？」

「私は旅人の身。泊まるところが無いので、一泊、寝床をお借りできませんか？」

「いえいえ、貴方様は命の恩人です。どうぞ、何泊でもしていただくさい」

そういつて、死んでしまった家族の空き家を借りることになった。

村長の家を出て、広場へと差し掛かる。そこで数人の村人が三人と一匹に真剣な顔で寄って来た。

「そ、村長」

「どうした、お前達」

「それが――」

その緊迫した気配に、また厄介事の気配を感じる。

この世界では厄介事ってのは起き続けるものなのか？

村人達の話では、まだ村人の遺体が無いか、あるいは生き残りがいないか周囲を見て回っていたところ、

この村の方角へと馬に乗った戦士風の者達が近づいているのを見たらしい。

そう話し終えたところで、その場にいた全員の視線が怯えたように、懇願するように俺達に向けられた。

「アインズさん、俺はこの村に数日泊まろうかと思うので、ある程度は助けようとおもうのですが？」

「まあ、乗りかかった船ですし、少しでも付き合いましょう」

「村長さん、ここの一軒大きな建物は……村長さんの家かな？生き残りを全員集めて避難して下さい。村長は大変だと」

思いますか、私たちと広場へお願いできますか？」

俺がそう言うと、村人達は頷いた。そして、駆けていく。鐘で村人達を集め、村長の家に集合させたら

アインズは残っていた死の騎士を自分の背後へ配置しする。俺はシロモフを連れて、村長と共に招かれざる客人達を待った。

「グレンさん、それってスピアニードルですか？」

「ええ、そうですよ。このふさふさもふもふの感触。たまりません。昔タイムしていた子達は最終日に手放してしまいましたね。」

俺と一緒に消えるのではなく、せめてあの世界が仮想とはいえ、続いて生きてくれれば・・・と願いたかったんですよ。

たんなる願望ですが・・・

でも、この子は終わりのあの日に、再度タイムしたんですよ」

その瞬間にこちらに来ましてね

言外にそれを込めてアインズさんに伝える。

「そうでしたか・・・」

やがて村の中央を走る道の先に数体の騎兵の姿が見えて来た。彼らは隊列を組み広場へと進んでくる。

見える姿になんとなく違和感を感じる。

武装に統一性がなく、各自でアレンジを施しているのだ。とても正規軍には見えな
い。

歴戦の戦士団？。悪く言えば武装の纏まりのない傭兵団だろう。

彼らは死の騎士とスピアニードルを警戒しつつ、見事な整列をして見せた。そして、
一人だけ進み出て来る。部隊長だろうか？

俺たち3人と一匹を見て驚いているようだった。

あの視線はちよつと怖いなあと思っっていると

「この村の村長だな？」

「あ、はい」

「横にいる方々を紹介して頂けないだろうか？」

男の名はガゼフ・ストロノーフ。王国の戦士長を務めているらしい。この近隣を荒ら
して回っている帝国の騎士達を討伐するために

王命を受けて、村々を回っているのだとか。

村長曰く、王国の御前試合で優勝を果たした凄腕の戦士であり、王直属の精鋭兵士達を指揮する立場の人物。

つまり、王国でも身分が上の立場の人間である。

「それには及びません。初めまして、王国戦士長殿。私は旅の魔法詠唱者です。こちらはアルベド。私の最も信頼する側近です。」

「俺もただの旅人です。村が襲われていたので、たまたま助けに入っただけです。アインズさんとは、この村で知り合いました。」

一礼して自己紹介をすると、ガゼフは馬から降り、頭を下げた。

「この村を救っていただき、感謝の言葉もない」

特権階級?の人物が頭を下げる。それもわざわざ馬を降りて。

まあ上から見下ろしながら話されてもなあって、そういえば俺もシロモフから降りて話をした方がいいって思ったんだから

その辺の一般常識は同じなのかな?

この世界——時代の人間としては信じられない対応なのだろう。ざわりと空気が揺らいだ。

その、一目で人柄が分かるガゼフの態度に、アインズは好感を抱く。

俺は、そりゃ馬からは降りるもんだと感じつつ……

「……いえいえ。実際は私も報酬目当てですので、お気にされず」

ん、アインズさんが欲しかった報酬ってなんだったんだろう？

何ももらってなかった気がするんだけど……

グレンさんは、いまだにアインズさんが何を欲していたのか気づいてません。

「お二人とも、かなり腕が立つ方とお見受けするが……お二人の名前は存じ上げません」

「先ほども言いましたが、俺はただの旅人ですよ。アインズさんとは、偶然ここで出会っ

ただけです」

アインズさんも、ただ頷くだけだ。

「なるほど、旅の途中でしたか。優秀な魔法詠唱者の方々のお時間を奪うのは少々苦しいが、

村を襲った不快な輩について詳しい説明をお聞かせ願いたい」

「お話ししたいのは山々なのですが、私は通りすがりです。本当に偶然出会ってしまっただけで・・・

ああ、この鎧を着てました。」

そういつて、彼らが来ていた装備品一式を見せる。

「これは帝国の？ いや、偽装の可能性もあるか？」

「さすが戦士長殿。これだけのことで、それに気が付くとは。私はスレイン法国可能性も考慮すべきかと思っています」

え、なんでスレイン王国の可能性があるってわかるんだよ……これって、帝国の紋章なんだから帝国の侵略の一環だと思うんだけど

裏をかくってそういうことなのか？アインズさんは、そんなに色々と考えているのかあ。

俺なんて、あとで何食べるかとか、他にタイム出来るモンスターがいないかってくらいしか考えてないんだよね。

「それで、お二人のそばに控えるそのモンスターか？説明していただけないだろうか？」

「これは私が生み出したシモベですよ」

「タイムしたモンスターですよ。シロモフって名前です。」

「なっ……生み出した？それに飼いなすすつ!?この精強な魔物をかつ」

「「え」」

二人とも同時に声を上げてしまった。

アンデットなのだから、怖いと思うけど（グレンさん）

この可愛らしいモンスターが精強？（モモンガさん）

——二人の疑問に関わらず話は進むようだった。ガゼフの連れてきていた騎兵が広場に駆け込み、緊急事態を告げたのだ。

「戦士長！ 周囲に複数の人影。村を囲むような形で接近しつつあります！」

「なるほど………確かにいるな」

ガゼフが家の窓から不審者を窺う。

ゆつくりと村に向かって歩む複数の人影。おそらくは魔法詠唱者。連れてくるのは天使だ。

異界より召喚された天使。スレイン法国では神に仕えていると思われる特殊モ

ンスターである。

「あれは炎の上位天使か……」
アークフレイム・エンジェル

「あんまり珍しいものじゃないけど、そうみたいですね」

横のアインズの漏らした言葉に、合わせて言葉を挟んだグレンに、ガゼフは即座に反応する。

天使や悪魔といったモンスターは同じ魔法で召喚されるモンスターよりも若干強いのだ。

宗教論争に興味は無いが、どれほどの強敵か、という事には興味がある。

単純に俺たち戦士団が勝てるかどうか、という1点に限るのだが。

ガゼフ達王国の戦士にそういった知識は無いが、ここに高位であろう魔法詠唱者達がいるのは幸いだった。

「ゴウン殿、ターナー殿、あの天使を知っておられるなら、どういうモンスターか教えて欲しい」

「第三位階魔法で召喚される天使です。おそらく、ですが」

「まあ、強い召喚天使じゃないですよ。ほら」といって、召喚して見せる。

「同じモンスターを呼び出せる魔法を所持しているのか」

MPの無駄遣いをする気はないので、召喚を解除する。

第三位階魔法で呼び出されるモンスターが強い天使じゃないとはどういうことだ。いや、簡単に手持ちの魔法を見せるのだ。

もっと上の魔法が使えるのではないだろうか？

ガゼフは、そう思うが最低でも第三位階魔法が仕える相手と分かっただけでも有難い。

魔法には色々あるが神官系、魔術師など色々あるが、位階は決まっている。

十の位階まで存在する、

とされ、帝国のフルーダという魔法詠唱者は確認されている中でも最高の第六位階まで使えるらしい。

第七位階からは前人未到で検証不可、英雄譚や神話にしか存在しないとされているが………

あるか無いか分からないものを想定するつもりはない。

そして、第三位階の魔法を使う魔法詠唱者はほぼ人類の最高位とされるのをガゼフは知っている。

そんな魔法詠唱者をあれほどの数揃えられるとすれば……………

ガゼフには彼らの正体がおおよそ見当がついた。

「恐らくスレイン法国のものだろう。お二方、かの国に追われる覚えはありますか？」

二人とも、こちらに来てさほど時間は立っていない。ゆえに首を横に振る。

「……………戦士長という地位に おられる方は恨まれるもののですか」

え……………どういうこと？

グレンさんは会話に着いていきません。

「この地位についているかぎり、仕方のないことだ。相手はおそらくスレイン法国の――

「特殊工作部隊、噂に聞く六色聖典の一つだろうな」

相手は厄介に過ぎる。激しい焦りどが生まれている。それと同時に怒りも……

「まったく武装をはぎ取る行動を起こしながら、ここまでするとはな……」

本来であれば、五宝物を装備している筈だった。

だが、今その装備は全て引き剥がされている。

王国で私腹を肥やす貴族共に動かす事を禁じられたのだ。

そしてこの状況だ。厳しい……

装備が無いだけでなく、対策の打ちようが無い。

いや、一つだけ、対策となる存在が目の前にいる。

「ゴウン殿、ターナー殿」

天使を見ている熱心に眺めるアインズと、あのくらいどうでもいいと思っっているように見えるターナーに声を掛ける。

「報酬は望むだけの額を用意すると約束する。雇われないか？」

「……………お断りさせていただきましょう」

この世界に、どんな相手がいるか分からない以上断るべきだろう。いや、戦士長の実力や、この世界の力を測る良い機会かもしれない。

「あ、俺なら雇われてもいいよ」

え、何この人。この世界がどこかわからない以上、気を付けるべきじゃないか？

そんなことにも気が回らないのか？場当たり的に行動するタイプか？

アインズは少なからず苛立ちを覚えた。

自分が危険を少しでも排除しようと動いているのに、こいつは考えが無さすぎる。

嫉妬マスクをもってはいるが、やはり人間種か……

いや、カンストプレイヤーがどれくらい戦えるか情報を集めるのに役立つてもらおうとアインズは思う。

「おお、それは有難いつ」

「あ、ちよつと待つてもらえますか？もちろん条件は付けさせて頂きますよ。私も自分

の命は惜しいので」

おや？少しは考えているのか？アインズさん

「それでは、どういう条件でしょうか？」

「まず第一に私は前線に出ません。後方支援に徹します。」

回復魔法が仕えますし、強化魔法も多少は心得ていますから。それと召喚魔法で多少の支援をするくらいです。

場合によっては攻撃もしますけどね。

で、一番重要な条件ですが、私の身に危険があると感じれば即座に逃げます。それでも良ければ雇われますが？」

敵すべてが魔法詠唱者であり、こちらは全員が戦士だ。魔法が使えるものがない中、一人でも使えるのであれば戦闘の幅が広がる。

「魔法による支援を得られるだけでも助かります。お願いしたい」

出来れば、その魔獣を前線に出してほしいが、それを伝えると支援ですら断られる気がしたのだ。

「では、手始めに」

サモン・モンスタースター3rd
第3位動物召喚 エイブ

かなり弱いはずだが、ムーンウルフよりちよつと強い程度の猿。

炎の上位天使とは総合力では互角だ。耐久力は上だが、魔法に相当する攻撃が行えないのでほとんどダメージは通らない。

相性の差だ。

ようは、ただの盾役だ。

これを2体召喚する。

「この子達を戦士長殿に盾役に付けます。」

「これは心強い。本当に、本当に感謝いたします。」

そういつて、頭を下げる。

「グレン殿に手を貸していただだけでも感謝しきれないのだが、ゴウン殿。我儘を言うようだが、重ねてもう一度だけ村の者を

守ってほしい。何とぞ、何とぞ聞き入れてほしい」

そういつて、跪こうとした気配をアインズさんは止める。

「そこまでして頂く必要はありません。村の者は、アインズ・ウール・ゴウンの名にかけて守ることをお約束しましょう」

「感謝する。ゴウン殿。これで最悪の事態は避けられるだろう。私は前だけを進むとき

せていただこう。それにグレン殿の援護も得られる

とのこと。大変心強い」

「……よければ、こちらをお持ちください。もしかすると何かの助けになるかもしれません」

あれつて500円ガチャのはずれアイテム？

効果は忘れたけど、アインズさんも……あのガチャ回したのか……

俺も10回だけ回して……すっごい後悔した……

あれ以来、課金ガチャはしまいと心に誓ったものだ。

「君からの品だ。ありがたく頂戴しよう。ではゴウン殿お元気で。今後の旅が無事に済みよう祈っているよ。」

グレン殿、援護をお願いします。」

「では、行くとしますか。何か作戦を立てたりしないので？」

「敵の狙いは、間違いなく私だ。であれば敵に分かるように飛び出した方が敵の目を引き付け村の安全が確保出来るだろう」

「つまり、戦士長殿が飛び出したのち、私がさらに後から続くということですか？」

「そうです。ですが一番重要なのは、村から敵を引き離すことです。一撃を当てた後、撤退です。」

決して敵を倒すことが目的ではありませんので」

「分かりました。シロモフ、おいで」

「やつと出てきたつすね。待ちくたびれたつす。」

「悪い悪い」そういつて、ペレットを一個だけ作りおやつ代わりに与える。

与えすぎかな？と思うけど、エサを食べてる姿つて可愛いんだよね」

太りすぎないよう気を付けなければ………

「グレン殿、その魔獣も連れていくのか？」

「足もそれなりに早いし、乗ってくつもりだけ……だめ？」

「いや、そういう訳ではないのだが、それほど精強そうな魔獣であればぜひとも戦力として加えさせていただきたい」

「すつこい可愛いって思うんだけど、戦士長殿には精強そうに見えるのか……」

やっぱりこの世界の人間つてI.Vが低いのか？

死者の復活 Raise Dead で、灰になったってことは、あの騎士
士って5レベル以下？

あの騎士がたまたまってことは無いと思うんだけど、60台のモンスターが圧倒的強
さを持つように見えるのかな？

でも、ユグドラシル時代でも可愛さではトップクラスだと思ったから、この世界の美
的感觉が違うのかも？

そういえば、森の賢王ってのがあるんだっけ。

暇ができたなら探してみようかな？

5. 陽光聖典

陽光聖典が隊長ニグンは予定通りにことが進んでいることに気を良くしていた。

「王国も馬鹿なことだ。下らない権力争いのために自ら最強の駒を捨てるというのだ。」

さまざまな手を回し王国の4つの秘宝をガゼフから剥ぐことに成功し、獲物が檻に入ったのだ。

「ニグン様。ガゼフ・ストロノーフが村から出て来ました」

「よし、狩りの最終段階だ。決して侮るなよ。秘法を身につけていないとはいえ、王国最強の戦士なのだから。」

秘宝を装備していないなら負けるはずがないと思いつつ、気を引き締める。

……懐にある最上位のマジックアイテムを確認し、最悪これを使えば勝てる存在などいないと安堵する。

だが、なぜか、胸騒ぎがするのだ。

なぜだ……準備は万端であり、必勝の体制を整えているのに、今見えて
いる光景に違和感を感じる……

先頭を走るガゼフストロノーフに精神系魔法をかけようとして、違和感の正体に気づく。

ガゼフの周りにいるモンスターがいる？

何かのマジックアイテムで呼び出したのだろうか……

サル？だろうか。その程度問題がないだろう。天使に比べれば多少耐久力がありそうだが、負けるはずがない。

何を恐れる必要があるというのだ。

「行くぞおおおおおおおお。奴らの腸を食い散らかしてやれええええええ」

馬に拍車をかけ、部下たちと、召喚モンスターとともに敵陣へ突撃する。

草原を一つの団体が敵に向かって走り込む。

「邪魔だああああああ」

剛剣が一閃される。両断されるかと思ったが天使の腹部から剣が押し戻されようとする。

「ちいいい」

腕、身体を思いつきり振って天使を吹き飛ばしたがダメージがあるようには見えなかった。

「魔法というのはなんでもありか」

武技でなければダメージは通らないと悟る。あれは、特定の力がこめられた武器でなければダメージを大幅に軽減する能力をもった

天使なのだろう。

そうであれば、部下の大半はダメージを与えることが出来ない。

そう思い、部下の方を軽く見やると

あつさりと切り裂いていた………

少し場面が戻ります。

ん、魔法で支援するっていったけど、どこまで使おうかな。

アークレイム・エンジェル
炎の上位天使って、物理ダメージを軽減する能力をもつてたはずだからダメージを通す必要があるか。

どうも、この戦士に人たちの武器は、ただのブロードソードとかバスタードソードっぽい。

部下の方たちの装備をちよつと拝見させてもらうと、魔法付与は一切されていない……

ちなみに全員がそうらしい……王国最強部隊なんだし、魔法武器くらい揃えなよと思う……

さつきの帝国騎士の装備だって、少しは魔法が掛かってたぞ？弱いけどさ……

そういうえば装備を剥がれたとかどうかいってたし、その一環なのかなあ？

もし、魔法の武器をそろえる程度の事ができないなら、報酬は期待できなさそうだ

なあ……望むだけって言ったのに……

なら、かける最初の魔法は一択か。

ユグドラシルをはじめて301v付近でよくお世話になったものだ。

マス・マジックウエボン
集団・武器魔法化

効果範囲内のプレイヤーの武器に魔力を付与するんだけど魔法なんだけど、結構効果があるのかも？

他の戦士達から声上がる

「何なんだこの威力っ」

「この力があれば勝てるぞっ」

そんな大声が上がるが、

え、ただの魔力付与なのにそこまで驚かれても……

だけど、さらに気を良くしてしまうのは力を持つ者の特権だろうか？

マス・マジック・ヴェスメント
 集団・魔法の装束

マス・キユア・シリウス・ウーンス

集団・重症治療（このくらいで、適当に回復していけば問題ないだろう）

今度はガゼフも含めて、全員に効果が及ぼされる。

敵の魔法詠唱者達から、炎の上位天使だけでは火力が足りないと思われる防御系強化魔法であろうか。

魔法の矢、束縛、炎の雨、聖なる光線、衝撃波、恐怖、呪詛、．．．いくつもの下位魔法が襲う。

「ああ、面倒くさい．．．
マス・アンティマジック・フィールド
 範囲強化：拒否魔法の場」

飛ばされていた魔法すべてが打ち消された．．．．．さら
 に召喚されていた全ての天使たちも消滅した．．

「そんなわけがあるかあああああああ。あれだけの魔法を打ち消すだどつ。そんな
 ことが出来る人間が存在するわけがないっ」

「ガゼフストロノーフ殿。今なら敵は魔法が使えないぞ。攻めてくれ。」

ガゼフが最初の勢いそのまま進む。

グレンの強化魔法が、ガゼフに更に力を与える。

ニグンは、いくつもの魔法防御がかけられるのを見て、切り札を切る覚悟を決める。早すぎる判断かもしれない。だが、後方支援をしているあの人間は、ガゼフよりも危険だ。

どう少なく見積もっても、あれを倒さない限りは絶対に勝ち目がないのだ。

このアイテムの使用方法を教わった通り、その切り札を天に掲げ、祈りつつ思いを声にだす積りで祈る。

「これを見よ。これがお前への切りふ……………」

その瞬間……………手から……………希望が消失する。

いや、切り札なら相手に見えないように切るものだろうにと思うんだけど、この世界の人間は違うのか？

その手にはニグンが掲げた魔法封じの水晶が敵の手に……
き、貴様何をしたっ（といたいたらしいような顔をしている。驚きの甘り声が出ないようだ）

「だって、ほら……明らかにこちらへの切り札を使おうとしたみたいだから、この鞭で奪ったんだけど……」

ば、ばかなああああああああ（と言っているんじゃないかと思う）

「馬鹿って、切り札を頭上に掲げるなんて真似をする人に言われたくないんですけど……」

ガゼフの剣がそのままニグンに切り付けられる。

「そんな捨て台詞吐くくらいなら回避行動くらいすればいいのに……この世界の指揮官は馬鹿なのか？」

その瞬間、ガゼフの剣がニグンを切り殺した。

「ふん、この世界最強の戦士と言われていてもこの程度か……」

モモンガは確信した。この近辺にアインズ・ウール・ゴウンに勝てる存在はいないと。もし敗れる可能性があるとするれば、プレイヤー達がかつての規模で波状攻撃をしかけてきた場合だけだと。

確かにこの周辺は人間国家だけなのかもしれない。だが……この程度が滅ぼされない国家なのであれば、敵ではないと……

「お疲れさまでした、グレンさん」

モモンガさんが明るい声をかけてくれるので

「そりやまあ明らかに格下ですからね。後ろから見ただけで終わりましたよ」

「もしよろしければ、捕えた残りの捕虜をこちらに預けていただけませんか？情報が引き出せましたらお話ししますし、

もちろん装備など剥いだものはお渡ししますから。」

なんと、装備をもらった上に情報までくれるとは何と気前がいいのだろう。くれると
いうのであれば頂こう。

「いやあ申し訳ない。遠慮なく頂ます」

「有難いです。では、一人は戦士長殿にお渡しするとして、残りはこちらでお預かりしま
す」

「ははは、こちらとしては、面倒を処理してくれるので大助かりです。まあついでといっ
ては、噂のナザリックを見てみたいところですが」

「そうですね、同じ同郷です。一度ご招待しましょう。これが終わり次第帰りますが、一緒に帰りますか?」

「え、いいんですか? いやあ、噂でも名高いナザリツク地下墳墓を見られるとは、有難い。是非お願いしたいです。戦士長さんは、

「ここで何日か休んでいくとのことなので、1日ご迷惑してもかまいませんかね?」

「こちらは、1日休ませていただいてから周囲を確認したのにち戻ろうと思う。2日ほど確認してから戻ろうと思うので3日後に

戻ろうと思う。お二人を王国で歓迎したいので、出来ればお二人一緒に招ければと思うのだが」

「いえいえ、私はなにもしておりませんから」

「俺は報酬を受け取りたいので後で合流したいと思います。1日で帰るつもりですが、戻らなければ後で追いかけますよ。」

では、アインズさん。少しかお世話になります」

「こちらこそ、歓迎しますよ」

「あ、シロモフ。すまないが、この村でちよつと待っていてくれ。もう問題ないと思う

が、この村の防衛を頼む。

「ご飯は、村長さんに必要分渡しておくから。」

そういつて、シロモフ用のペレットをいくつも作り出す。

「村長さん、申し訳ないが1日預かってもらえますか？」

「ええ、ですが……だいたいじょうぶでしょうか？」

「ご主人さまがいないのは、さみしいっすけど1日くらいがまんするっす」

「なるべく早く戻るから、頼むよ」

「グレンさん、別に連れてきていただいても構いませんが？」

「いえ、初めて訪ねるお宅へ動物と一緒にというのは、どうかと思ったので」

「それなら構いませんが、」

転移^{ゲート}門

そうして、グレンはナザリック地下大墳墓に赴くことになったのだった。

6. ナザリック地下大墳墓

あれ、ナザリック地下大墳墓に来たんだよね？

ゲートの抜けた先は、ロイヤルスイートルームともいべき豪華な部屋だった。

ナザリック地下大墳墓って、周りが沼地で、結構怖い雰囲気墓地っぽい場所だったと思うんだけど。

wikiで見たんだけど、かつて1500人という尋常じゃない規模の人数で襲われたという事件があったらしい。

By動画よりの有名な事件より

その時の動画で見た情報で少しは知っていたのだが、これをダンジョンというのか？

「あのく、アインズさん？本当にここがナザリック地下大墳墓なんですか？」

「？ええ、そうですよ。ここは9階層の私の私室です」

え．．．9階層？

「えっと、記憶違いでしたら申し訳ない。この拠点つて8階層だったと思うんですけど」
「あ、そうでしたね。元々は8階層だったのですが条件をクリア（課金ともいう）すれば、階層は広げられるんですよ」

「へく、拠点を所持したことが無いというか、ギルドに入ってなかったので知りませんでした。そんなことが可能だったんですね」

「では、こちらへ。話をするなら円卓の間がいいと思います。飲み物をあとで運ばせませので、一緒に行きましょう。」

アルベド、メイドの誰かに円卓の間までお茶を頼む。私の分は不要だ。」

「は、畏まりました。ですが．．．いえ、アインズ様のご決定に異論があるわけではあ

りませんが、なぜ人間ごときを御招待なさったのですか」

グレンに聞こえるようにアインズに問いかける。

うゝむ……何かした覚えがないんですけど……どうやら嫌われたらしい……
まあNPCだし人間種を嫌う設定にでもなっているのかな？ 確か異業種専用ギルドだったよな？

「アルベド。私が決めたことに異論を挟むことは許さん。」

「はっ、申し訳ありませんでした。メイドに連絡して、すぐに御茶を運ばせます。」

そういつて、アルベドさんが退室した。

「いやあ、失礼しました。まだ全てを把握していないのですが、どうやら人間種を嫌う設定があるようですね」

「そうみたいですね。なんでしたら、先ほどの村……カルネ村でしたね。そちらへ戻りますが……ちよつと怖いし」

いくら同郷の人とはいえ、本拠地に踏み込んだのは失敗したかな・・・気分はぼったくりバーっぽい場所に来た気分だ。

「いえ、そんな。こちらこそNPCが失礼を。ですが、私としては、こちらに来てからの情報交換をしたいと思いますので、よろしければ

いかがですか？」

そう言われては、一緒に行くしかないよなあ・・・少なくとも、アインズさんは敵対する気配は無いんだから。

「こちらこそ怯えてしまって申し訳ないです。なんでかあのアルベドさん？つてかたが怖くて・・・」

「?そうですか、まあ危害を加えることは無いと思いますので、どうぞこちらへ」

いまだかつて、だれも踏み込んだことのない9階層を歩く。そのすごさに、驚きを隠せないでいる。

そのせいか、見とれてしまい何度も足を止めてしまって、円卓の間にたどり着くのに時間が掛かってしまった。

アインズさんに悪かったかなと思うけど、何故かアインズさんは機嫌がよさそうだった。
 ??????
 なんてだろう???

円卓の間に着くと、その大きさにびっくりしてしまった。

41席を囲む丸いテーブル?。なんというか、映画でありそうな騎士たちが並んで会議をするのに相応しい場なのだが、2人で会話するには

広すぎないだろうか?

と思っただが、先ほどのアルベドと、メイド?がいるから、アインズさんはここで話をする気なのだろうと思う。

「アインズさん、あのメイドさんは?」

「あれもNPCで、一般メイドと分類されるNPCです」

とりあえず、入れてくれた御茶を飲んで落ち着こう・・・・・・・・念のためアインズさんに断ってから

毒の感知：ディテクトポイズン

「アインズさん・・・・・・・・すっごくいい毒が入っているんですが・・・・・・・・」

「アルベドオオオオーツォ」

アルベドをすっごい勢いで怒りつつ、謝れながら、別のメイドに入れなおさせたお茶も念のために確認してから口にする。

ああ、この子のお茶は美味しいなあと。

気を取り直し「他にもメイドがたくさんいるとか?」

大変申し訳ないとジェスチャーしつつ（表情無いけど、それが伝わってくるよ）

「ええ、戦闘メイドのとか、今のいる一般メイドなど、結構たくさんいます。あ、執事もいますよ」

「なんてすっごいつ。まさにあの漫画が現実化したようなすばらしい場所なんだつ、まさにホワイトブリムさん原作のあの漫画の世界だ」

「ホワイトブリムさんをご存知なんですか!?!」

「そんなの当り前です、あのメイド服がおれの正義と言いつ切っている漫画家を知らない

メイド好きはいませんよ」

「ああ、漫画家としての彼をご存知なんですね、嬉しい限りです。実はホワイトプリムさんは、ユグドラシルのプレイヤーで、

そのままの名前で月刊誌に掲載しているんですよ。」

アインズ・ウール・ゴウンのギルメンです。

そういわれてショックを受けた。あのコミックも初版で集めている程度のファンだが、リアルを優先して引退したプレイヤーだと知って。

なんとなく複雑な心境だった………漫画描きながらDMMOは無理だろうな………

その落ち込みをごまかすために

「アインズさん……向こうに戻るか、いや戻れるかは別として、リアル情報をばらすのはだめなのでは？」

ハッ

「忘れてください………」

今の会話で理解した。モモンガさんは、ユグドラシルで過ごした時間が本当に大切だったんだなあ

ギルメンがリアルで頑張っている人がいて、でも、いなくなつて……でもその名前を聞けばつい漏らしてしまつて……

「アインズさんは、本当にユグドラシルが好きだったんですね」

「ええ……大切な世界でした……」

その言葉を聞いたとき、何といえはいんだらうか。この人も、ユグドラシルがなくなるのと知つて絶望という言葉がある心の喪失に出会つた

野ではないだらうかと感じた。

この人なら、このアイテムを預けても大丈夫かもしれない。少なくとも、シーフ系スキルで盗まれる可能性を考慮すれば大丈夫じゃないかと

思つたんだ。

「アインズさん。拠点を持ちつつユグドラシルを愛していた方として改めてお願いがあります。」

アイテムボックスから、嚴重に鍵を刺されたアイテムボックスを取り出す。

「ん？これはPKされたときにドロップしないようにするか、シーフ系スキルを妨害す

る効果の課金アイテムですね」

「ええ、実は中二病がでてしましまして、言いづらいたのですが、自分が格好いいと思ったセリフ集とポーズ本が入ってます」

「ああ・・・それは確かに人に見せたくはないですね・・・」（モモンガさんも似たような物を持っているので言えない）

「頭の中には入っているのですが、捨てたくもなく、だけど取られたくは無いので、できたら預かって欲しいのですが」

それは、嘘も含んでいるが許してもらえらるだろう。本当に黒歴史本も入ってはいるが、もう一つ絶対に使われたくない物が入っている。

なぜならそれは、ユグドラシル最悪のものなのだから。

その名も

聖者殺しの槍（ロンギヌス）

1v差を無視するどころの話ではない。1LV対100LVでも、相討ち、にできる

「というか『消滅』させるワールドアイテム

「私に預けるのですか？これは他者には見られたくない、ある意味最恐のアイテムですよ。」

「気づいて……はいないよな。確かにリアルで知られば、とんでもない最恐のアイテムだ。」

「誰にとつても黒歴史は絶対に人に見られたくないんだ。」

「だけど、その中二病を盾にしてもワールドアイテムの事は隠さなければならぬ。このワールドアイテムに対しては蘇生アイテムも蘇生魔法も無意味だ。」

「そうですね……もし他にプレイヤーがいたとして、

「俺が持つていても、シーフ系に特化しているプレイヤーでは盗み取ることが可能だということ。」

「出来れば、誰も手が出せないところに隠したいって思っていたんですよ。」

「難攻不落といわれる、ナザリック地下大墳墓なら侵入できる存在はいないでしょ？」

「アインズさんが、このアイテムを持ち出さないという条件で、ですけどね。」

このアイテムは危険過ぎます。俺個人に対してですけどね……」

それが、理由だとアインズさんにこのアイテムを渡した……大丈夫だろうか？

ただし、追加で課金アイテムを使用し嚴重に封印して鍵は俺があずかる。

「確かにこのアイテムをお預かりします。これは宝物殿に入れておきましょう」

大丈夫、この人なら絶対に開けないと思う。同じ嫉妬マスクを持っているんだ。きっと同じような黒歴史本をもっているはずだ。

もっていてくれ……

その後、お互いが今後どうするかということ話を話していた。

「それじゃアインズさん、今後の予定は、王国で冒険者をするんですか？」

「ええ、情報収集を兼ねて、エ・ランテルへ行こうと思います。」

「それなら、俺はスレイン法国へ行こうかな？」

「ガゼフさんと、王国へ行くって言ってませんでした？」

「さっきの戦闘中、魔法による監視をされていたんですよ。何にせよ、一度窺って、対応を見ておいた方がいいかなあと。」

「六色聖典？が重要部隊なら、あれを壊滅させた相手に敵対する気が起きるとは思えないんですよ。」

「それなら止めませんが、せめてガゼフさんとの約束は守るべきでは？」

「——せめて報酬を受け取ってから行くとします。約束というか、契約を破るのは営業マンとして最悪な気がしますので……」

リアルで、俺がやられて嫌だったことを思い出す。

なんだよ、あの社長やら、役職者やら……電話で約束していたにもかかわらず、勝手にどこか行きやがって。

なんか都合があるのかもしれないけど、約束したじゃないか……会うことすら拒否されるって超落ち込むぞ……

アインズさんも納得できる部分があったのかもしれない——

そうしてカルネ村へ戻ることにしたのであった。

7. 王国

6. 王国

王国へ向かう戦士団の姿があった。その中に白い塊がいる。

白い塊こと、シロモフの上にはウエスタンハットを被り、服のすそにはひらひらとした飾りがついている。

傍目に見ても丈夫そうな生地であり、一目で旅装と思われるものであった。

実際には、伝説級装備であり、聖遺物級の防御力。だが、もつともデータ量を割り振られているのはティム成功率の上昇だった。

この効果を付与するために能力的には今一つなのだ。

ティム目的でユグドラシルをプレイしていたのでティムさえ成功すれば他はどうでもいいのだ。

そういう意味合いでは、この装備は都合がよかったのだ。特に人間種だったため滅多に狙われるということがなかったからね。

ちなみに指輪なども、全てティムと、召喚モンスターとペットの強化に特化しているので、召喚が出来ないとユグドラシルでは結構弱い。

代わりに、召喚モンスターさえだせれば、結構いいラインまで戦える。

ちなみに、

グレンさんは自力で設計する技量がなかったのでイメージを伝えて、制作を請け負う鍛冶師ブラックスミスに作ってもらった物と、露店に売られているもので装備は買いそろえました。

「ガゼフさん、報酬の確認をしたいんですけど」

と、馬上のガゼフに話しかける。

「そうですね。如何ほどなら満足していただける?」

よく、あの飛び跳ねる背の上で落ちないでいられるなど、その安定したバランス感覚に感心する。

あれだけの強化魔法に、回復魔法を行使して尚且つ身体能力まで高いとは・・・困ったな。こちらの世界の常識が無いってことがバレ・・・ま、いつか。正直に言うてしまおう。

嘘をついた方が辻褄合わせで不審がられるかもしれないし。

「ん〜こちらの相場が実はよくわからないんですよ。銅貨、銀貨、金貨で支払いをしているとは聞きましたか？」

「ええ、そうですね。ということは、相当遠くから来られたのですか。たとえば、金貨3枚あれば、平民が1か月生活できます」

それならばと思い、

「じゃあ金貨30枚で」

3枚で1か月生活できるなら、これくらいもらえば十分だろう。ほぼ年収に相当する金額を要求したのだ。

「グレン殿は欲が無いのだな」

ガゼフは驚いていた。もっと、遥かに多い額を要求されると思っていた。

あれ、なんかまずった？

「路銀が欲しいだけですから。」

それなら、追加報酬として先日の陽光聖典の装備を引き取ってくれるところを紹介してもらえませんか？

王国も見回ってみたいので案内してもらえる方を貸してください。」

「それならば私が案内しよう。装備も王国で引き取らせていただけないか？無論相場を誤魔化したりしないし、色を付けさせていただくが」

ガゼフさんなら、嘘をつくこともないだろう。

「それじゃお願いします。」

ガゼフ達がいるおかげで検問所など簡単に通過していたが本来であれば、通行税が取られる。

しかも魔獣を連れている場合は登録が終わらないと通れないらしい。

登録できる場所も紹介してもらおう必要があるようだ。あ、でもこの世界の文字ってどうなってるんだ？

ガゼフにこの世界の文字を見せてもらったが、読めん——

報酬をもらったら、スレイン法国へ向かおうと思っただけで予定変更しよう。

この世界の常識を学んで、多少文字を習わないと、かなり困りそうだ。

あ、誰に習えばいいかな。ガゼフさんに頼むわけにはいかないし・・・

頼めば教えてくれるだろうけど、さすがに王国でも偉い人に習うのはちよつとな。

観光中に考える・・・か？学校みたいなものでもあればいいんだけど。

王国に着くなり、報酬を渡したいので城まで来ていただけいと言われる。

城を見物するのも悪くないと思いき快諾する。

城かあ。写真でしか見たことないけど立派なんだろうなあ。

城門でに着くと、シロモフが囲まれてしまう。

「戦士長殿。この魔獣は一体っ!？」

どうやら スピアニードルのシロモフが恐れられているようだ。

街中でも注目されてるなって気はしていたけど、まさか怖がられているなんて・・・

「安心して大丈夫だ。騎乗されている方の魔獣だ」

「・・・これほどの魔獣を従えているなんて」

「可愛いでしょう？危害を加えなければ悪さはしないので安心してください」

危害を加えようとすれば、衛兵が全員殺されるかもしれないけど。

「大丈夫です。襲わないです。」

「しゃべった!? もしや森の賢王とかでは」

「いえいえ、違いますよ。」

「驚くのは無理だと思うが……至急、王にお会いしたいのだ。こちらのお方の身分は私が保証しよう」

「戦士長がそうおっしゃるのなら」

「そういつて、衛兵長? つばい人が下がる。」

「ですが、城内を魔獣が歩くのはいかかかと思うのですが。」

「それもそうか」

「シロモフ、悪いけど、城門前で適当に待っていてくれないか?」

「了解です。」

「おやつ代わりに、ペレットを一個作成して置いておく。」

「ガゼフさん、お待たせしました。」

「こちらこそすまない。では、王の間へ行くでしょう」

「え、王様と会うの? なんで?」

「王よ、只今戻りました」

あれが王様かあ。ずいぶん痩せているみたいだけど王様は小食なの？イメージしていた王様つてのはお腹が出てていかにも美味いもの食つて

ますよ。つて雰囲気だと思つてたんだけど。

初対面で気づくはずがない。王派閥と貴族派閥の争いが続いており、王国を蝕んでい
るのだ。

さらには毎年恒例の帝国による攻撃でさらに蝕まれている。

そのことが王に苦勞を掛けているのだった。

「よくぞ戻った。ガゼフよ。して、そちらにおられる方はどなたかな？」
帽子を脱ぎ頭を下げる。

「おっと、失礼。グレン・ターナーです。あなた方でいうところの旅人ですよ。

村が襲われていたときにたまたまガゼフさんと会ったんです。」

「王よ、そのことでご報告したいことが。近辺を回りましたが、いくつかの村が壊滅させられていました。最後にカルネ村へよつたのですが

帝国の鎧を着たものに襲われていたところを、こちらのターナー殿と魔法詠唱者であ

るゴウン殿が助けてくださいました。」

「して、ゴウン殿はどちらに？」

「そのまま、ナザリツクという場所へ戻ると言っておりまして。できれば王国に来ていただいてお礼をしたかったのですが」

「そうか、村を救ってくれたことに感謝せねばな」

「帝国の鎧を着たものといいましたが、どうやらスレイン法国の手の者のようでした。

その者たちを倒した後でスレイン法国の六色聖典と思われる部隊が現れ、ターナー殿の協力により無事を得ました」

「無事を得たのは分かるが、その六色聖典の者はどうしたのだ？」

おや、会話に入ってきたけど、王様の横に居たつてことは大臣とかいう役職の人？

王様の横には、それっぽい服を来た、あれが貴族の服つてやつか？昔の中世物の物語に出て来そうな服を着た人がいた。

レエブン候と、ブルムラシユー侯爵だ。

「いえ、生き残つた者はゴウン殿が後処理をするといつて、連れていきました」

「馬鹿な、スレイン法国がこのような事をしたといつるのであれば、こちらがそいつらを捕虜にするのが道理ではないかつ」

ブルムラシュー侯爵が、憤然とした面持ちで怒鳴る。

「だいたい、戦士長ともあろうものが得体のしれない魔法詠唱者と、その汚らしい旅人の力を借りるなど。その地位に相応しい行動では

ありませんな」

「ブルムラシュー侯爵、助けて頂いた御仁にそのような無礼はやめて頂きたい」

「ふん、戦士長も落ちたものだ」

ああ、なんでこんな風に言われにやならんのだろう。あとで、どういう人物か聞かないと。王様はまともっぽいのに、このブルムラシュー

侯爵は気に入らないな。殺してやろうか？

この数日間で、自分の手でも殺してしまったせい、安易な考えをしてしまう。

何人も死ぬのを見て慣れてしまった？

1人殺せば一生悩み、2人殺せば悔やみ、3人殺せば慣れてしまう。そういう本があつたな。なんていうタイトルだったろう？

俺も慣れたのか？

ピーストタイマーの能力と、100LVの能力が合わさって当然足は速い。それは常

人が理解できないほどに……

一瞬にして近づき首を持ち上げる。

「な、何をする。貴族である私に向かつてっ」さらに首を絞める。

苦しみがき泡を吹きそうなタイミングで手を放す。

突然のことに戦士長もあつけにとられる。

床の上で、ぜえぜえと呼吸を整えようとする貴族に上から声を掛ける。

「分かりやすいように力を見せてあげたんですよ。」

「貴様、貴族にこんなことをしてただで済むと思っっているのかっ」

「王国の人間じゃないし、ただで済むと思っっているんだよ？」

砕けた口調だが、恐ろしい殺気を込められていたのかブルムラシュー侯爵は黙って出て行ってしまふ……

「身内の者が失礼しました。」

もう一人の貴族が頭を下げる。お？この人は普通というか、理知的な感じがする。

「いえ、こちらこそやり過ぎたかもしれません。」

「ははは、貴族にああいうことをする者はなかないのでね？」

ブルムラシュー侯爵にも薬になったでしょう。どうも貴族というのは、貴族、王族でなければ、ああいった態度をとるもので」

ふくん、貴族ってそういうものなのか。何というか、まさに本で読んだ悪役貴族そのものだなあ。他にもたくさんいるんだろうか？

その後、報告を終え、俺としては待っていた報酬の受け取りとなった。

王様が、国の宝であるガゼフ戦士長を救っていただいたのに金貨30枚ではさすがに少ないと思うのではとかなんとか言っていたが

大したことをしたつもりは無いので、そのまま受け取っておく。

ただ、城内を割と自由に歩き回って構わないということ、城内の個人部屋を貸してくれるというので、ここを当面の拠点にしよう。

しかも装備品が想像以上に高く買い取ってもらえたので、かなりの金貨となった。さすがに、かさばり過ぎて邪魔過ぎる。

ここでアイテムボックス開くわけにはいかないし……どうやら、この世界の者はアイテムボックスを持っていないようだ。

実は金貨の10倍の価値を持つ交易共通白金貨が、あるのだが知らないので両替してもらおうという考えが浮かばない。

その結果、無限の背負い袋をこつそり取り出し、押し込んだ。

今度からこれを1個は担いでないと怪しまれるかなあ……ある意味羨ましい悩みである。

城内を少し案内してもらい、クライム君と出会った。

王女に直接仕える王女付の兵士らしい？。少し話してみたが、生真面目で好ましい性格をしている。

こういう子は好きだよ。

いや、趣味とかそういうのじゃなくて、人物として好ましいって意味でね？

ガゼフさんに……曖昧にだが……王国内での微妙な立場を教えてください、何だか手助けしてあげたいなあと思う。

戦士の強化つてどうすればいいんだろと思うけど、アドバイスなんて何もできない。模擬戦くらいならできるけど、鞭以外だと、短剣なら少しは使えるし、それで練習相手くらいならできるかも？などと考えていた。

王国を旅行？していい

冒険者ギルドや、魔術師ギルド、酒場、ついでに娼館も。など概ね用がありそうなところを教えてもらい部屋に戻ってきた。

シロモフを部屋に連れていきかけたのだが、止めてほしいとお願いされた。サイズ的にも扉通れないしね。

そんなわけで、今は馬小屋を丸ごと借りている。藁に包まれて意外とご機嫌そうだった。

さて、宿をとる必要があるかと思つたがこれで必要がないな。

今後の方針を決めなきゃなあ。報酬をもらったらスレイン法国へ行こうと思つてたんだけど、文字の習得が先か・・・

文字を読むためのマジックアイテムは持つてないし、読めても書けなければ都合が悪い。

城内で教えてくれる人を探すか？

でも、貴族に教わるのは避けたいところだが……何となく馬鹿にされそうで問題を起こしてしまいそうだ。

あのレエブン候なら頼めば教えてくれそうだけど、聞いた話によると6大貴族の筆頭で王派閥と貴族派閥のどちらにもすり寄っているらしい。

派閥に巻き込まれたくないし、誰もいなかったら頼んでみよう。

他についていうと、ガゼフさんの部下の人たちとか、クライム君とか。あ、クライム君はいいかもしれない。

訓練に付き合う代わりにとか

言えば教えてくれるかも？

よし、明日頼んでみよう。

翌日、クライム君の私室を訪ねると誰もいなかった。

結構早い時間のはずなんだけど、どこ行ったんだらう？朝食か？

数は多くないが、何人かが食事をとっている。

ついでにご馳走になっておこう。

ジャガイモに、パン、シチューか。うん、結構うまい。パンがちよつと硬いがこれはこれでいい。

食器を返そうと思って、返却口へ。

足を出してきた奴がいたが、逆に踏みつける。なんか文句を言ってるが無視する。どうせ何をされようが負けるわけがないし。

（あとで分かったがブルムラシユー侯爵の派閥らしい。今度闇夜に紛れて襲つてやろうか？）

食べながら考えていたのだが、兵士の仕事って何をやっているんだ？

その辺の適当な兵士に聞いてみると主に警備任務が多いらしい。あとは所属する部隊での訓練とか。

クライム君って、そういうえば王女のお付きらしいので王女様の部屋へ向かう。

行つていいんだらうか？まあ好きに歩いていいって言われたし、気にしないで行こう。王女様には用が無いし。

美人なら会ってみたいけど………

場所を聞いて向かうと、部屋の前に立っているクライム君発見。

「おはようございます。ターナ様こちらへ来られたということは、王女様への謁見でしようか？ 王女様にお会いするには王のご許可が

必要なので申し訳ありませんが………」

「いやいや、クライム君に用があるんだ。朝、部屋に行ったら留守だったみたいで城の中を探していたんだけど」

「それは申し訳ありません。朝は訓練場でトレーニングをしてから、ここの警護に来ていますので」

「訓練場にいたのかあ。そこには行かなかったから気づかなかったや」

「ですが、私に用というのは？近衛の任務中ですので離れるわけにはいきません」

扉の奥から声が響く。

「クライム？どなたかおいでたのかしら？」

「ラナー様、昨日ストロノーフ様がお連れになった、ターナ様がいらつしやいました。」

「面会の予定はなかったと思うんだけど？」

「いえ、ラナー様ではなく、私に用があるとのことでした」

「それなら構わないわ。クライム入ってらっしゃい。ターナさんもどうぞ」

ずいぶん気さくな王女様なんだなあ。簡単に入ってこいって言うなんて。

入ると先客がいるようだ。ほくブロンドの髪をした美人さんだね。もう一人は……忍者？

となると、明らかにお姫様っぽい恰好をした金髪の女の子がいる。彼女がラナー王女様かな？

アダマントイト級冒険者蒼の薔薇のラキュースと、ティアだ。

3人に名乗られたので、こちら名を返す。

自己紹介も済んだのでよければお茶を勧められるので頂戴する。クライム君は遠慮しようとしていたが結局座ることに。

部下と一緒にお茶を飲むこともするのか。ますます気さくな人だと思う。

「ところでお聞きしたいのですが、アダマンタイト級というのは？」聞いたことが無い言葉だ。

「・・・え、この国にいて私たちのことを知らない人がいるなんて。もしかして冒険者も知らないとか？」

そんなにも有名人なのか——

「かなり遠いところから来たので、この辺の常識をまったく知らないんですよ」

もう知らないものは知らないと言ってしまう。

「どう説明したらいいかしら。そうね、まず冒険者はご存知？」

「察するところから魔物を対峙したり、秘境を探る人達ですか？」

「だいたいそうね。冒険者ギルドに所属していて、功績を上げ昇格試験を受けるの。初めは、鉄から始まって、銅、銀、金、ミスリル、

オリハルコン、アダマンタイトの順で上がっていくわ。王国にはアダマンタイト級のチームは私たち蒼の薔薇と、朱の雫の2チームのみよ」

なるほど、最高位の冒険者ともなれば有名人なのだろう。だけど、アダマンタイトが

最高位？

「もつと上の階級はないのですか？例えば、アポイタカラとか、ヒヒイロカネとかの七色鉱なんて、あつてもよさそうだけど？」

「アポイタカラ？ヒヒイロカネ？どういう鉱石なの？」

「ありや、知らないのか。この辺では産出されないのかな？」

ポケットを探るふりをしてアイテムボックスを開く。確か少し残つてたと思うんだけど。

ユグドラシル時代、この鞭を作つてもらうために露店で買い集めたものが少しあつたはず。高かった・・・ヒヒイロカネの欠片を取り出す。

元の世界では伝説というか、存在が疑われる鉱石だが数々のゲームでは名前が出ていた。

「この世界ではどういった位置づけになるのだろうか？」

「この鉱石ですよ」

「手にとつても？」

「どうぞとジェスチャーで示す。

「専門家じゃないから分からないけど、火が揺らめいている輝きとでも言えばいいのかなしら？見たことが無い鉱石ね。」

よければ、何日かお預かりしても？」

どうせ、たったあれだけの少量じゃ何もできないしな。

じゃあなんで売らなかつたかつていえば、取っておきたかつたからつていうただのコレクター魂なだけ。

「そのくらいの量であれば、使い道がありませんから差し上げますよ」

「そう？それじゃせめてものお札に、なにかあれば言つてください。出来る限り手伝いますから」

「その時はお願いします」

そこでラナー王女から声がかかる。

「ところで、クライムに用があつたとのことですが、どういったご用件だったのかしら？」

「ああ、えつと……とても言いにくいのですが、この国の文字の読み書きを教えるもらえないかと」

「相当な魔法詠唱者と聞いていたのですが、読み書きができないのですか？」

クライム君からも、そう言われて、せめてもの言い訳をする。

「実は、ちよつとしたトラブルに巻き込まれましたね。ここからかなり遠い場所にある

国から飛ばされたんですよ。ガゼフさんにこの世界の

文字を見せてもらいましたが全く読めませんでした。」

そう言つて、適当な紙にひらがなとアルファベットを書いてみる。

「これが俺の国の一般的な文字なんですけど……」

確かに見たことが無い文字だ。

「私などでよければ公務の時間外でよければ教えられるだけは構いませんが……」クラ
イムがそう答えたが

「いえ、さっきの鉱石のお礼も兼ねて、蒼の薔薇の面々で教えても構いませんけど？」

「あ、そうですか？ 出来るだけ早く覚えたいので、クライム君の空き時間以外は蒼の薔薇
さんのところで教えて頂けますか？」

夜、クライム君の空き時間に、またお願いします。」

そういう訳で、今日から蒼の薔薇の面々に文字を教わることとなつた。

ラキユースに案内されて、王国の宿屋にたどり着く。どうやらここを拠点として使つ
ているらしい。

「雰囲気だけで、すっごい高そうなんですけど、一泊いくらほどなんですか？」

「食事とか条件によるけど、最低で金貨一枚ね」

金貨一枚あれば、平民一人が1か月生活できるんじゃないか．．．．確かに今は金があるけど、定期収入が無い以上

泊まるわけにはいかんな．．．ガゼフさんに頼んで、当面泊めてもらえるようお願いしておこう

「クライム君、アダマントイト級冒険者つてのは金持ちなんだな？」

「ええ、それだけ難易度の高い依頼を受けますから、報酬も高額になるそうです」

でも、冒険者を銅から始めて．．．．．上げてくのはだるい．．．．

入ってみると、1階が酒場兼用の食事場所のようだ。城で朝食を食べたが、目に見える食事は旨そうだった。

「ラキユース、童貞は分かるが、横の男は誰だい？」

大きい女？が声を掛ける。蒼の薔薇のメンバーだろうか。

「その呼び名は勘弁して下さい。ガガーラン様」

移動中に聞いていたメンバー名を聞いていたが、あれが前衛のガガーランか。姉御肌っぽいところは好みだが、童貞って言われると傷つく……

「グレン・ターナです。実は……」

文字の読み書きを教わるために来たことと、その経緯を説明する。

「ほおう。何となくお前さんも童貞っぽい気配がするんだが……?」

はあああ、そっすだよ童貞だよ。別にいいじゃないか……

「ええ……女性経験はありませんよ……どうせなら貴方が教えてくれませんか?」

冗談のつもりで行ったのだが

「おっしや、寢室に行くぞっ」

首根っこを捉まれ2階に連れていかれてしまった。

な……なぜだ身体が動かせない……俺lv100だよなっ!?!王国最強の戦士ガゼフにだって絶対負けないのにつ

卒業できるという誘惑に、例え筋肉ダルマの相手とはいえ姉御タイプは好みなのだ……見かけは違うけど……欲に勝てなかった……

1時間ほどして

「……読み書きを教わる約束だったけど、今日は帰ります……」

「おう、気が向けばまた相手してやるぞ？」

「ははは……その時はお願いしますよ……クライム君、俺は今日はもう休むよ……」

「お、お気を付け下さい。自分も戻りますから、支えますよ」

クライム君に肩を借りて部屋へ戻るのであった。

「ガガーラン……一体どういうやり方をしたんだ？」

イビルアイが訪ねたが

「何、軽く何回か相手しただけだ。さすが初めてだっただけのことはある。いきがよ

かったぜ？」

そうじゃない……。「まあ、ほどほどにな」

ガガーランに襲われて？抵抗しないなら大した力は無いのかもしれない。警戒する必要はないか？

顔を真っ赤にしているラキユースを横目に、あれが敵になることは無いだろうと思うのであった。

ついに主人公は卒業しました。

8. 六腕

ガガーランに手ほどき？を受けてから、女性に対しての免疫が薄れてしまったグレンさん。

調子に乗っていくつもの娼館に行き女性と遊んでいた。

さすがにLV100は尋常じゃない体力を利用してあるので特別な娼館を紹介してもらったことになったのだが……

教えてもらった場所に着くと、空気が怪しすぎる……なんというかボツタくりバーの様な怪しい雰囲気だ。

でも、ここ数日の行動で分かったのだが、lv100のプレイヤーとなると、もはや敵はいない。

どんな状況に陥っても、力づくでどうとでもなるだろうというのが安心を生んでいる

のだが・・・それが災いした。

このオーナーらしい人に、この説明をしてもらった。サキュロントという名前らしい。

ここでは殺さない限り自由にしていいらしい。

——さすがにSMというかDVプレイに興味は無いのだが、口に出しづらい・・・

結構な額を取られて部屋に案内されるが、明らかにおびえている女性がいる。

というか、結構な怪我をしているように見える。こんな身体でこんな商売を出来るのか？

いや、まあお金でいろいろやったけど、うん・・・何となく反省・・・

「あの、怯えなくてもいいよ。さすがにその身体をみてる気は起きないから」

なるべく優しく声を掛けるのだが、もっと怯えてしまった。俺ごときでは想像できないことをされたのだろうか・・・

だけど治療くらいはしないと。あれほどの状態なら何らかの病気にかかっている可能性だってあるんだ。

近寄って、手をかざす。大治療ヒール

全ての怪我、病気が癒され、その愛らしい顔が見える。

「うそ……でも、どうしてもっと早く助けてくれなかったのっ」

見当違いも甚だしいが、今までぶつけられなかった怒り、悲しみを次々と吐いていく。

理不尽だ……が、聞かなくても聞きたかったことが聞けた。

ああ……聞くんじやなかった。

ここでは、これほど酷いことが行われているのか。

元の世界でもこれは無いぞ？いや……たぶん……

何となくムカついてしまった。そうと決めれば行動に移すだけだ。

なんか、最近短絡的というか、我儘になつてる気がする。元の世界に比べて力がある
せいか、俺の進む道を阻むなら邪魔をするな。

というか、俺の機嫌を損なうようなことをするんじやねえ。という気になる。

庶民がとんでもない力を得ると、こうなるという証なのかもしれない。

「この子はツアレという名前らしい。」

「付いてこい」

手を引つ張り、部屋の外へ出て、そのまま出ていこうとする。

「お客様、外へ連れ出すことは許可していませんが？」

さきほどのサキユロントと言っていた奴だ。

「ここでのやり方が気に入らない。だから彼女は貰っていく。後ほど、ここ潰しに来るから待っていてくれ」

なんとという我儘っぷり。俺ってこんなに我儘言うような奴だったつけ。

「おい、テメエふざけているのか」

肩を捉まれ、殴られそうになった。ので、腕を掴んでもおもいつきり握りしめたら……潰れた……

そのまま無視して外に出て来たたら、他に追ってくる奴が一人いる。困ったな。とっても邪魔だ。

と思つたら、外に出たら、こっちの入り口は路地裏のようだ。何故かこの場所に似かわしくない紳士服を来た老人がいる。

「デメエ。うちの従業員をどうする気だ。」

「はああ、従業員つて、こんな卑劣なことをする場所で働かせて、いいと思つてるのか。完璧にこの娘の意思を無視してるじゃないかつ」

「あんただつて、それを承知でここに来たんだろうが。いまさら何を言っているんだ。」

いや……こんな場所だと知っていたら……怒って突撃していたかもしれん。

「知るかつ。少なくとも俺が許せんから連れ出したただけだ。」

「そんなオプシオンは無いつ。あんたが途中で帰るのは勝手だが、その娘は置いていけ」
1

「やかましい、俺が嫌だと言ったら嫌なんだ」

そう言ったら、ツアレが俺の後ろに隠れるように動いた。

「路地裏とはいえ、もっと冷静に話し合うべきではないでしょうか？」

あら、あれだけの怒鳴り合いなのに、このお爺さん見てたのか。
いつからいたんだ？

「おっと、これはお見苦しいところを見せて申し訳ない」
「じじい、あんたは関係者じゃないんだ。すっこんでろ」

第3者から見ても、落ち着いて欲しいって言ってるのに激高しているんだ。程度の低い奴だ。

「ああああああ、もう面倒くさい。つまり彼女を連れ出す場合、追加料金を払えばいいわけだろ？ オプションって言うていたんだから

可能だろ。」

適当にポケットに入れていた金貨を10枚ばかり放る。

「お、俺じゃその判断はできない……」

「じゃ、聞いて来いよ。」

「それは出来ねえ。」

「聞きに行けないってことは別にかまわないうってことだな？」

そういつて、地面に向かって拳を叩き付ける。

あ………思った以上に凹んだ。

怯えたのか知らないが、動かなくなってしまうた。そのまま立ち去ろうと思うけど、この執事服の人はどう対処しよう。

「お見事でした。今の一撃であれば、この程度の者は立ち向かおうとは思わないでしょう。」

おや、敵意はない・・・それ以前に今の地面を凹ます打撃にすら何も感じていない？

「そうですか？それよりも、この辺りは危険があるので、帰った方がいいですよ？」

「そのようですね。念のためですが彼女は大丈夫ですか？」

「ああ、大治療ヒールを使いましたので、問題無いと思います」

執事は、セバスは第6位階にある魔法を使う人間がいたことに驚く。

セバスは微かに驚いた。この世界では3位階の魔法を行使するだけで英雄と呼ばれ

るのに、6位階を使うとは。

だが、奴隷のような立場の人間を助けるなら素晴らしい人間だと思う。

誰かを助けるのはあたりまえっ

そう言っていた造物主を思い出す。

なら、この場でこの者に対して敵対行為を行わなくても問題はないだろう。

そう思い、この場を立ち去るとする。

だが……

「何かあれば、私もお力添えをしますので」

そう言って、この場を立ち去ることにした。

あの執事さん？格好いいなあ。ただ立っているだけなのに、雰囲気というか、なんか格好いい。

ああいうオーラ？雰囲気を漂わせられるようになりたいなあと思ったんだ。

さて、街中から王城に戻る道筋で、この娘どうしよう？というか、この娘だけ助けても、ここでの行為は続くんだよなあ。

こういうのは根っこから潰さないと解決にはならない（たぶん、今まで読んだ小説とかでもそう言ってる場面があつたし）

とりあえず、この子を部屋へ連れて……行つてどうするっ

借りてる部屋に女の子を連れ込めるかっ……

———こういう商売が王国では許されているのかガゼフさんに聞いてみよう。まずは、そこからだ。

ガゼフさんは怒っているようだ。王国では王女の行った政策で奴隷制度が廃止されたい。それにもなつて、そういうった娼館も

禁止されたとのこと。

じゃあ乗り込んで、潰せばいいじゃんということをおブラートに包んで伝えてみる

が、貴族が関わっているらしい。

???じゃあそんな貴族潰して、というか貴族位をはく奪すれば?と思ったが、そうはいかないらしい。

下手に貴族位をはく奪したり、潰したりすると反発者があとを絶たなくなり王国そのものが崩壊する危険があるらしい。

まったく・・・なんのための国だよ・・・国民がいるから、国は成立するのだから。貴族がどれだけ偉いか理解不能だ。

国民のために国があるんだろうに、貴族のために国があるのか思っているんじゃないだろうか。

「ガゼフさん、ようは王が強権を発動させようとするから問題になるわけでしょ?」

「そうなのだが?」

「じゃ俺個人が動いて、こういった娼館を潰して、貴族が違法を犯しているって証拠があった場合は?」

「それは……確かに証拠さえ揃めれば王命によって対処は可能だが、グレン殿に危害が与えられる可能性が……」

「つまり、問題は無いんだ。個人で動くとなると、ちよつと面倒だ……ガゼフさん。ちよつと頼まれてほしいんだけど。」

今、馬小屋で世話になっている、シロモフの世話を頼まれて欲しいんだけど。あと、さつき連れ出してしまったツアレさんを少しの間で

いいから匿ってもらえない？」

さすがに、シロモフの様な目立つ魔獣を連れてつては逃げてくださいと言っているよ
うなものだ。ツアレは……助けた手前見捨てるわけ

にはいかない。

まあシロモフは、この世界の1v基準からしてもやられることなんてないだろう。

一応、こちらを追跡しているものがないか確認しつつ、ガゼフ宅へお邪魔する。
ちよつと大きいだけの質素な家だ。もつと良い所に住めば

いいのに。

出る時も警戒しつつ、先ほどの娼館へ向かう。ツアレのことは、ガゼフ宅の老夫婦に

任せれば大丈夫だろう。

老人というのは、こうも人に優しく接することができるのだろう。

かつての祖母を思い出す。年の功は偉大ということかな？

さあ先ほどの娼館に戻ってきたのだが、おや、人の気配がない？ いや：：少しだけ：：入つてみると、ガガーンがいた。イビルアイさんも一緒だ。

「おう、元童貞。」「どうしてここに来たんだ？」

二人から、気楽？な声がかけられる。

「元童貞は酷いなあ。憧れの姉さんからそう言われると、ちよつとね。さつき、この客としてきたんだけど、あんまりな対応に、従業員を

連れ出ちやつて、あとで文句を言いに来るつて伝えたから文句を言いに来ただけど．．．」

「こういう遊びを覚えちゃったか。ほどほどにしとけよ？」

「ふん」

うわあ．．．なんか引かれてる．．．やつぱり女性からするとこういうのは理解できないか。これからはほどほどにしておこう。

ここで行われていたことを軽く説明した。

「どうやって治療したかって部分は、そのまま大治療ヒールだと伝えたら、第6位階の魔法を使えることに驚かれてしまった。

「そういえば、第3位階の魔法が使えれば魔法詠唱者としては大成しているんだっけか。」

「ガゼフさんに確認はとったんだけど、俺もここまで酷い事をしている奴らは許せないと思ったんだ。で、総元締めを叩こうと思って

ここに戻ってきたんだけど、全員逃げてたか。」

「私たちも以前から八本指を追っていたんだ。その1か所がここらしいと当たりを付け探りに来たんだが・・・」

「お前さんが暴れたせいで逃げたようだ」

ほんのちよつと地面叩いたりしただけなのに、いや、腕潰したりしたけどさ・・・

「金を渡して出て来たのか・・・もしかすると面倒になるかもしれないな」

「どういふことなんですか？」

「金を渡したということは、奴隷売買と取られるかもしれない。王国では奴隷の売買は禁止されているからな」

そうだったか……理不尽な法律と思うもの事もあるが、ルールを守らなければ、不当と思えることでも逮捕されてしまう。

これはこの世界でも同じか……まったく特権階級というやつは苛立つな。でも、今の俺は力があるから逃げられると思うんだけど……

「仕方ない。イビルアイ、他の場所も行ってみるか？」

「いや、予定外の荷物を拾ってしまったんだ。戻るとしよう」

「予定外の荷物って、俺ですか……」

「お前は能力はあるかもしれないが、考えなさすぎるように見える。もし、という言葉は起こってからでは遅いんだ。安全のためには

戻った方がいいだろう」

1 v は圧倒的に上のはずなのに、はつきりと正論を言われては逆らえない……

その後、数日は大人しく蒼の薔薇の面々に読み書きを習っていた。夜はクライム君と会話をしながら、読み書きを習う。

そのラナー王女の話となると、クライム君の態度が違うような？

もしかして身分違いの恋とかだったりして。直球で聞いてみたら、慌てふためいたので確定だろう。

応援したいけど、どうすればいいんだろう？

庶民が王族と一緒になるって、かなり難しいだろう。英雄にでもなれば可能かもしれないけど……

その後何日か真剣に習ったおかげで簡単な読み書きは出来るようになった。

読み書きのついでに、訓練場で遊びがてらガゼフさんの部下と訓練していて分かったことがある。

王国内には俺より強い人間はいない。

陽光聖典と戦ったけど、あれも相当な強さを持っていたのかもしれない。

ガゼフさんが近隣諸国最強と言われているのは間違いが無いようで、蒼の薔薇も言っていた。

だけど、蒼の薔薇が人類最高級の冒険者といわれても、負けることは無いだろう。

一回手合せしたいけど、ガガーランとは・・・戦いたくない・・・

さて、だいたいの読み書きは出来るようになったはず。

試しに、物を鑑定に出して読み書きと話が成立するかを試したくって魔術師ギルドに向かうことにした。

？
というのも、前に奪った魔封じの水晶にいくらの査定が入るか知りたかったんだよね

9. 魔術師ギルド

長い壁が続いているなあ。と思つたら、この壁の内側が魔術師ギルドらしい。

門のところにたどり着くと、

5階建ての塔が3つあり、ガガーランから聞いた「5階建てくらいの高い塔が3つあるからすぐわかる」とのこと。

もうちよつと詳しく教えてくれてもいいと思つたが、この周辺にはこれほど高い建物がなかった。

それで多少遠目から大まかな位置は分かったのだが近づくと塀が邪魔で分かりにくかったんだ。

この門は勝手にくぐつていいのかな？顔を覗かしてみると、衛兵の詰所が左右にあつた。

「すみませくん、魔法アイテムの鑑定をお願いしたいんですけど、どこにいけばいいですか？」

親切にも、詰所から衛兵が出てきてくれた。

と思つたら違うらしい。姿を見るなり、

「ここは魔術師ギルドなんだが、大抵のものなら適当な道具屋にいけば鑑定してくれるぞ。」

遠まわしに断られたようだ。

「結構珍しいものだと思うんだけど」

「見たところ旅の者の者のようだが？ 貴族や、冒険者なら分からないでもないが・・・もしかしてワーカーか？」

「？ワーカーって？」

「知らないのか・・・まあその判断は俺の仕事じゃないし構わないか。ここでの鑑定は結構高いから見合つたものでなければ損だぞ？」

「お金は多少あるから、大丈夫です。」

「じゃあこつちだ。付いてきな」

案内してもらい、古そうな白い建物に行く。その受付に用件を言えばあとは教えてくれるはずだ。

結構親切な衛兵さんだと思い、受付に用件を伝える。

「こんにちは、鑑定をお願いしたいんですけど？」

「いらつしやいませ。鑑定となりますと銀貨一枚となりますがよろしいですか？」
「銀貨一枚か・・・困ったな」

受付嬢は、やはりと思っていた。見るからに旅人の姿で、お金を持っているように見えなかった。また、なんで鑑定にこれだけかかるかを

説明しなくてはいけないのかと、内心うんざりしていたら

「すみません、金貨しかないんですけど大丈夫ですか？」

結構な量が入っていきそうな袋から金貨が覗いていた。

テーブルの上に一枚置かれた金貨を見て、若干慌てる。が受付嬢も教育は受けていたので

「それでは、金貨一枚お預かりします。鑑定されるアイテムをお預かりしてもよろしいでしょうか？」

「これなんですけど」

と懐からニグンから頂戴した、魔封じの水晶をカウンターに置く。

見たことがないマジックアイテムだ。水晶の様だが、どういう物なんだろう？

ちょうど組合長の部屋が開き、エ・ランテル魔術師ギルド組合長ラケシルが出てきた。

「こちらのギルド長との、会談が終わり帰るらしい。」

「おや、珍しいことに鑑定かね？見たことが無いアイテムだが、いや・・・これはもしか

すると」

「どうやら、衛兵さんが言っていたように魔術師ギルドに鑑定品をもつてくることは珍しいようだ。」

「えっと、あなたは？」

「申し遅れた。エ・ランテルで魔術師ギルド組合長をしている、テオ・ラケシルだ。それでこちらのアイテムは？」

「魔封じの水晶です。すでに魔法が入ってしまったのですが、その状態で値がつくか鑑定をお願いしに来たんですけど」

確かになんらかの魔法が込められているようだ。

「よければ、私が鑑定しても構わないかね？ よければ魔法を掛けたいのだが」

エ・ランテルのお偉いさんなら別に問題ないだろう。

「鑑定に必要であればどうぞ」

アブレイサル・マジックアイエム デイテクト・エンチャント
「道具鑑定、付与魔法探知」

召喚魔法が込められているようだが、効力は不明だ。いや、第7位階……の召

喚魔法だっつ

「すげえっ。第7位階の魔法が込められているっ」

そこには先ほどまでの威厳がある組合長の顔ではなかった。見たことのない珍しいアイテムに興奮する少年のような姿だった。

「稀覯本で読んだことがあったが、法国には至宝というべきアイテムとして魔封じの水晶があると。これほどのアイテムをどこで

手に入れたんだっ？」

その大きい声に、王国の魔術師ギルド組合長もでてきた。

「どうした、ラケシル？そんな大声を上げて」

「これを見せてくれ。第7位階の魔法が込められたマジックアイテムだぞっ」

「なにつ、見せてくれ」

そこには、少年の雰囲気をだす組合長たちがいた。

・・・いつになったら鑑定終わるんだろう・・・

いつの間にか、どっちの組合でこれに値を付けるかという話になっている。

「かなり長引きそうですね．．．．」

受付嬢にちらつと声を掛けてみると、申し訳なさそうに頭を下げられる。

ここには初めて来たので見学させていただきますとお願ひすると、受付嬢さんが自ら案内してくれるとのこと。

2人の組合長にそのことを伝えていたようだが、伝わっているのだろうか？

魔法詠唱者を教育する部屋や、図書館を見せてもらい、魔法を研究する部屋があった。何をしているのか分からなかったけど

次の部屋には興味を惹いた。

スクロール作成部屋。ここでスクロールを作っているらしい。

何人もの魔法詠唱者達が、スクロールに魔法を込めている。作り方はユグドラシルと同じで羊皮紙に魔法を込めるようだ。

その際に触媒が色々使われているようだ。ユグドラシルでは金貨だったが、こちらでは他にいろいろ利用できるらしい。

見ていると3位階以下（3位階を込める作業が見当たらないから、もしかして第2位階がほとんど？）

受付嬢に聞いてみると、第3位階を込めることはほとんど無いらしい。というのも使える人物がほとんどいないためだ。

「ふうん、俺も魔法は使えるんだけど、試しにやってみてもいいかな？」

先ほどのアイテムといい、この人はどの程度の魔法を使えるんだろ？

失敗しても羊皮紙が無くなるだけだし、1枚くらいなら使用しても構わないかなと思
い許可してみた。

羊皮紙を1枚もらい、袋から金貨を1枚取り出す。

大治療^{ヒー}

金貨が溶けて、羊皮紙に魔力が込められようとした瞬間・・・燃えた。

「ありや、失敗か」

やっぱりスクロールを作成するスキル取ってないし、出来るわけないか。

「？それは第何位階の魔法でしょう？」（聞いたことが無い魔法だけど、回復魔法？）

「ん？第6位階の魔法だけど？」

何を平然とこの男は言っているんだと思う。周りのスクロールを作成していた人達
も驚いていたけど、

この事は組合長に報告すべきだろうと思い、ロビーへ戻ってきた。

カウンターから見えるロビーラウンジでお茶を御馳走になっていると、組合長2人がこちらへやってきた。

鑑定が終わったのかな？

「よければ組合長室で話をしたいのだが、構わないかね？」

先ほどまで取り乱していた姿は無く、組合長としての気配を取り戻した二人に声を掛けられた。

「ええ、構いません。ところで査定はどうなりました？」

「それも合わせて話をさせてもらおう」

組合長室に案内されて、席に着く。

「果実水でいいかね？それとも酒でも出そうか？」

「いえ、渋いお茶があれば」

先ほどの受付嬢がお茶を持ってきてくれた。

「さて、まずは査定の件を聞きたいだろうから先に言わせてもらおう。私たち2人で話合ったんだが、このアイテムに金額を付けることは

出来ない。あまりにも珍しいアイテムだからだ。さらに、人類が到達したことが無いと言われている英雄譚にしか存在しないと思われる

第7位階が定められている。とてもじゃないが値段をつけられないのだよ。無論、売っていただけのならば、いくらでも積みたいところだが？」

「そうですね、いくらするかを知りたかっただけなので」

第10位階の魔法を定められるアイテムに第7位階つて、やっちゃった系アイテムだと思っただけ、この世界では違うようだ。

机の上の魔封じの水晶を取ろうとしたところで

「それで相談なのだが、そのアイテムを預からせて貰えないだろうか？使用しないことを約束するし、借りている間は謝礼を支払おう」

確かに使う予定が無いし、というか使う必要が無い。預けておくだけで収入があるのなら、構わないかな？

「ええ、使うつもりはありませんから構いませんよ」

「おお、ありがとう。ラケシル、当面は王国側で預かるが構わないな？」

「仕方あるまい。先に王国側に持ち込まれたのだからな。そういえば、このアイテムはどこで手に入れたんだ？ 法国にあるとは聞いていたが」

「あ、それ元はスレイン法国の物ですよ。」

「何？ どういうことだ？」

「実は……」

カルネ村であつた出来事を話す。

「そういう経緯か……しかしガゼフ戦士長がいたとはいえ、六色聖典に勝つとはな」

「これを持っていると、法国から何らかの通達があるんじゃないか？」

組合長二人は考えていた。確かに珍しいアイテムで手元に置いておきたいのだが、これを口実に王国に被害が出たのではたまらない。

だが欲しい……

「実は、戦闘中に魔法による探知があつたんですよ。だからそれを俺が持つていることは知っているとします。」

「魔法による探知に気づいたのか？」

見られていたとなれば確実に何らかの手段を打ってくるだろう。それほどのアイテ

ムなのだから。

「そうなんですよ。見られていたと思うので、一度スレイン法国へ行こうと思つていたのですが。ちよつとした諸事情で滞在しています」

「危険ではないのかね？」

六色聖典を倒したのだ。そういった者が出向けば報復されるというのは想像できる。

「ま・・・それなりに俺も強いですから。最悪逃げられるかなど。それに先に手を出してきたのは向こうなんだから何か落としどころを見つけて

引き上げようと思います」

受付嬢から第6位階の魔法を使つたと聞いたのだから、實力はあるのだろう。

「第6位階の魔法を使えると聞いたが、本当かね？」

「ええ、使えますね。」

第6位階の魔法という伝説の魔法が使えるのだ。恐らく大丈夫じゃないかと思う。

それに・・・彼がいなくなればなし崩しの魔封じの水晶が手元に残る。

今は魔法による探知をされていないようだから、法国も気づくまい。この件に関して

は緘口令を敷かなければ。

その後、一日いくらで預けるかということを約束し、証文をもらう。

文字も覚えたし、そろそろスレイン法国へ向かうとしよう。蒼の薔薇の面々や、ガゼフさん、クライム君に挨拶をして旅立つことにする。

ツアレは、外に出ることが怖いらしく連れていくわけにはいかなかった。

仕方ないのでガゼフさんにお願ひしたところ、快く引き受けてくれた。

せめてものお礼にと金貨を渡そうとしたが、断られてしまった。

命のお礼に、せめてもの恩返しがしたいとのこと。

何かあれば、頼むよ（ガゼフさんくらいの力なら頼むことは無いだろうけど、そう声を掛けておく）

少なくとも、この世界では高い地位にいるんだから、情報って意味では何かの役には立つのではないかと思う。

シロモフを馬小屋から連れ出してもらい、スレイン法国へ向かったのだった。

10. スレイン法国からの道筋で

会話をすることもなく夜道を進んでいた。会話もなく……ただ目的の場所に着くまでの同行と護衛。

シロモフに乗って、また移動かと思っている。それに……

いくらなんでも、これは酷いだろう。そりや陽光聖典が無くなったのは俺にも少しは責任があるのかもしれないけど……

そもそもが、ガゼフさんを殺すなんていう計画を立てなければ陽光聖典が無くなることもなかっただろうに。

スレイン法国に着いた際の事を思い出す。

へえり、ここがスレイン法国か。王国より立派じゃないか。

元の世界と比べるわけには行けないが、交通網の整備に建物の一つ一つがしっかりと

作られている。

遠目から見て街並みが整っていることが分かる。

シロモフに少し離れた場所で待っていてもらおうよう伝える。

さすがに魔獣に乗って敵地にはいけない。

改めて眺めてみるが王国の様にお城に相当するもの。それが見当たらないのだ。

宗教国らしいから神官長みたいな人がトップだと思ふんだよね。

王様にあたる人物はいないだろうし、襲ってきた部隊に関しての事はその人達に聞きたいところだが？

とりあえず、神殿らしいところに行ってみることにした。

これは教会っぽいな。あつちは神社？お寺？しかも鳥居？あれは狛犬か・・・パルテノン神殿？

地球に昔あった神事に司る雰囲気の場合が何か所もあった。もしかして、六大神っていうのはユグドラシルのプレイヤーだろうか？

ここに来ていた人達好き勝手にやってたんだろなあ。もしかして宗教家達だった

のかな？

実際には社会的弱者であつた人類種を救おうとプレイヤー達が頑張つた成果であり、彼らの故郷にあつた建物を模して造られただけだ。

適当に回つてみるか。手近なお寺っぽいところへ行こうとしたら止まるように警告された。

先ほどから取り巻きに見られている気がしていたが、どうやら警戒する人間としてマークされていたのかもしれない。

敵対する意思が無いと伝えると、神官の一人が我らが神官長様たちがお会いしたいとのこと。

こちらとしても望んでいたことなので着いていった。

少なくとも、この周囲にいる人間なら敵ではない。力づくで逃げられることは間違いない。

やばそうな、人間？が一人いた。

少女の姿をしているが、左右で銀色と黒髪をしていて左右の目の色が違う。だが、一番の問題は彼女の装備だ。

明らかに神器級装備で固められている。

彼女は？と尋ねても沈黙……

こつちの質問に答える気はないようだ。

この神官に連れられて、彼女の前を通り抜ける。

「結構強そうね。戦ってみたいな」

後ろから微かにそんな言葉が聞こえたが、こつちとしては戦いたくはない。PVPはほとんどしてないんだ。

装備をガチガチに固めた相手とは戦いたくない。

あれが攻撃してくることがあれば逃げると決めておく。

少なくとも、よほどの逃亡対策をされない限りはカンストプレイヤー同士の戦いは逃げることが可能なのだ。

・・・完全に奇襲された場合は不可能に近いが。

ここが目的地のようだ。通りすがら、案内してくれた神官に話しかけるが何も答えるつもりはないようだ。

全て沈黙で返されてしまった。

こつちに何かの情報を与える気はないってことか？少なくとも友好的ではないよなあ。

無言の仕草で入るように言われたので、入ると扉を閉められてしまった。

普通は閉めるものか。うん・・・きつと大丈夫。

疑い過ぎ・・・か？

少なくとも人類の守り手として動いているとイビルアイさんからは聞いている。いきなり襲ってくることは無いだろう。

逆光になっているために相手の姿をはつきりと確認出来ないが、6人・・・いるようだ。

「先に言っておきたいことがあるんだけど？」

先にこちらの言い分を伝えておこう。そのほうが、相手がどういう対応をするかを見極めて、最悪逃げよう。

「なんだ？」

相手の一人が答えてくれた。

先ほどの神官とは違い会話をする気はあるようだ。

「襲ってきた部隊の件だが、こつちとしては襲われたから俺の身を守ったに過ぎないとい認識でいる。そのつもりで話し合ってもらいたんだけど？」

報酬目当てにガゼフさんを助けただけなんだけど………

「何を馬鹿なことを言っている。お前がしゃしゃり出て来なければ何も問題は起きなかつたと思うのだが？」

「周囲の村を巻き込んで、たった一人の人間をガゼフさんを殺そうと行動することは問題じゃないのか？」

道すがら、何を言われるかある程度は想像しておいた。

いきなり問題を突き詰められれば回答できないが、何を言えば何を返されるかは予め考えておけばある程度は想像できる。

仕事するときだって、事前にどれだけ準備できるか、想像できるかどうかで対応が出来るか出来ないかが決まっていたのだ。

そういう意味では、今言われたことは想定内だ。

「我らは人類こそ選ばれた民だと考えている。そのためには人類をまとめ上げるためにガゼフストロノーフの死は必要だったのだ。」

「少なくとも、その考えは理解できないので敵対行動を取ったんだ。」

何か問題ある？という雰囲気です。

「このままではお互い平行線だな。少なくともこちらの部隊が1つ失われたのだ。少なくともそこに責任を感じてほしいのだが？」

「それを言われると辛いね。だけどあなた方も村人をたくさん殺していると思うんだけど？」

「それを言うのであれば、ニグンより奪い取った魔封じの水晶を返してほしいのだが？」
嫌なことを言う。付き合う必要は感じないが

「あれは、どんな効果があるか気になったから使っちゃったよ」

この件に関しては、嘘をつくつもりだったので予定通りだ。

「これで、そちらの非は2つ、こちらは1つだと思うのだが？」

「回りくどいね。何かさせたいことがあるなら、さっさと言ってくれないか？」

ここまでは予想通りなんだけど、ここから先が想像できなかつた。

「分かっているなら話は早い。先日ある占いにより、カタストロフ・ドラゴンロード破滅の竜王の復活が予言された。

それに伴い、我らが部隊の1つを派遣し支配下に置こうとしている。あなたには同行

してもらい援護を頼みたい」

一人でも多くの戦闘力を必要としているから、俺のような得体のしれない相手でも使おうというのか。

それとも、能力を測ろうと？

考えても答えは出ないな。

「で、報酬は？結構危険なんだろう？」

「お前が襲った部隊は陽光聖典というのだが。そのことに關してのことを不問とすることではないかな？」

「俺としては力づくでどうにかしてもいいんだけど」

「なら、帰ってきてからその件については相談しよう。少なくとも同じ人間種なのだ。分かり合えると思うのだが？」

人間種であることを引き合いに出されると、ちよつと弱いな……

「すぐ出発するの？」

「食料や消耗品などの用意は終わっている」

踵を返し部屋を出ていく。

「案内してくれ。」

少なくともすぐに敵対関係にはならないだろう。よほど破滅の竜王：カタストロフ・ドラゴンロードを警戒しているのか。

だけど、どうやって支配下におくのだろうか？

そういったこともあり、エ・ランテルの近くに來たのだが向こうの部隊名を教えても
らえないどころか、一つの会話もない……

自己紹介すら不要だと言われてしまった。

俺は一体何のためについてきたんだろう………

だが、カイレっていう婆ちゃんは少し話をしてくれた。

この部隊の人間じゃないって言っていた。部隊の人間ではないが法国内でも高い地位の人間らしい。

着ている服のことを教えてくれた。が・・・

え、これ傾城傾国ケイ・セケ・コウクってワールドアイテムじゃね？

ユグドラシルの世界であれば、問答無用で支配下におけるアイテムだよな。テイマーに着く全てのプレイヤーであれば、その存在を知れば

欲しがるアイテムだ。

だけど、確証は無い。が昔から伝えられたつてことは、六大神がプレイヤーだとすれば、俺より先に来ていたプレイヤーが持っていたのか？

噂の範囲だが、存在は語られていた。だけど、誰も手に入れたことがなかったんだ。つまり、過去に居なくなっていたプレイヤーがワールドアイテムを持っていたと過程して、

そのまま転移してユグドラシル上から喪失していた？

それなら、存在していると言われている、誰も手に入れたことが無いとしても説明が付きそうだ。

手に入れたプレイヤーが喜んで Wiki に書き込んだとすれば、存在がしていたという情報だけが残り、その後誰も手に入れないという

ことが成り立つ。

でも、ユグドラシルのプレイヤーであれば、安易に貴重な情報は書き込まないだろうし、何よりゲーム上から

ワールドアイテムクラスが失われていた場合、運営が気づくだろう。いや・・・あの運営なら、そのまま放置とかやりかねない。

なにせ聖者殺しの槍で進行が不可能になってしまったイベントですら、そういう仕様だしってことで放置したんだから。

いくら考えても仕方がない・・・か。

どうせ答えなんてでないんだから。

「止まれ。」

隊長？が指示を出したため止まる。

ん？狼が近づいている？

敵ではないと思うが。

簡単に襲ってきた狼たちを狩っていく。

ああ、ますます俺の出番が無い……

「この辺のモンスターにしては強い気配だ」

そうなんだろうか？

エ・ランテル近くのモンスターの強さなんて知らんよ。もう不貞腐れて付いていく気がしない。

何かすごい勢いで、近づいてくる気配がある。

この部隊の装備を改めてみると、聖遺物級か伝説級も混ざっている。ほとんど俺の装備と変わらないよ……

この世界に来るなんて分かっていれば、もっと課金していたんだけど……こんなことに巻き込まれるって分かるわけがないか。

俺の装備と比べても遜色ないのだ。LV的には勝てそうだけど、全員を相手にするのは無理か？ 召喚さえできれば、でもわざわざ敵対する必要も。

そして服の下に隠してある腕輪の感触を改めて確認する。これがあれば、大抵は大丈夫のはずだ。

俺が持つ2つの神器級装備。名もない鞭と、流れ星の腕輪。

確認したと同時に、近づいていた相手が姿を見せる。

あれは真^{トゥル・ヴァンパイア} 祖[?] ユグドラシルでも高位ダンジョンに存在する姿に似ている。あれはアイテム不可能だった……

このメンバーの装備からすれば勝てるかもしれないけど、この面子だと正面から戦えるのは、カイレの婆ちゃんがアイテムを使うしかないだろう。

その判断は正しかったのか？ 隊長がすぐさま

「使え」

と指示をだしていた。

それが意味することは

傾城^{ケイ・セケ・コウク} 傾国の使用だ。目的は破滅^{カタストロフ・ドラゴンロード}の竜王だが、優先順位を入れ替えたらしい。大したものだ。

目的に引つ張られて、守るべきものを優先したんだろう……と思う？

対象は支配されようとされながら何かのスキルを発動しようとしている。

あれは、やばいつ

腕輪の力を使い、ウィツシユ・アボン・スター星に願いを、を使う。

これが流れ星の腕輪。ウィツシユ・アボン・スター星に願いを、をその超位魔法を経験値の消費なしに使用が可能だ。

アインズさんが持っていた流れ星の指輪と同じ効果だが、使用条件が違う。

240時間のクールタイムが必要だが、冷却期間を置けば再度使用可能。要は10日間待つという条件さえ満たせば何度でも使えるのだ。

この腕輪を実装すると聞いたとき、え、まじつって思ったけど、なんと入手条件が全プレイヤーを巻き込んで、たったの1度きり。

12年間の間で、たった1度しかなかったんだ。

しかも、この腕輪の入手方法がユグドラシル全土でのビンゴゲームという代物。

プレイヤー全員強制参加の運試しだぞ？

まあ、かなり盛り上がった。Wikiにも運営の気まぐれが酷過ぎるとかいろいろ書かれていた。

幸運にも、このアイテムは俺が手に入れることとなった。幸い、宝くじと同じで当選

者は秘匿された。

当たり前だと思いたい。さすがに、こんなレアアイテムを持っていると知られたらPKに会い続けるだろうよ。

持つてないって主張しても、信じないだろうしなあ。

当然のことながら、高額だが、恒久的な効果を持つ課金アイテムによってPKされてもドロップしないよう守ってある。

腕輪に願う思いは一つ。この攻撃を防いでくれ！

腕輪への願いが聞き届けられ、トゥルーヴァンパイア真祖の攻撃が塞がれる。

この超位魔法、ユグドラシル時代と違いすぎる・・・願いの幅が桁違いなのだ。

もしかすると一般人を高位レベルの存在にすることも・・・可能・・・か？

これは誰にも渡したくないなあ。

カイレが守られたが、盾に入った一人が死んでしまったが、
真祖トゥルーヴァンバイアはカイレの支配
下に置かれた……

その結果、トゥルーヴァンバイア真祖……シャルティア・ブラッドフォールンは法国へ連れて
いかれることになる。

11. エ・ランテル

トゥルーヴァンバイア
真 祖を捕獲した後、

当初の目的は果たせなかったが、一つの危険を排除したので無罪放免だろ？

と、言い別行動を取ることにした。

もちろん、トゥルーヴァンバイア 真 祖どうなるか知りたかったので、エ・ランテルで人と会ったら合流

するとは伝えたが。

カルネ村から王国へ向かう途中、通り過ぎただけだったエ・ランテルへ到着した。

向かう先は魔術師ギルド。そのギルド長、テオ・ラケシルに聞きたいことがあったんだ。

知りたかったことはスレイン法国に関する、もつと詳しい情報だ。

なにせ同行中に何を話しかけても何も答えない。

せめて何でもいいから言ってくれば、想定できる最悪の戦力くらいは把握できるぞ

うけど・・・

あそこで出会った少女くらいしか情報源が無いのだから。

そんなわけで、エ・ランテルに到着した。

エ・ランテルがどういう場所か、

三重の城壁に守られた城塞都市だとのこと。

リ・エステイーズ王国の国王直轄地であり、

毎年恒例となっているカツツエ平野でのバハルス帝国との戦争では軍事拠点として利用されているようだ。

そのためか、戦死者の死体が運ばれてくる関係上、墓地の広大さは近隣諸国と比べても比類なきものらしい。

という情報を、魔術師ギルド長であるテオ・ラケシルから教わった。今は正直必要な情報だ。

「で、ただの観光ではないのだろうか？」

エ・ランテル魔術師ギルド長のテオ・ラケシルだ。

「実は、先日スレイン法国に行ってきたのですが」

「おや、ずいぶん早く往復したのだな」

本来であれば、早馬で急いでも2週間にかかる。

それを10日程で往復するとは。

「それは、シロモフの足のおかげですよ。まあ……法国に到着するなり、その日の内に出発する羽目になりましたが」

「例の魔封じの水晶を回収するようにとでも言われたのか？」

「え、それは使つてなくなりましたと伝えてあります。別件で、護衛を命じられたんですよ。護衛任務をこなせば

魔封じの水晶の件は無ということに」

実際には、陽光聖典を対してしまった件をチャラにしてもらおう。という話のはずだ。

「そうか、で？聞きたいことというのは？」

先日の魔封じの水晶のおかげで、異様に親密度が上がっているらしく聞いたことには簡単に教えてくれる。

もしかすると一般的な事だけなのかもしれないが。

で、肝心のスレイン法国に関しては大したことは教えてもらえなかった。知らないだけじゃ……？

現地に行ったけど、ろくに相手にしてもらえないんだもん。他の人も同じなのかも？ただ、ズーラーノーンという組織が存在していることを教えてもらった。

詳しいことは分かってないが死を振りまく組織らしく、もしかしたら法国の特殊部隊の一つだったりして笑っていた。

冗談のつもりで言ったのかもしれないが、一つの手がかりになるかも？

少なくとも裏の世界で生きている組織なら、何かしらの情報くらいはもっているだろう。

結局、法国の情報はほとんど手に入らなかった。

いつそのこと、観光でも楽しもうと思ひ、エ・ランテルの都市地図を見せてもらつて、墓地でも見に行こうと思う。

「シロモフ？でつかい墓地があるらしいから、ちよつと見物しに行こうか」

墓地というのも元の世界では貴重なものだった。

なぜかつて？

そりや地球環境が酷くなつてゐるのに墓場に場所をとる余裕さえ無くなつていたんだ。

人口はどんどん増えていったし、居住スペースを確保するために特殊な墓場の形態を取ることになつた。

見たことが無かったから見てみたいだけなんだけどさ。観光気分だし。

時間的には夕暮れ時だ。結構長く話していたんだなあ。

墓地の周辺が大きい壁で囲まれている。飛び越えてもいいんだけど正門から入りたい。

そりゃ死者が祭られている場所だ。出来るだけ正式な手順を踏みたいじゃない？

あれが正門かな？

おや、こんなところにも衛兵さん？いや門番さんか？

「こんばんは、中に入りたいんだけど？」

「こんな時間にか？夜になればアンデットが徘徊するかもしれないから危険なんだが・・・」

街中でもアンデットって湧くのか？ユグドラシルでは街中は、特定条件を満たさない限りはMobのポップは無かった。

宿屋とか、安全地帯でもなければPKはできるんだけどさ。

適当に言い訳を考えて

「戦争で亡くなった人がここにいないかと思って、少しでいいから見てみたいんだけど」
嘘は言っていない。知り合いがとか、友達、家族とは言っていないんだから。

「仕方ないが、早めに戻れよ？その魔獣に乗っているなら平気だろうけどさ」

門を開けてもらった。

「ありがとう、なるべく早く戻るよ。いぎとなったら壁を飛び越えるから大丈夫」

「その魔獣ならできそうだな」と衛兵さんも笑っていた。

ん、墓地って雰囲気だねえ。アンデットがちよこちよこ湧くのかと思っていただけ
ど本当に普通の墓地だ。教科書で見た通りの墓地だ。

「ご主人さまあ？何か話声がするツす」

何も聞こえないけど、この子なら聞こえることもあるだろう。

あの建物から？

結構進んだ先に神殿があった。霊廟っていうのかな？

ちょうど誰かが出てきた。

きつたない変な石を握ったローブ姿の顔色が悪い老人？と顔を隠した4人の姿が見える。

「こんにちは、ここって霊廟でいいんですか？」

とりあえず話しかけてみた。

「貴様は何者だ？」

ここが何か尋ねたのに、いきなり、なにもの扱い？せめて、

ここは霊廟ですよ。で、そちらは？

くらいは言つて欲しいものだ。せめて質問に答えてから、質問してほしいものだ
が……

「せめて質問に答えてから質問してほしいんだけど。ただ単にここを見学しに来ただけだよ？」

「ふん、ならすぐに立ち去るがいい」

だから、ここが何か言えつて言うのっ

「そう言われると余計に気になるので、ちよつとお邪魔します」

そう言つて建物の中に入って行こうとしたら……何もされなかった。

ただの建物か。教科書でも言葉くらいしか載つてなかったし何も意味はないんだろ
うなあ。

あ、魔法がある世界なんだから、元の世界に比べて信仰心は高いのかも？坊主頭だつ

たから、この人はお坊さん？

坊さんが必ず頭を剃っているわけじゃないけど……

「見学させてもらいましたが、何もありませんね」

「分かればさっさと立ち去れ」

この世界の坊さんは（もう坊さんで確定でいいや）人を上から見るとような雰囲気をするものなんだろうか？

「それでは失礼」

雰囲気は怪しいので、遠くからこっそり見張ろうと思う。

見えなくなつてから、不可視化の魔法を使う。

そつと近づいてみると、???あの汚い石に力を込めている？

何の意味があるんだ？

さらに近づいてみた。ばれる気配は無い。

ならばと、この石に触れてみる。

頭の中に、死を振りまくような理解できないが理解できる言葉が頭の中に響いてくる。

思わず掴んでしまった。

そして、

「うるつせええつえええええつえええつええつええつええつええつええ」
思わず投げ飛ばした。その途端、不可視化の魔法が解けてしまった……

「き、貴様何を、いやお前はさっきの、いや、そんなことはどうでもいい」

さっきの爺さんは飛行フライの魔法を使い、投げた方へ飛んでいった。

ああ……いくらなんでも投げ飛ばしたのはまずかった……かも？さすがに非常

識だったか。

あの爺さんの取り巻きは、おろおろとしている。何やらどうしようとして迷っているようだ。

どうしようかなあと思っていると、霊廟の奥からアンデットが次から次へと湧き出てきた。

「スケルトンなら、まだ我慢できるけど、ゾンビ系はやめてくれっ。気持ち悪いわあああ」

あまりの気持ち悪さに逃げ出してしまった。

11. 1エ・ランテル

投げられた死の宝珠は自分の強制力を突破し投げ飛ばした者を思う。
あの存在を支配できていれば確実にわが望みは進んだだろうにと。

カルネ村での薬草採集の依頼を終え、漆黒の剣とモモンさんチームがエ・ランテルへ戻ってきたころ。

冒険者組合と、ン・フィーレアの店への分かれ道に差し掛かったときに矢先に、
ヒュ、トガ、ン。
石？が飛んできた。

「街中に、何が降ってきたんだ？」

「この世界では隕石が降ってくることはよくあることだろうか？」

本当に隕石が目の前に落ちるってどれだけ低い確率だよ。

アインズはそう思ったが、黒の漆黒のメンバーは何が落ちて来たんだろうと、それに近づこうとしていた。

そこへローブ姿の老人が空から飛んできて、落ちたそれを拾う。

「おお、ここにあったか。なんとか回収でき……」

死の宝珠にひびが入っており、黒い霧が漏れていた。

その黒い霧がカジットを包み込むように溶け込んでいく。

なんなんだ、これは一体どうしたというのだ。……カジットは感づく。いや理解する。

これが死の宝珠の本当の力なのだ。その瞬間カジットの存在は消えた……

カジットの身体が大きく膨れ上がり、身体から黒い液体がこぼれ出る。

その黒い液体が、身体の周りで固まり、フルプレートが造られた。

その瞬間

死デスナイトの騎士が生まれた。

「この世に存在する下等生物どもよ。

我が名を聞くがよい。

我は死の宝珠。

この世に死を振りまく存在だ。」

頭の奥に響くように、恐ろしい声がエ・ランテル全土に響き渡る。

漆黒の剣や、落下音を聞いて外に出てきた町民、冒険者も寄ってきていた。

その恐ろしい声を感じ、逃げることにすらできないでいる。

あまりにも恐ろしい声に、あまりにも恐ろしいアンデットの姿に皆震えている。

ミスリルクラス冒険者であるクラルグラも近くにいたのだが、動くことが出来なかつた……

クラルグラにとって不幸だったのは、

カジットの知識を

現代の冒険者の仕組みを死の宝珠が得たということだ。

クラスの高いプレートを身に着けているということは、この世界では実力を示すことにつながっている。

周囲には……彼ら以上のプレートを持つている者はいない。

1人かなり立派なフルプレートを身に着けた者が、所詮は銅プレート。大したことはあるまい。

カジットを取り込んだ今でも勿体ないと思う。私、死の宝珠を投げた存在を媒介に出ればと思う。

あれほどの力を持つ人間であれば、より高位のアンデットとなることができたであろうに。

死の宝珠の本来の能力であり、目的であった。

ⅠⅤの高い存在を取り込み、高位のアンデットとなることが死の宝珠の望みであった。

いつの頃から存在しているのかは、もはや覚えていない。

これまでずっと力の弱いものを取り込み、その能力を上げてきていた。

幾多ものアンデットの姿をとり、媒介となった存在の知識を取り込み、魔力を力上げていった。

そのたびに、力を取り込む存在を手に入れるために宝珠の形をとり相手に寄生していったのだ。

だからこそ惜しいと思う。

我、死の宝珠を投げ飛ばしたあの者を取り込むことが出来れば、どれほどの存在になれたか見当もつかない。

だが、過ぎたことは仕方がないと思う。

時間は無限にあるのだ。

この街に死を振りまいたのちに、また媒介を探せばよいのだと。いや、あれを取り込むために墓地に戻り探せば良いだけだと。

クラルグラがチームリーダー、イグヴァルジが叫ぶ。

「全員、距離を取れっ。相手はアンデットだ。銀武器を用意し、かかれっ」

力の差が分からなかったのも無理は無いだろう。

むしろ動くことができたことを褒めるべきなのだ。

確かに銀武器であれば、ダメージを与えることは出来た。だが、基礎となる能力が違い過ぎたのだ。

フランベルジュの一刀のもと、更なる2撃目を受け、クラルグラのメンバーが上半身と下半身が別れてしまった。

ミスリルプレート冒険者が殺されたことで、ようやく周囲の人間は逃げ出した。いや、逃げ出そうとした。

だが、すでに手遅れだ。気が付けば、街中をアンデットが徘徊している。周囲にもスケルトンやゾンビが多数いる。

霊廟から飛び出してきたアンデットが周囲を覆っているのだ。

周囲のアンデットはなぜか、人間を襲おうとはしていない。

だが好き好んでアンデットの横を通ろうとする人間はおらず、動くに動けない状況となっていた。

死の宝珠は、死を振りまけることに喜び、どう楽しもうかと考えていた。

さて、どうするか？

アインズは考えていた。ミスリルプレートの実験者が殺されたのだ。ここで死の騎士：デスナイトを倒し、この包囲網を突破する。

さすれば、我が名声は素晴らしく高まるだろうと。

その時、伝言：メッセージが届く。

——アインズ様

メッセージの魔法が頭に響く。今はだめだ。メッセージに応答して、不自然な姿を見せるわけにはいかない。

応答しない以上、切ってくればいいのだがよほどの緊急だったのだろう。

——シャルティア様が反旗を翻しました。

は？

え、いや、反旗ってどういうことだ？

沈静化が、起こるがすぐさま動揺が続いてしまう。

いやいやまって、もしかしたらペロンチーノの設定かもしれないじゃないか。

こんな場所でNPCから離れていたら反逆するとか、俺に不満を持つてとか何か理由があるだけじゃのかわ

沈静化が働いているのに。沈静化の効果が幾たび起こる。

急ぎ戻らなければならないが、いきなり転移門ゲイトを開いて、もしくは指輪の能力を使って戻るわけにはいかないと思うくらいは落ち着いた。

目の前の死デスナイトの騎士が、優越感に浸っているのか光悦した表情をしているように見える。いや表情は無いが……

まるで、己の望みが叶う瞬間を目の当たりにしているようだ。そんな気がする。

あの満足している雰囲気にとまららず、叫んでしまう。

「くそがああ。くそくそくそお」

俺が急いで戻りたいときに限って、厄介事の最中とは。

死の宝珠は、人間の諦め、もしくは、この瞬間の絶望を感じ叫んだのかと思った。だが……

「何なんだ貴様は。死の宝珠とか言ったか。至急の用事があるに邪魔をするなあああ」

その瞬間、周囲のアンデットがアインズに襲い掛かる。

モモンガが戦士として本気の力を振るった。

力任せに両手に構えた大剣を振り回す。

一振りです数十体のアンデットが吹き飛ばす。別の手に持っている大剣で、さらに数十体が吹き飛ばす。

そのあまりの威力に死の宝珠は、この場でもつとも対処すべき存在が黒いフルプレーの戦士だと理解する。

いや、余計なアンデットを他に回す場合ではない。

全てのアンデットに、黒い騎士を襲うよう念じ指示を出す。

それでも、黒い騎士は止まらない。怒りに我を忘れ剣を振るっているように見える。そのまま半数ほどが倒されたところで、骨の龍スケリトルドラゴンを4体召喚する。が、

両手の大剣を振り回し、一太刀で屠られる。

どういうことだ。

今まで人間種にこれほどの力を持ったものは見たことが無い。

それはもちろん、寄生した者の知識の中にはない。

あるとすれば神話の中にだけだ。

全部の力を力を込めて切りかかる。

黒い戦士から大剣を投げつけられ態勢を崩したところに、追加の一撃が迫る。

「私の目的……が……」

「さっさとくたばれっ」

追加の一撃を加える。

死の宝珠の存在が失われたことで、エ・ランテルに存在していたアンデットが消滅することとなった。

エ・ランテル街中を襲った悲劇だったが、結果だけを見れば、ミスリル級冒険者1チームのみの壊滅という損害だけで終わってしまった。

た。あまりの事件だけあって、あつという間にリ・エステイーゼ王国に広まることとなつた。

11. 2エ・ランテル

街中でかなりの騒動が起きていたのは感じていた。

カジットに手を貸してもらい、

風化聖典から逃げる手を打つために叡者の額冠を使って、ひと騒ぎを起こすつもりだった。

「何よあれ。カジットちゃんがアンデットになった？」

死の宝珠を使いアンデットを作り出せることは知っていた。だが使用者がアンデットになるなんて。

「ん〜さすがにまずいかな？ま、いつか〜」

元々ここで騒ぎを起こして、追手への目くらましのつもりだったのだ。予定とは違うが十分な騒ぎは起きた。

あとは、逃げるだけだ。

「んじゃ、カジットちゃん？ばいばい」

かつての姿形をしていない存在を見やり、ひっそりとエ・ランテルから離れていく。

死の騎士：デスナイトを倒し、周囲からアンデットの存在が消えたことを感じる。力任せに暴れたおかげか、何度も続いた沈静化によって完全な落ち着きを取り戻した。

あゝ、しまった。思わず力任せに暴れてしまった。

街へ大した被害はでないようだけど・・・大丈夫だろうか？

ナーベラルが近寄ってきて、さすが至高の御方。とかなんとか褒めてくる。

何度も対等の立場で接しろと言っているのにまったく聞く気配が無い。

「何、大したことは無い。それより至急、宿へ戻るとしよう」

「はっ」

そのまま、この前泊まった安宿屋へ向かう。

「モモンさん、すごかったな」

ペテルが呟いた。

「ああ、とんでもねえや」

ルクルットが答える。

「あれが英雄と呼ばれる存在なのですね」

ニニヤも答える。

「まったく、とんでもない御仁である」

ダインも答える。

漆黒の剣は、モモンの事を考える。

今回は、一緒に旅をさせて頂いたが、今後は話しかけることすら出来ないような英雄となるのだろうかと思う。

「あく君たちは、彼の事を知っているのかね？」

今のつぶやきが聞かれたのだろうか？

漆黒の剣は、声を掛けられたほうへ向きなおる。

プルトン・アインザック、エ・ランテルの冒険者ギルド責任者だ。

「これは組合長。ええ、ンフィーレアさんの依頼を一緒に受けさせてもらいました。」

「そうか。よければ、その話を聞かせてもらえるかね？」

組合長から、依頼内容を尋ねられて答えないわけにはいかないだろう。

旅の途中で、

オーガを一撃で両断したこと、

その際に、ナーベさんが第3位階の魔法を使ったこと。

森の賢王をねじ伏せて使役したこと。

ついでに、ニニヤが少し怒らせてしまったことも伝えたが、モモンさんのほうから歩み寄るきっかけを作ったこと。

思いつく限りを話した。

ほう、自らの過去を貶めることを言われても、結局は許すか・・・戦闘能力は、この一件で広められたとして、十分にアダマントタイト級の資格はありそうだ。

エ・ランテルにはミスリル級までの冒険者しかない。

アインザツクは、この都市にアダマンタイト級の冒険者がいないことを悩んでいた。強い人物がいれば、人間種の安全性は遥かに増す。何より、英雄がいると格好良いではないか。

子供のころから英雄の冒険譚には憧れていた。物語の中にしかない英雄にであつてみたかったのだ。

だからこそ、だからこそ圧倒的強さを誇り、その振る舞いが出来る英雄の存在を待ち望んでいた。

彼らはどうだろう？

今回の恐るべき事件を解決したのだ。

ましてや、3つしかないミスリル級のチームが1つ壊滅したほどの難易度に相当する事件だ。

依頼を受けずに、事件を対処したことを問題視する馬鹿な者がいるかもしれないが、これほどの事件だ。

そんなことを問題視する者がいるなら、逆手に取ることは容易だろう。

ミスリル級が殺される事件を解決したのだから、少なくともオリハルコン級を与える

ことを考えても・・・それだけの能力は間違いない・・・ある。

いやあれだけ容易くクラルグラ。ミスリル級冒険者がやられてしまったアンデットを倒したのだ。

アダマント級を与えることが可能では？

誰も見ていないところで恐ろしい事件を解決したと言っても、信じられる者はいないだろう。

だが、都市の人間ほぼ全てが目撃者だ。

最高位の冒険者の印を与えるには十分だろう・・・

その夜、エ・ランテル冒険者組合の主要なものの意見を集め、議論した結果・・・
エ・ランテルに最高位冒険者であるアダマント級冒険者が誕生したのであった。

12. スレイン法国の情報収集集中

ナザリツク地下大墳墓・玉座の間にて

「これがシャルティアが離反したという理由か」

「はい、定時連絡がありませんでしたのでマスターソースを確認したところ、シャルティアの名前部分が……」

「マスターソース・オーブン」

シャルティアの名前が赤くなっている。

ユグドラシル時代であれば、裏切り行為などを働き一時的に離反状況を示す状態だ。

「アインズ様、このような状況に陥っている以上、シャルティアを探し出し一刻も早く対処すべきかと。姉に搜索を命じ、討伐対を

編成すべきかと」

「まずは離反した要因を調べることが先だ。だが、居場所は把握しておくべきか。お前の姉の場所へ行くとしよう」

以下略。原作準拠のホラーが起こってから

水晶画面にシャルティアの姿が映る。

「アインズ様。シャルティアですがスレイン法国にいるようです。」

「スレイン法国だと？向かわせた場所からすれば、かなり離れているが、間違いはないのだから？」

水晶画面が引き上げられ周辺の様子が分かるようになる。

確かに、スレイン法国のようだ。

「どういうことだ？シャルティアの様子からすると、隔離されているようだが？」

映し出された場所からすると、地下牢に閉じ込められるだけでなく、鎖によって四

肢から胴体まで拘束されている。

捕獲されたのか？

馬鹿な、シャルティアは単騎ではナザリック最高LvのNPCだ。彼女を捕えられる存在など・・・集めた情報の中にはいない。

スレイン法国にはプレイヤーが今でも存在しているのか？

そういうえば、グレンもスレイン法国へ向かうと言っていた。

メッセージ
伝言

「グレンさん、ご無沙汰しています」

「あれ、アインズさんの声？これは？」

「伝言：メッセージの魔法ですよ。習得していないんですか？」

「あ、この魔法って、こうやって使うんだ。ユグドラシルの頃、使ったことが無かったもんで。」

だって・・・基本ぼっちプレイヤーだし。

「そうでしたか。いきなりで、すみませんが、ちよつと問題が起こりました。何か少しでも知っていることがあればと思っただのですが」

「?どうしたんです?」

「実は、うちのNPCがスレイン法国に捕えられてしまったようでして、何か知らないかと。こちらには他にプレイヤーの方とは出会って

いませんから、何でもいいから知らないかと思ひまして」

はて? NPCねえ。

あ……そういえば、あのヴァンパイアは強そうだった。特に、この世界の常識ではありえない強さだと思う。

いきなり襲ってきたけど、もしかしたら……

「あの……もしかしてlv100相当だったりします?」

「ええ、始祖：トウルーパーンパイアで、lv100です」

「ヤツメウナギみたいなの? ぼろぼろな服を着ていて、頭上に血の塊を浮かべていたりして?」

「何か知っているんですか?」

「……いえつ知りませんつ。そんな移動中に急に襲われたりしてませんつ。

決して捕まえることを手助けなんてしていませんつ」

「……知っているんですね。教えてください」
「ごめんなさい。実は……」

俺が流れ星の腕輪を所持していることも含めて、始祖：トゥルーバンパイアを捕獲したことを説明する。

なんということだ……先ほどエ・ランテルで暴れた経緯が無ければ、怒鳴り散らしていたかもしれない。

あの時に、消そうとしても消せなかった怒りを体験していなければ、どれほどのこと当り散らしたことか分からない。

「そうでしたか……それで、スレイン法国へは戻らないのですか？」

「エ・ランテルの魔術師組合長への用件を済ませたら戻ると伝えてあります」

「でしたら、彼女を取り戻すために協力してください」

この人間種が・・・大切なNPCに危害を加えたとは、ただではすみません——

12. 1スレイン法国の情報を集めるために2

アインズさんから受けた依頼は、スレイン法国に関する情報を集めることだった。優先順位まで、こと細かく。

第1に、ケイ・セケ・コウク傾城傾国に関する情報

第2に、さらわれたNPC、(シャルティア・ブラッドフォールというらしい)がどう
いう扱いになっているか

第3に、スレイン法国の戦力はどれほどのものか
最低でもこの3つを調べてほしいとのこと。

さらわれた原因を作った以上、手伝いたいとは思うけど・・・どうやって調べたら
いいか。

何にせよ、法国へ行くしかない。

シロモフがかなりの速度で走ってくれたので、あの部隊から数時間遅れるだけでスレイン法国へ着くことが出来た。

「シロモフ大丈夫か？」

「疲れたっす……」

アイテムボックスから、特別な課金エサを取り出して与えてやる。

「これはなんっすか。美味しいっすっ」

「課金アイテムという食べ物だ。すまんが、もうあまり残ってないから、これしか上げられないけど、美味しいか？」

喜んで食べているようだ。

課金アイテムの一つで、疲労のバッドステータスを回復させる飲食アイテムだ。

まあ課金ガチャのはずれアイテムの一つなんだけど。

とりあえずは、あの護衛任務を命じてくれた人達がいたところへ向かおう。

先日案内された道を通ろうとすると、止められた。

六大神官長が集まり会議を行っているので入れられないとのこと。俺には1日の宿を用意するので待っていて欲しいとのことだ。

六大神官長？

あの6人が六大神官長ということを教えてくれた。

何か最初に来た時に比べ待遇が変わってる・・・どういうことだ？

周囲から感じる威圧感というか、よそ者に対する態度じゃない。少なくとも話しかければ答えてくれる。

結構飛ばして戻ってきたので疲れている。

どうせ明日にならないと会う気が無いつてことは変わらないだろうし今日は休むとした。

次の日、昼頃まで部屋で待っていると一人の神官が呼びに来た。ようやく六大神官長に会えるわけですか。

「よく戻ってきてくれた。」

「初めてきたときの、不愛想な話し方が影も形もない、これ以上明るい声は出せませんよってくらい弾んだ声だ。」

「どういうこと？」

「初めて来たときに比べて、対応が違う気がするんですが……」

「いやいや、我々は誤解していたのだよ。そう、とつても些細なことだよ」

「具体的に説明をお願いします」

「これだけ態度が違っていると、どう対応していいか分からない。」

結局はこういうことだった。

傾城^{ケイ・セケ・コウク}傾国^{ケイ・セケ・コウク}を使用したカイレを守ったことで手に入ったシャルティアが想定外の存在

だったということ。

「どうやら、法国へ戻ってきたときに、どれほどの力を持っているかを確かめたいらしい。」

「それが恐ろしいほどの戦闘だったらしく、結果は教えてくれなかったが。」

「当然、カイレがやられていればシャルティアを支配することは出来ず、」

痛手を負うだけに終わっていただろうことから俺への評価が上がったらしい。

何せ盾になった3人のうち1人が死亡、さらに重傷者が2名でる攻撃を守ったということであんなに評価が上がるという評価だ。

しかも、それほど力を持った存在の攻撃を防いだ力を、スレイン法国で使わないかとまで言われた。

この国で働くかどうかは、2、3日考えさせてほしい。その旨を伝えたところ「当然だろうとも。じっくり考えてくれ。こちらにも出来るだけのことにはさせて頂こう。」

態度変わり過ぎだろと思う。よね？

1 2. 2スレイン法国の情報を集めるために3

翌日、あの6人には会えなかった。

聞きたいことがあったのに。彼らからなら、必要な情報は引き出せただろうと思う。

当面はやることもないので、カイレの婆ちゃんの見舞いでも行くかと思いい居場所を聞いた。

カイレ婆ちゃんは、この神殿内ではなく別宅に住んでいるそうだ。

チャイナドレスを着た婆ちゃん（徳の高いはずの人物）が住む場所って……こんな場所でもいいんだろうか？

高い階段を上った先に左右に狛犬を一匹ずつ目の前に、ちよつとボロい神社があった。

その横に母屋に繋がる通路と小さい家。

当然、さい銭箱があり、そのうえに、ガラんガラんって鳴らす、あの鈴もある。

あの鈴って、なんて名前なんだろう？

問題はそこじゃない。

神社ならチャイナドレスじゃなくって、巫女服だろうっ。もしくは神主の服装すべきだと思うのに。

正直に言えば、チャイナドレスは良いと思うが、巫女服はもつと良いと思う。メイド

服もいいが、巫女服には敵うまい。

良さを語ってもいいが、趣旨が外れそうなので割合する。

その前に、

場所に服装の雰囲気合っていないと違和感しか感じない。

この国にいたと思われるプレイヤーは、様式美には拘らないのだろうか？

いや、今更だが、お婆ちゃんが着る服じゃないよね・・・

「カイレ婆ちゃん。掃除なんかしてて大丈夫なのか？」

あのアイテムのせいで、倒れているって聞いたはずだけど普通に竹ぼうきで掃除している。

「おや、坊やかい。何しに来たんだね？」

「戻ってから、疲れて倒れているって聞いたから見舞いのつもりできたんだけど」

「はっはは。確かに、あの装備は信仰心を失うが一時的なものじゃ。今しばらくは使えんだろうが、時期に使えるようになるわい。」

「それじゃあ、この前捕獲したヴァンパイアは暴れたりしないの？」

「今のところ完全な支配下にはあるが、命令を下すたびに信仰心を失いそうになるので、地下で待機させておる限りは何もせんよ」

それを聞いて安心した。

となると、カイレ婆ちゃん以外はヴァンパイアに何もできないわけか。

カイレの婆ちゃん以外が近寄るなり、ちよっかいを出すと攻撃してくるんだと。

ちよっかいを掛けたら・・・どうなるか想像できない。

「その服はしばらく使えないなら、当面の間、自宅で過ごすんだ？」

「そうじゃな。この装備を使えるようにならない限りは出番はないじやろ。この装備を貸し与えられる者は常に一人と決まっておる。

死なない限りは、私しか着ることはあるまいて」

「婆ちゃん。そんなことを部外者に伝えてもいいのか？」

「ふあっはは。このくらいのことを聞かれたとしても、おんしゃ何もせんよ。坊やは、力

を持つているかもしれないが善人じゃ。

でなければ、あの時に私を助けたりはしないじゃろ？あの時、放っておけば私は致命傷を負っていたじゃろう。

その隙に、装備を奪い去り逃げることもできたんじゃないか？」

そりや、LV差はあるけど、装備差がきつい。いや、あの隊長クラスでもLV60台くらいじゃないだろうか？

奪って逃げるくらいは出来た・・・のかな？

「無理だよ。」

「そうかい？」

「ま、婆ちゃんが大丈夫なようだし安心したよ」

「ん？どこかに出かけようとも思ってるのかい？てつきり法国のいずれかの部隊へ入ることを依頼するかと思っておったんじゃないが」

何で知ってるんだ？

いや、ここで聞きたいことを聞けたから、王国へ戻ろうかと思ってたけど。

「婆ちゃんがいた部隊を護衛するって依頼を終えたんだから、せめてもの義理は果たしたし、王国へ戻ろうと思うよ」

王国に置いてきた子もいるから」

「彼女かい？」

からかう様な言い方で、小指を立ててくる。本当に老人か？

「違うっ。ちよつと身請けしただけ」(身請けだよな?)

カイレ婆ちゃんがかつかつかつて笑ってたけど、そんなつもりじゃない…….
う。

「生きてたら、また会いに来るよ」

「達者でな。意気の良い若い者は、これからの時代に必要じゃやて。子は残すようにするんじやよ?」

特に力を持った者は子をなすべきじゃとか言ってる。

子供は作りたいけど、相手がいない……ガガーラン相手に子供を作れば、良
い戦士に育てられそうだけど。

無理だろうなあ……向こうは有名な冒険者だ。能力では勝てると思うが何故
か逆らえない。惚れたか？

「出来るだけがんばるよ」

そう言って、スレイン法国をあとにした。

13. スレイン法国から王国への道筋で

スレイン法国からリ・エステイーゼ王国へ向かう途中で、入手できた情報をアインズさんへ送ることにした。

伝言：メツセージ

「アインズさん、今大丈夫ですか？」

「大丈夫です。法国の件ですね」

「はい、出来るだけ集めた範囲での情報ですが、構いませんよね？」

「ええ、では得た情報を教えて頂けますか？」

スレイン法国で得た情報

ワールドアイテムと推測される、ケイ・セイ・コック傾城傾国には使用する際に信仰心を失うこと。

使用できるほど徳が高い（信仰心が高い）人間は、ほとんどいないらしいこと。

使用するたびに信仰心を失うので、多用は出来ず、

捕えた相手に命令をだすだけでも、信仰心を減らすとのこと。

かなりの装備（神器級？）で身を包み、戦いたくは無い相手がいること。

を伝えた。

「そうですね．．．．少なくとも一人プレイヤーらしい人物がいるのですね。

ですが、信仰心とは？ユグドラシルにはそんなアステータスは無かったと思いますが「たぶんカルマ値が善よりの事を言っているんだと思いますけど」

「お疲れ様でした。今後は、どうされるのですか？」

「法国に居ても、もう何かをされるといいうことは無いと思いますけど、王国へ戻ろうと思います」

「また、どうしてですか？」

「ちよつと忘れものがあるので、戻るだけですよ。特にすることもありませんので」

そう言つて、伝言：メッセージは切れた。

「アルベド、デミウルゴス。法国へ行っていた、あの人間から得た情報は以上だ。何か思うところはあるか」

「僭越ながら、シャルティアを放っておくことは愚策と思われます。

ですが、ワールドアイテムの存在が確認されたのですから警戒に警戒を重ねる必要があります。」

「この世界に、どのような危険があるかは、まだはつきりとしておりません。

特にワールドアイテムの存在が確認された以上、シャルティアはスレイン法国へ預けておくべきかと。

幸いと言いますが、あのワールドアイテムを使用しての情報の漏えいは少ないと思われます。

シャルティアは1〜3階層の守護者。問題があるほどの情報が漏れるとは思えません。

「なにかしら諜報を行い、確実な情報を得るべきです」

「幸いと言いますが、その人間の報告が正しいのであれば

八枝刀の暗殺蟲（エイトエッジ・アサシン）クラスのモンスターなら見つかる心配は

無いかと。」

二人が交互に説明してくる。

二人の意見からすれば今は放っておき、向こうに攻め込ませるといふのだろう。

ナザリツクの知恵者二人がそういうのだ。早く助け出したいところだが、今は我慢の時だ。

「二人とも私と同意見か。であれば、この話は終わりだ。

シャルティア……今しばらく待つていてくれ。必ず救い出すつ」

アインズが私室へ戻った後、

「デミウルゴス様、牧場へと近づいてくるスピアニードルがおりますが、いかがいたしましたでしょうか？」

「スピアニードル？その辺には、存在しないモンスターのはずだが？」

ああ、恐らく彼だろう。スレイン法国から王国へ向かうために、わざわざアベリオン丘陵を通ろうというのだ。

確かに地図で見れば、通る可能性はあるだろう。

だが、普通の街道ではないのだ。わざわざ通つてくるといふことは……遊んで
いるのだろう。

人間であれば効率良く移動するのではなく、寄り道をすると言ふ。観光のつもりかね
？

だが、人間に牧場を見られるわけにはいかない。

どうするかと考えてみると、もっとも簡単な方法を思いつく。

「同族を食べることに拒否感を持たなくなった個体が20ほどいただろうか？1人分の食
糧と、鉦の1本を持たせて通り道に逃がせ」

「畏まりました」

これで、あの人間は牧場へ近づかないように別ルートを通るだろう。

まったく、これでは羊皮紙の生産が遅れるではないか……アインズ様になんぞ報
告すれば……

「ご主人さま、本当にこつちであつてつすか？」

「合ってる…….とと思うんだけど…….」

やばいな、自信が無い。

地図からすれば、こつちからならハイキング気分でも味わえるかと思つたのに。すつごいきつい道だ。

これなら街道沿いに移動すればよかつたよ。

「ねえ、シロモフ。人の匂いとか、生き物の気配ないかな？」

「むむ。あつちから血の匂いがするつす」

「…….血の匂い…….か。そつと近づいてくれないか？」

初めてこの世界に来た時も、カルネ村で殺戮が行われていたんだよな。嫌な感じ……

案の定、そこでは殺戮が行われていた。

殺戮と言つていいのだろうか？多数の死体がある。問題は動いている2人だ。

信じられないことに同族を喰っている。

この地域では、こういう文化がある…….んだらうか…….

確かに、元の世界でも同族食があつたという歴史があつたらしいが…….

「すまないが、ゆつくりとこの場を、一刻も早く離れてくれ……時間はかかるけど、ちやんとした街道を通ろう……」

14. 再び王国

余計な遠回りをすることになったが、ようやく王国へ戻ってきた。

「さて、ガゼフさんの家へ行ってみるか」

気になっているのはツアレの一件だ。

アインズさんに忘れ物って伝えたのもツアレの事だし、カイレの婆ちゃんに言ったのもこの件だ。

なんせ犯罪行為かもしれないらしい。何も問題になっていなければいいが・・・

ガゼフ宅に着き、玄関をノックする。

お世話になっていた老夫婦の奥さんのほうだ。

「……グレンさん。ご無沙汰してます。」

あれ？なんか暗い雰囲気？

「こんにちは、ツアレの様子を見に来たんですけど」

「あああああ、申し訳ありません」

泣き崩れてしまった。なんとか説明してくれたんだけど。

スタッフアン・ヘーウィツシュという役人が娼館の主であるサキユロントとともにやってきて王国の法により連れて行つた。

戻ってくるがあれば、この場所まで出向くようにと。

役人が来たなら従うしかなかったのかもしれないけど、ガゼフさんって王国戦士長だろ？

そこへ王国の法を使つて乗り込んできて連れていくつてことは、結構やばい問題だったりするんだろうか。

ガゼフへ迷惑を掛けたという気持ちと、何で守れなかったという気持ちが入り混じつた感じで、何とも表現できない。

考えても思い浮かばないので、誰かに知恵を貸してもらいたいところだが……蒼の薔薇にでも相談してみよう。

蒼の薔薇が滞在している宿屋を訪ねてみるが、ガガーラン達は不在だった。双子の片割れ、ティア？ テイナ？ どっちか分からないけど、どっちかがいる。

「ラキユース達なら、ラナー王女のところに已向いたところ」
どうやら、ほんのちよつと入れ違いになったみたいだ。

急げば追いつけると思うって言われたので、全力で走ったけど追いついたのは王国の城門前ぎりぎりだ。

どれだけ早く移動していたのかと思ったが、ガガーランから理由を聞いて分かった。

普通なら追いつけるはずがない時間だったのに、少し、と言われたのだ。

からかったつもりだろう。

なんせガガーランのことも青い血が流れているって揶揄しているくらいだしな。

相談したいことがあると伝えると、王女に会う予定時間なので後にして欲しいのとこの

と
ガガーランは付いてきて構わんぞ？。

というので遠慮なく付いていく。こっちは早く問題を解決したいんだ。

ていた。
ラナー王女に蒼の薔薇が呼ばれた件だが、結果としては俺が頼りたかった件と一致していた。

王国に住まう八本指という組織を潰すために召集をかけたそうだ。

本来なら、確実に一つずつ潰す予定だったが先日、クライム君とブレインという人物が、

ある人物の手助けを借りて一つの娼館を襲撃したと。

その場所が予定のいか所とのことで予定を繰り上げたいそうだ。せつかく場所を絞り込んでいるのに、逃げられては今までの苦労が水の泡とかす。

それにしても、街中で起こっていた只のいざこざに首を突っ込み、

その強さに見惚れたクライム君が修行を付けてほしいとのお願いを聞き入れて娼館襲撃を手伝うって、どんな人物なんだろう？

当の手を貸した本人は、「時の巡り合わせです。あなたが望まなければ手を貸しません。」

と言っていたので、ただの気まぐれかなあと思う。

襲撃計画を聞いたが、俺はガガーランに付いていけとのこと。

余計なことをしないようにと、お目付け役を兼ねている。

で、チーム分担が

ガガーランと俺ペア。イビルアイ単騎。ラキュースとティア？ティナ？ペア。ブレ

インとクライムの3チーム構成だ。

7か所あるため、担当箇所を襲撃したのちに、次の近い場所を襲つてから、7か所目に順次合流する計画。

2人以上の実力者、六腕と思わしき人物がいた際は、すぐに撤退して構わない。出来るだけすぐに、他にチームと合流して対処に当たって欲しい。

念のため、エ・ランテルに新しく生まれたというアダマント級冒険者を引つ張る予定もあるそうだ。

今回のこの八本指を襲撃するための出来事は、今まで生きてきた人生の中で、想像できないほどの恐ろしい事件が起こった日だった。

15. アインズVSグレン

何かの問題が起こるかと思っただけ……

最初の襲撃場所もなんなく潰し、次の場所のアジトも問題なく潰した。

それも当然か？。この世界には俺以上の能力を持った者はほとんどいない。

六腕と言われているアダマントタイト級と思われる6人を相手にしても敵ではないだろう。たぶんだけ……

こっちのチームは、その六腕と出会う機会がなかったのだが、それ以上にヤバイ存在と出会ってしまった。

3チームにおける襲撃の7か所目。

もつとも優先順位が低いと思われた場所で、その場所に似つかわしくないメイド服を着た女がいた。

いや、メイド服を着た化け物というべきだろうか。

まるでオヤツと言わんばかりに……その小さな手に似つかわしくない『人間の腕』を、とても美味しそうに喰っている。

「よお、良い夜じゃねえか」

ガガーランが平然と話しかける。

あんな恐ろしい行為、人間を喰うことが当たり前の存在を前に堂々としている。

本当にすごい肝つ玉を持った人だと思う。本当に惚れるね。

この世界に来てから、人も殺したし、死ぬ場所も見てきた。だけど人を喰うような存在を前にして

身体から恐怖が抜けきらない。確かに以前見かけたけど、あの時は逃げればよかった。

だけど、今回は逃げられない。そういう場面じゃないんだ。

「美味しそうに人間の肉を喰うモンスターを八本指が飼っているとは聞いてないが、飼うのに失敗でもしたか？」

まるで、いまこちらに気づいたかのように、ゆっくりとこちらを見つめてくる。

「ん、今わあ、お腹いっぱいだし。さっさと何処かに消えてえ、くれないかなあ？ お腹いっぱいだし相手しないであげるう」

逃げれば、相手にはしないと云っているように聞こえるが。

「さすがに、人の姿をした人喰いをするモンスターは放っておけねえな」

ああ、ガガーランさん。あんた人間の鏡だよ。

そのセリフを吐くと同時に、メイド服を着たモンスターへ襲い掛かる。

会話だけ聞けばガガーランが悪者に見える気がするが、人間種としてはガガーランが正しいのだろう。

……臆病者：チキンと言われようが、近寄りたくないので強化魔法で応援するだけにする。

ホーリーオーラ
聖なるオーラ

グレート・マジックウェポン
上級魔法の武器

フォーリスライフ
偽りの生命

キャッツ・グレイス
猫の敏捷力

負への防御魔法と、HP上昇魔法、敏捷力アップ、武器への魔力強化の魔法を使用する。

ガガーランがウオーピックを構えたまま、モンスターへ頭からつつこんだ。
あのメイド服へ体当たりをかましている。

「いきなり強化魔法を使うなつ、タイミングがずれただろうがっ」

怒られてしまった・・・・・・理不尽な・・・・・・

だが、支援した甲斐があつたのか、ガガーランは押している。

そのまま邪魔にならないように鞭で敵の攻撃を無力化しているのも、それに拍車をかけている。

そりやそうだ。

本来であればガガーランの位置には、ティムしていたモンスターか召喚モンスターがいるだけで、

俺からすればユグドラシル自体の狩りをしているようなものだ。

盾になる者を配置し、それを守りつつ攻撃する。基本通りだ。

召喚士の戦いであれば、召喚物が攻撃も担当する。あとは支援魔法を掛けつつ戦況を見守るだけだ。

ユグドラシルでは当たり前前の狩りだ。

ただのモンスター狩りであり、召喚モンスターがガガーランになっているだけで、いつもの狩りとなんら変わらない。

そう、ただのモンスター狩りだ。

このままいけば、あのメイド服を着たモンスター？は狩れるだろう。

色々と気色の悪い虫型モンスターを使役してきたが、俺からすれば

気色悪いっ

その一言に尽きる。

手に盾代わりにまとった虫や、剣の代わりに呼び出したムカデという虫だろう。

はつきり言って、リアルの世界で凶鑑や、特別な場所で見られないはずの存在だ。

それを差し引いても、『虫』という存在は、背筋が凍りそうな気味が悪い生物だった。特に、可愛らしいメイド服を着たモンスター？と思っていたけど、

ダメージを与えていくうちにメイド型モンスターの顔面にガガーランのウォーピックがまともに決まった。

これは決定的な一撃になったと思ったのに

—そのダメージを負ったのは、顔に張り付いていた虫だった。

《……………》

その可愛らしいかった、お面ともいふべきもの下にあつたのは無数の虫の足だ。

仮に、俺の顔全体に虫が這っていること想像すると、あまりのおぞましさで卒倒しちゃうだ。

問題なく、あのメイド服を着たモンスターは殺すことが出来た。あんな存在とは二度と出会いたくない。

本当にガガーランが前衛をしてくれていてよかったと思う。

イビルアイと、双子の忍者がこちらに合流したが遅かったくらいだ。
俺からすれば、無駄に支援魔法を飛ばさないで済んだので助かったと思った。

あの、魔王と名乗る存在が出てこなければだ。

「まったく……至高の御方に生み出された存在を殺すとは……あなたがたは……許しがたい生き物ですね。大人しく人間種らしく、私に飼われていればよいものを」

先ほど倒した存在とは、まったく異なる化け物が目の前に現れていた。その化け物が涼しげに囁いた。

「時間もないことですし、あなた方にはさっさと死んで頂くとしましょう」
その瞬間、ガガーランと双子へ黒い炎が襲う。

咄嗟に、身体を張って止めにかかるが、その脇からわずかに漏れた炎にガガーランや

双子ダメージを負う。

蟲メイドと戦っている間に、魔法防御を高めるシールドを張っているに関わらず、それなりのダメージを俺が負っていた。

つまり、ユグドラシルでいえば先ほどの蟲メイドより高いモンスター、いや魔王なのだろう。

最優先は、ガガーラン達をこの場から逃がすことだ。

戦線を離脱して後方へ下がって

だが、ユグドラシルでも上位モンスターなだけだ。基本さえ守れば倒せない相手ではない。

所詮は1体だけなのだから。

どれだけ強力なモンスターであろうとも、ワールドエネミー級のボスモンスターじゃなければ基本を守れば狩ることは出来る。

「イビルアイさん、召喚魔法の時間を稼いでくださいっ」

手駒が足りなくなるだろうと思いい、追加の手駒を出すべく召喚魔法に行動を移す。

ヤルダバオト名乗る魔王が近づいてくるが、俺の強化魔法で支援されたイビルアイの《クリスタル・ウォール／水晶防壁》が阻む。

《サモン・エンジェル・7th／第7位階天使召喚》

ニグンが魔封じの水晶で呼び出そうとした天使だ。威光の主天使（ドミニオン・オーソリテイ）の召喚に成功する。

だが、召喚者の能力が違うおかげで、性能が圧倒的に違う。ニグンとグレンの魔法詠唱者としての能力の差がはっきりと表れている。

それに神器級装備による効果のおかげでlv60台のはずの天使だが80台の能力に強化されている。

イビルアイが、俺の強化魔法で支援され70台クラスの存在となり、威光の主天使（ドミニオン・オーソリティ）とのコンビネーションプレイにより、徐々にヤルダバオトが押されている。

どんなゲームでも魔王は一人だ。

それを補助する存在はいても、完璧に使役する存在はいない。

だからこそ、魔王という存在は人間側の存在には勝てないのだ。

では、魔王でありながら、補助する存在を共にし、その驕りを捨て去った存在がいれば？

絶対に勝てないだろう。だが魔王のような存在は、己の存在を脅かす存在を知らずに魔王となるからこそその魔王なのだ。

決して弱者など気にも留める存在ではない。

ヤルダバオと名乗った魔王は、イビルアイと俺の連携により徐々にダメージを負っている。

このままいけば、この魔王も殺すことができる。

これほどの存在は、そこらにはいないだろう。

人間種最強が集まっているスレイン法国にも、これほどの力をもった者はほとんどいなかった。

恐らく、突発的に湧いてしまった魔王か何かだと思っていた。アンデットがいつの間にか湧くような世界なのだ。悪魔だって勝手に湧くんだろうと、その時は思っていた。

目の前に、あれが降ってきて、あんな言葉さえ発しなければ………

17. 1 アイんズ VS グレン

王都上空を飛行する一団がいた。

飛行：フライの魔法を発動している魔法詠唱者が二人、その後ろを座ったまま引つ張られる者が一人。

引つ張られているのは先日、エ・ランテルにてアダマントタイト級に昇格したアイんズこと、モモンだ。

エ・ランテルの時と同じく、漆黒のフルプレートを纏い、背中に2本の大剣を背負っている。

エ・ランテルにいるときに名指しの依頼が来たのだ。

タイミング悪く、ミスリル級の依頼を請け負ってしまっており、そちらの事件を解決するためにナーベを向かわせている。

依頼内容を簡潔に説明すれば、八本指と呼ばれる組織を壊滅させる作戦に参加して欲

しいという依頼だ。

冒険者組合の規定で、受けることは出来ない依頼だが、表向きの理由を用意されているので引き受けることが出来た。

アイズからすれば、シャルティアの件を早く解決したい。

だが、スレイン法国へどのように侵攻するか手が思い浮かばないのだ。

無論、力づくでどうにかしてもいいが……

この世界にプレイヤーがいることは確実であり、どれほどの数がいるか分からない。一人や二人なら問題ないが……多くのプレイヤーを敵に回す行為は控えたいからだ。

大義名分が欲しい。いっそのことスレイン法国が襲ってきてくれれば簡単なのだが……

シャルティアのことを考えていると、

目的地である王都で黒い炎が燃え上がり、強く白い一瞬の輝きが見える。

何かの異常事態だろうか？

「ここで構わん。あとは任せろ。」

《浮遊板》《フローティング・ボード》の魔法から飛び降り、飛行ネックレスを装備する。その場所へ一直線へ飛んでいくが、その先に……見たくない光景が目に入ってきた。

満身創痍となっているデミウルゴスだ……。

デミウルゴスと、その戦っている者達の間には落下するような勢いで着陸する。

「これは一体どういことだ」

とても暗く、重い声のでてしまった。

「……様……」

デミウルゴスは酷く傷ついている。

デミウルゴスを背に、相対していた二人と一体に身体を向ける。

その行動にイビルアイはイラつき怒鳴ってしまった。

「アダマンタイト級冒険者か？ 戦闘中に化け物を背に向けるなんて何を考えているっ」

首からか下がっているプレートが冒険者としての階級を示している。

あれが、エ・ランテルから派遣される予定のモモンなのだろう。

だからこそ理解できない。私たちを援護するために呼ばれたはずなのに、邪魔な位置に立っているのだ。

「戦う気がないなら、下がっていろっ邪魔だっ」

目の前にいる冒険者ごと、攻撃魔法の範囲に入れる。

冒険者一人と、恐るべき力を持った存在。魔人ともいうべき存在だ。

ごく最近昇格したという話だが、この際、巻き込んで殺してしまったとしても問題な

いだろう。

少なくとも、死者復活：レイズデッドで生き返ってもらえばいい。

今最も優先すべきは、あの魔人を殺すことなのだから。

《クリスタルランス／水晶騎士槍》をモモンごと巻き込んでも構わないと、放とうとして。

その結果がどうなったか。イビルアイは死を感じることもさえできなかつた。

漆黒の鎧が消え、その下から豪華なローブを纏い光る杖を手にした、スケルトンメイジ、いやエルダーリッチ?

《ブラックホール／暗黒孔》

その瞬間、一点から黒い穴が広がり、イビルアイと威光の主天使を飲み込み消滅する。
ユグドラシルプレイヤーが召喚した威光の主天使でさえ、アインズの魔法の前には無意味だった。

グレンは鎧が消え、その姿を見たときに、あれ、なんでアインズさんがあんな恰好しているんだろう？ただそう思った瞬間、

久しぶりに見た存在が牙を向いたことに驚いた。後ろで魔神が去って行く姿が見えるが追うことが出来ない。

「アインズさん、久しぶりに会ったのにいきなり攻撃するなんて、どういうつもりだっ!?
ましてやイビルアイさんを殺すなんてっ」

「――攻撃を仕掛けようとしてきたんだ……その報いは受けるべきだろ……」

アインズさんの様子がおかしい？

その声、雰囲気は自分の怒りを抑えきれないでいるように見える。

「シャルティアに続いて、デミウルゴスまで手にかけてしようとするとは。貴様はもはや許しておかんっ

その存在、死をもって罪を償えっ 《グラスプ・ハート／心臓掌握》

アインズが攻撃を掛けてきた。

いきなり攻撃を仕掛けてきたことでようやく、あの魔王に対して庇うように降り立った理由に思い至る。

あの魔人もアインズさんのNPCかよっ

それじゃ、殺してしまった虫使いのメイドもNPCか。

怒るのは分からないでもないが、即死魔法を使用するなんて。気を強く持ち、即死には抵抗する。

だが、この魔法の2次効果で意識が朦朧とする。

その隙を逃さんとばかりに

「《サウザンドボーンランス／千本骨槍》」

無数の骨が襲ってきた。

HPが全快だったおかげで、幾千もの骨が襲い掛かる前に意識が戻った。

「《マジックデイストラクション／魔法解体》」

襲ってくる骨を打消し、後方へ飛び下がる。

「ちよつとおマジでストップっ確かに蟲型メイドも殺したけど、ちよつと待ってっ」

「この野郎っ、エントマまで手に掛けるなどっ死ねっ死ね。とにかく黙って貴様はここで大人しく死ねっ《コール・グレーター・サンダー／万雷の撃滅》」

しまった、油に火を注いでした。

まともに受けるが、もう躊躇っていられない。確実に殺す気で魔法を放ってきている。

回復してる場合じゃない。召喚モンスターをださなければならぬが、そんなの使っている余裕が無い。

アイテムボックスから、ユグドラシル時代から持っている魔封じの水晶を取り出し即座に使用する。

ニグンのような建前口上などしている場合じゃない。

魔封じの水晶が砕け散り、熾天使が現れる。

三対六枚の翼を持ち、4枚の羽根で体を隠し、残り2つの翼ではばたく。

その瞬間、アインズが叫んだ。

“一あらゆる生あるものの目指すところは死である《The goal of all life is death》”

「魔法効果範囲拡大・嘆きの妖精の絶叫《ワイデンマジック・クライ・オブ・ザ・バンシー》」

アインズの後ろに時計が現れ、針が進む。

あんなスキルは知らない。知らないことが恐ろしい。

ユグドラシルにも隠しスキル、特定の条件を満たさなければ取得できないクラスはたくさんある。

熾天使を召喚できるクラスもその一つだ。

だが熾天使を召喚できるクラスというのは有名で、知らない人はいなかった。当然だ。Wikiにすら知らされているほど

有名なクラスだからだ。

だが隠しクラスというのは、それだけに強力な力をもったものであり知られていないスキルほど警戒しなければならないものだ。

熾天使に全力攻撃の指示を出す。

何らかのスキルであれ、ダメージを一定量受ければ止まるはずだ。

そう思い、熾天使に武器を降らせ続ける。

この間、12秒、熾天使による10の攻撃が行われ、アインズはそのうち7回の攻撃を回避する。

信じられない芸当だ。魔法職であれば普段攻撃を回避するのではなく、盾役に攻撃を受けさせる。

避ける暇があるなら攻撃をしたほうが効率がいいのだ。

だが、アインズは違う。スキルを使用しながら回避行動をとる。攻撃の一つ一つを読み回避している。

12秒の時が過ぎたとき………王国に絶対たる死が訪れる。

かなりの広範囲で、建物が、植物が、人が、家畜が、大地が、この場全てに死が訪れる。熾天使も例外ではない。

唯一生きているのはグレン。

指に嵌めてあるリングが崩れ落ちる瞬間に判断する。アイテムボックスからスクロールを取り出し瞬間移動する。

スクロールに込められた、上位瞬間移動が発動した。

転移した先で、さらにもう一枚、転移門：ゲートを開きスレイン法国へ逃げ戻る。

「逃げられたか………」

失敗だ。怒りにまかせて襲ってしまった。

本来であれば逃走を防止するため手を打ってから攻撃するはずだったのに。

ようやく沈静作用が追いつき冷静になる。

周囲に生命の気配は無い。

アインズは漆黒の鎧をまとった姿を取り、王城へと向かった。

18. 戦いの後で

——王国の会議室

その中は暗い雰囲気に含まれていた。

国王を始め、六代貴族が集まっている。さらには魔術師ギルド組合長や冒険者ギルド組合長まで……

「いきなり呼びだされたと思いましたが、この王都の惨状は一体どういうことですか？」

「まったく、一体どのような大災害起きたというのか？あの砂漠化した原因とは魔法か何かなのかね？」

「少なくとも私が知る魔法のなかにはありません」

「魔法でないなら魔王でも現れたとでもいうのですかな？」

「ははは、魔王などおとぎ話の存在でしょう」

皆、好きなことを口にする。

王が口を開いた。

「そのまさか……が起きたようだ」

「?そのまさかとは?」

「魔王が現れたのだよ」

「ははは」

貴族全員が王の冗談と思える言葉に声を出して笑ってしまう。

——王は決して、その苦悶の表情を変えることは無かった。

「いや、失礼。王もお年を召されたのでは?そろそろ王子に王位を譲ってもいいのではないのでしょうか?」

「いやいや、それは失言であろう?」

王のその表情を読み取ることすらせず貴族は好き勝手に言う。

一人の貴族が、真剣な表情でそれを受け止めていた。

「国王様……それが事実なのですか？ 一体、なぜ、そのような結論に至ったか説明して頂きたいのですが？」

「今朝方早く、アダマントタイト級冒険者がその事実を告げていったのだ。」

「はっ、アダマントタイトとはいえ、たかが冒険者のたわごとを信じるおつもりですか。これは、ますます王位を返上することを

お考えになるべきでは？」

「信じられぬのも無理はなからう。なら、そなたは王都で目にしたものを、どう説明するのだ？」

その一言を返せるものは、この場に誰一人としていなかった。

「ですから、魔法でしょう？」

魔術師ギルド組合長が声を挟む

「確かに魔法かもしれませんが」

ほら見たことかと貴族の一人が得意げな表情を見せる

「ですが、魔法であれば、明らかに第3位階でおさまるような力ではありませんね。

私の知る限りでこれほどのことを起こせる魔法など存在しておりませんよ」

この場にいる最も魔法に詳しいものが、そういうのだ。だれも反論を挟むことは出来ない。

「だが……しかし……」

魔法だろうと得意げに言った貴族は口ごもる。

「であれば、そのアダマントタイト級冒険者は、どうして魔王などと戯言を残していったのです？そもそも、その冒険者は

どこにいるのですかな？」

別の貴族が当然ともいえる疑問を挟む。

「それは分からぬ。ただ、魔王を追うとだけ言って出ていったのだ。」

「ならばなおのことつ、そやつが最も怪しいではないか。なぜ行かせたのですつ」

「蒼の薔薇のメンバーも、魔王を見たというのだ。それに……蒼の薔薇のメンバーの1名は行方不明だそうだ。」

王国最強の冒険者である、蒼の薔薇を知らないものはさすがにいなかった。その中の1人が行方不明だと？

「その……蒼の薔薇の面々は魔王を見たのですか？」

「3名のが相対したそうさ。だが………何もできずに撤退したと言っていた。」

人類最高峰のアダマントタイト級冒険者が、何もできずに撤退していったとは……

全員が重い沈黙に包まれてしまった。

「なぜ撤退できたのです？それほど強力な存在なら逃げることもすら敵わないと思うのですが……」

「その行方不明の蒼の薔薇の一人と、グレンという人物が戦ってくれたおかげで逃げれたそうだ」

グレン？

魔術師ギルド組合長は、その名前に覚えがあった。

「もしや、」グレンの特徴を伝えると「その人物で間違いなからう」

スレイン法国へ行くと言っていたが、いつの間に戻ってきていたのだろうか？

「彼なら、確かに対処できるかもしれませんが、その彼はどこへ？」

ガゼフと、その部下と共に戦ったためとはいえ、法国の特殊部隊と戦っていて勝っているのだ。

魔術師ギルドの組員から報告を聞いていたが、第6位階の魔法を使用できるらしい。

実力は間違いなくあるだろう。

「彼も行方不明とのことだ」

「………王よ。それで、そのなんですか………その魔王に、どう対処するおつもりで？」

王は考える。

再び相対したとして勝てるのだろうか？

ここ数年の帝国との争いでリ・エステーゼ王国は疲弊しきっているのだ。現状、砂漠化してしまった王都を復興できるかどうかとも怪しいものだ。

ここまで黙って聞いていたレエブン候がようやく口を開いた。

「王都の復興は無理でしょう。いえ、それどころか王国が滅びることは間違いないでしょう」

「なつ、それでも王国に仕えるものという言葉かっ」

「では、あなたは、この国が復興できると思いになるのですか?」

レエブン候の言葉は、ただただ静かな声だった。

「いくらなんでも、皆気づいているのでしよう? 帝国の毎年恒例の攻撃で王国はひたすら傷ついているのだっ

その状況下で、これほどの惨事が起こったのだぞっ

王国の力と我々六代貴族が力を合わせることが出来たとしても復興は不可能だっ」

六代貴族筆頭の、怒鳴り声に誰も言い返せないでいだ。

王一人を除いては……

「レエブン候よ。王国の力だけでは……と申したのだな?」

「はい……ですが……」

「よい、申してみるがよい」

「王国の復興は無理でしょう。方法があるとすれば、スレイン法国とバハルス帝国に援助を求めるのです」

他の貴族が口々に異論を挟む。

「馬鹿なつ王国に滅べとでも言うのかっ？」

「今まで争っていた敵国だぞっ」

「貴族として恥を知れっ」

レエブン候は、タイミングを見計らってただ一言

「では、他にどんな手があるのです？」

——誰も答えられなかった。

「どうやら結論は出たようだな」

「申し訳ありません。これまで続いた歴史を閉ざす結果となりました」

レエブン候が頭を下げる。

「よいのだ……王族の血は絶えることになるかもしれないが、民なくして国はなりたたん」

王は思う。せめて我が子らだけでも生きてほしいと。

国を差し出して国を守ろうとするのだ。

元々の支配者など邪魔でしかない。いつ、どんなタイミングで旗印として祭り上げられるか分からないのだ。

処刑されるか、よくても幽閉だろう。

だが、民を守るためには、王族の血を絶やしてでも助力を求めるしかない。それがせめてもの最後の王としての責務なのだから。

「では、人選はレエブン候に任せよう。ただちにスレイン法国とバハルス帝国へ使者を遣わせよ」

その言葉を機に、リ・エステーザー王国として行われた最後の会議となった。

王は思う。

恐らく貴族らは己の地位、財産を守るために奔走するだろう。

だが……王国を滅ぼそうとした魔王の存在にどう対処する気なのだろうか。

あれほどの惨状を引き起こした存在に打ち勝つ存在など……もはや神ではないか。神でも悪魔でもいい。

民を、我が子らを守ってほしいと。

19. ナザリツク地下大墳墓、玉座の間にて

リ・エステイーゼ王国に、魔王を追う。

とだけ伝えナザリツク地下大墳墓へアインズは戻ってきていた。

かなり不味い状況だ。

デミウルゴスが危機に襲われていたとはいえ、さらにエントマが殺されたと聞いたのだ。

沈静作用が追いつかないほどの怒りに襲われ全力で攻撃を仕掛けてしまった。

しかも王国、かなりの広範囲を生きるものが存在出来なくなるような惨状を招いている。

せめて、効果範囲拡大を、スキルに乗せなければ良かったのと思う。

あれほどの被害が起こったのだ。

アインズが、この惨状を引き起こしたと、もしプレイヤーの集団が耳にしたとしたら？

ナザリック地下大墳墓へ攻め込んでくるかもしれない………

どうやって、この失態を補うべきか

玉座の間に回復したデミウルゴスを含め守護者が集まっていた。

「デミウルゴス。怪我は大丈夫なのか？」

「はっ、ルプスレギナのおかげで問題ありません」

「ならばよい。だが身体に問題があるようであれば、すぐに報告するのだぞ？」

「なんと勿体ないお言葉。慈悲深き配慮、身に余る光栄です。」

「よい、それで報告すべきことはあるか？」

「……アインズ様。至高の御身を前に、最高の叡智を持つ御方に、私めが発言することをお許してください。」

「アインズ様は、私が倒されそうになることを含め計算されていたのではないのでしょうか？」

「どういふことだ？俺がしたことって王都を砂漠化したことだけだよな？」

「ほう？..」

「とりあえず、よく分かったな？という振りをする。」

「やはり、アインズ様は全てを承知なのですね」

「いやいやいや、どういふことだ？モモンガは疑問に思う。」

たまたま、マーレが疑問の声を上げた。

「どういうことですか？」

デミウルゴスが私が説明してもよろしいですか？という目線を送っているのは理解できた。

軽く頷くと

「いいかね？私が倒されようとしたが、目撃者は誰も生きていないのだよ。」

それもアインズ様がわざわざ魔法のスキルを範囲拡大してまで念入りに行ってくれたのだ。」

まだ分からないのか？という雰囲気はデミウルゴスから伝わってくるが、アインズにも分からない。

「仕方ないね。アインズ様は人間種へ破滅しないと悟らせたんだよ？」

そうすればどうなるか。簡単なことだよ。

人間種というのは、未曾有の危機に対しては敵対関係を乗り越えて団結しようとする

習性があるのだよ。

そのことを踏まえるにだ。

逃げていったグレンという人間は、

スレイン法国を起点として、王国と帝国、出来れば評議国と、聖王国による連合を作ろうと考えるだろうね。

人間種に対する絶対的な存在を前に、絶滅させられるという恐怖をエサにをまとめ上げるよう動くだろう。

その結果どうなるか？

当然だが、持ちうる全ての最高戦力を集結させるだろう。

最高戦力を集めるのだよ？

当然、捕獲しているシャルティアとて前線に立てるよう動くと思わないかね？
あれほどの戦闘力をもっているのだ。使わない理由はないだろう？

さらにだよ？。

我らがナザリック側からすれば、仲間を卑怯にも取られ、

襲われそうになっている。

そのように演出すれば大義名分もと思わないかね？」

ナザリック最高位の知恵者にそう言われては、そうだろうと納得してしまう。

「アインズ様——この私めに、王国襲撃への失態を払しよくする機会をいただけないでしょうか？」

至高の御方の御考えに少しでも近づきたく思います。

この身にある全力をもってして、御身への期待に応えたいと思っております。」

「デミウルゴス．．．．．そなたの全てをもって今回の事態に対するならば、今回の失態を許そう。」

我は命ずる。シャルティアを救うべく行動せよっ」

「はっ。必ず御身が望む未来を捧げますっ」

20. ナザリックVS人間種

カツツエ平原

アインズ・ウール・ゴウンの軍勢と

王国より集められた10万の兵

スレイン法国からも30万の兵、いや、兵以外にもスレイン法国に住む武器を取れるもの全てが集められていた。

さらにバハルス帝国から、6万の兵が部隊を成している。4騎士はおろか、フールーダーも参戦している。

人間種にとって最大となる軍勢が相対していた。

あれ程の存在に対して。これ以外に対処する手段があるなら教えてほしいと思うくらいだ。とグレンは思う。

そう、この場面になるために考えられるだけの手を打った。

結果は思ったようにはならなかった。

周辺国家を人類の危機と回いたのだが・・・帝国以外には協力を取り付けることが出来なかった。

元より、帝国以外に余力がある国はなかったのが原因だが。

せめてもの解決策を、と思いナザリツク地下大墳墓にある、あのアイテムを回収できればと考えていた。

方に一つの可能性だと思っていたが

まったくの無意味と終った。所詮はこの世界の人類種程度では太刀打ちできるわけがなかったのだ。

こうなれば、残る手段は周辺国家を巻き込んだの連合を組み僅かな可能性を掛けるだけだと思って行動していた。のだが……

アインズに勝つには、全ての魔物、アンデットを倒す必要はないはずだ。

ギルド長たるアインズさえ倒せば、他の存在は生きる意義を失い自滅するだろう。

アインズを消滅させようと考えていたが、もはや手は思い浮かばない。

実際その予想は当たっている。ギルド長たるモモンガさえ消滅させればNPCは生きる意味を失うのだから。

そのためには、あのアンデットの軍勢を突破しなければならない。

ナザリック・オールドガード 3000体
ナザリック・エルダーガード、ナザリック・マスターガードを合わせ総数6000の部隊だ。

さらに前面に、構えているのは、魂喰らい：ソウルイーターと、それに騎乗する死の騎士：デスナイトが500組。

ユグドラシルのプレイヤーが多数いるのならば問題が無い数だが、あいにくと、人間

種側には俺一人しかない。

神人も連れて来てはいるが、前面の部隊を倒せば御の字だろう。

あとはシャルティアがどこまで粘るかだ。

この戦いに勝つにはアインズのMPを、からにし攻撃を加えるしかない。

こちらの軍勢全てを使つても構わないからMPを消耗させたい。

そうすれば、シャルティアと俺が2人でかかれば間違いなく勝てる。

この戦いはそういう戦いだ。そう思っていた。

たとえ死んでしまったとしても、

超位魔法：星に願いを：ウィツシュ・アポンスターで全ての人間を生き返らせることは可能だ。

実験の末、問題ないことは確かめてある。

なんて便利な魔法だと思うが……何か肝心なことを見落としている気がするのだ。

「アインズ様、準備は終わっております。あとは御身が、その御力を示せば決着が着くことでしょう」

「そうか」

デミウルゴスの言葉に頷き、超位魔法の準備に入る。

超位魔法：イア・シユブニグラス／黒き豊穣への貢

狙いは王国の軍勢だ。

あれは、超位魔法？

まずい……普通なら初手ではありえないが、今この状況下において、もつとも有効な手だ。

当たり前だ。

MPを消費させるためのエサとして集めたはずなのに

その役目を果たすことは無く、アインズに対しての肥料を渡してしまったのだ。

どうする。この場所から発動を止める方法は、まったくくない。

超位魔法を止める手段がまったく思い浮かばない、単騎で突撃し、無謀にダメージを与えて止めるなんて手は、それこそ相手の思うつぼだ。

だが、本来かかるはずの魔法詠唱時間もなく………
ス／黒き豊穣への貢が発動した。
………
イア・シユブニグラ

王国の陣営、その命、5万という数が一瞬にして吹き飛んだ。

そのあまりの出来事に、その場にいた人間種が動くどころか、瞬きさえできなかつた。

恐ろしいことはさらに続く。

殺された人を養分に、黒い塊が大きくなっていく。

「メエエエエエエエエ」

この世のものとは思えない声を上げ、黒い仔山羊が5体生まれた。

そのままじつと、動かない異形の存在を人はただ、ただ見つめることしかできなかつた。

戦場の中央に、巨大な姿をしたものが現れる。

幻影の魔法により、戦場中央にアインズの姿が映しだされる。

スレイン法国の、何か所から、ある存在の名前がつぶやかれ、伝染していった。

「死の神 スルシャーナ様……………」

「死の神 スルシャーナ様……………」

「死の神 スルシャーナ様……………」

「死の神 スルシャーナ様……………」

「死の神 スルシャーナ様……………」

「死の神 スルシャーナ様……………」

さらに大きな声が上がる。

まるで神の再誕を喜ぶ歌のようだ。

「スルシャーナ様っ」

「スルシャーナ様っ」

「スルシャーナ様っ」

「スルシャーナ様っ」

「スルシャーナ様っ」

「スルシャーナ様っ」

スレイン法国に所属する人間から湧き上がる歓声が止まらない。

中には祈るように地面に伏せる者もいる。

だが、信じるべき神の存在を目にし、その眼には狂気の色が宿っている。

スレイン法国が最高位の六大神官長の上に立つ最高神官長ですら、アインズ・……スルシャーナと名乗った人物に見惚れている。

いや、最高神官長がアインズを、死の神スルシャーナと認めていることこそが、法国全ての人間を狂気の渦に招いている元凶だ。

もうこの狂気を止める術は無い。確信にもた思いが背筋に走る。

暗く、冷たく、生命を凍らせそうな、それでいて絶望へと導き、響く声が、その場
いた存在、全てに届く。

「我は、アインズ・ウール・ゴウン。そして死の神 スルシャーナ。
愚かにも、我に反旗を翻したものがいる。その存在を我に差し出すがよい」

「誰だ……」

「誰の事だ……」

「誰だ……」

「誰の事だ……」

「誰だ……誰だ」

「誰の事だ……」

「誰だ……誰だ」

「誰の事だ……誰を差し出せばいいんだ」

この言葉が、法国の部隊全てに伝染し、ある人物に行き当たる。

一人の存在が、あいつのことだっ、そう叫んだ瞬間

全ての存在が、グレンに目を向ける。

「あいつを殺せ、神に捧げるのだっ」

その言葉が一瞬にして法国の存在全てに広がる。

恐ろしいことに、スレイン法国が用意した30万もの人間が、一齐にグレンに襲い掛かってきた。

その突然の出来事に、王国の兵と、帝国軍は動くことが出来なかった。

信仰心を利用して、こっちの軍を操るなんてっ……

信仰つてやつのせいとか？ 気にしなかったことがこんな事態を起こすとは……

ありえるかもしれないが本当に目にすると目眩を起こしそうだ。

神なんて存在がいるわけがない。

法国で聞いていた話をまとめると、六大神も13英雄もすべて、ユグドラシルのプレ

イヤーだと。

なら、この世界の神って俺と同じ存在じゃないか。

俺が神となっていてもいいだろうに。

何を誤ったと・・・・・・・・・・。

グレンは心の中で叱咤する。

だが、この暴れ狂う軍勢を静させる方法はないだろう。ないのであれば逃げるしかない。

1点突破をかければ、所詮はカンストプレイヤーである俺に勝てるものは法国内にはいない。

だが、

「奴を攻撃するんじゃない」

近くにいたカイレが、あの存在に命令を下す。

「なつ婆ちゃんまでっ」

かつてスレイン法国に訪れたときに、少しでも優しさを与えてくれた人ですら敵になった。

グレンは思う。

この人は信仰心に惑わされることはないと思っていたのに。この世界の全てが俺を裏切ったと思った。

すぐそばのシャルティアから攻撃を受け態勢を崩し、法国軍の中に飛ばされてしま
う。

多くの人間に押し掛かれ、潰されそうになるが力づくで吹き飛ばす。

さらに、力任せに鞭を振るい周囲の人間をなぎ倒すが、キリが無い。

一人一人程度であれば、楽に殺せるのに、あまりにも多い数が鞭の加速力を失わせる。
初速が無ければ、せつかくの神器級装備も活かせない。

次から次へと、人間が波となって押し寄せてくる。

さらには、黒い仔山羊が5体も動き出し、シャルティアと連携しつつ攻めてくる。

「対応策が……」

先日の戦闘で、最高位天使を召喚する魔封じの水晶は使ってしまった。

経験値を消費してでも生み出すチャンスがない。詠唱時間を与えさせてくれないのだ。

召喚体制に入ろうと、飛行：フライの魔法でとんだ矢先に、

フルーダーが

アインズが

適宜遠距離魔法を放ってくるのだ。

「法国の人間ならまだしも、なんでフルーダーまでっ」

「わが師に尽くすこと。これこそ本望だっ」

完全に詰んでしまっている。

まさか、フルーダーを取り込んでいるなんて……

フルーダーだけならどうとでもなるが、攻撃するチャンスを、黒い仔山羊と、シャルティアが、アインズが潰す。

ならば、

残された最後の手で、この場から逃げようと腕輪の力を発動する。

超位魔法：ウィツシュ・アポンスター

この場から遠く離れた場所へ転移してくれっ

願いを込めた魔法が不発に終わった……………

一体何が起こった……………

アウラの持つ山河社稷図が戦闘が始まる前から、このカツツエ平原全てを隔離していた。

神器級アイテムではワールドアイテムの効果を超えられない。

回復魔法を行使し、身体を癒してもいずればMPが尽きる。人間種であるいじょう、いつかはスタミナも尽きてしまう。

アインズとグレンの立場が逆であったなら、疲労というバットステータス無く戦い続けられたかもしれない。

だが、現にグレンは人間種なのだ。

「スルシャーナ様つばんざーい」

「スルシャーナ様に全てを捧げるんだっ」

我先にと、死を恐れない軍勢が襲ってくる。

「あれは、スルシャーナじゃないっアインズだっ」

そう叫んでも聞き入れてくれる人は誰一人としていない。

倒しても倒してもキリが無く襲ってくる。

信仰心という名の狂気を纏い襲ってくる人が恐ろしき……

決して1v差で、どうにかされるはずがないのに……死へと近づく気配を感じる。

攻撃をするたびに……

回避するたびに……

ダメージを受けるたびに疲労がたまっていき……最後の止めとばかりに

《グラスプ・ハート／心臓掌握》

アインズの即死魔法が止めを刺した。

「戦いは始まる前に終わっているのだよ」

まあぶにつと萌えさんの言葉だな？

グレンがアインズと戦うために準備していたように、

アインズ、いやデミウルゴスがそれに対抗する術を用意していた。

最もデミウルゴスが全て計画していた通りとなったのだが………

法国を調査しているうちに六大神の一人、死の神スルシャーナの存在を知ったことから全ての作戦は始まった。

法国の部隊に所属する何名かに、アインズの姿が映し出された瞬間、スルシャーナの名を叫ばせる。

たったそれだけのことで、法国の部隊はグレンに攻撃が向けられると想定されていた。

高い信仰心ゆえにだ。

「まさか、あれほど簡単に扇動されるとはな。」

「人間など所詮はその程度の生き物です。法国の場合は、その信仰心が仇となったのでしよう」

フルーダはもつと簡単だった。

グレンがバハルス帝国を離れた後で、会うだけでことはすんだ。

当たり前と言えば当たり前だろう。

フルーダにとって最も重要なことは魔法の深遠を覗くことなのだから。
グレンとアインズ

どちらが優秀な魔法詠唱者か比べるまでもないのだから。

21. アインズ・ウール・ゴウン宗教国

死んだ人間を見下ろいていた。

アイテムボックスに収納してあったものだろう。

その傍に所持していたアイテムが積み重なっている。

配下の一人にアイテム回収を命じる。

「スルシャーナ様……」

スレイン法国の人間だろう。

「汝らが捕えている吸血鬼をここへ。」

人壁が割れ、老婆とシャルティアが歩み出てくる。

横に居るのが、シャルティアを洗脳した者だろう。

「その者、洗脳を解除せよ」

シャルティアから何かが抜けるような気配があり、その瞳に力が戻ってくる。

洗脳されている間の記憶がシャルティアに押し寄せてきた。

堪らず跪き、頭を垂れる。

「アインズ様つ申し訳ありませんっ」

たとえ操られていたとしても、至高の御方に敵対した自分が許せなかつた。

「よい。よいのだ。シャルティアよ。頭を上げ、我が傍へ」

シャルティアが、アインズの横やや後ろへと控えた。

ようやくシャルティアが戻ってきたことに安堵するが、今この場で、周囲に人間の目がある場所で抱きしめるわけにはいかない。

これだから、今回の計画の肝心な部分なのだから。

スレイン法国の代表だろう。

アインズを前に、片膝をつき忠誠の礼を取る。それに合わせて、後ろの人間が次々と

跪いていく。

その光景は、予定されていたかのように綺麗なものであった。

「神よ!!我ら人間を見捨てず、戻ってきてくださいだったのですね!」

「そうだ。私がお前たちの神である。永き時を超え、我はここに帰ってきた!」

両手を広げ、その背後には黒いオーラが広がっているように見える。

「神よ」

「神よ」

「なんとも慈悲深きお言葉・・・」

「やはり大罪を犯せし者たちによつて放逐されたなど偽りの伝承でしかなかったのですね!」

「お前たちが仕える、神たる私はここにいます——

我を信じよ、我を崇めよ、我を称えよ。

さすれば汝らに繁栄の時を与えん。」

「おおお、神よ。御言葉に従います」

スレイン法国の民、その全てが待ち望んできた神が現れたのだ。その言葉がなんと甘い響きを放つのだろう。

今この場にいるスレイン法国の者は、誰一人として例外無くアインズの言葉に耳を傾けている。

我は名を変えた。今後、我の事はアインズ・ウール・ゴウン神と呼ぶがよい。

我は、ここに宣言する。今ここに、アインズ・ウール・ゴウン宗教国の樹立を。

汝らは、我が新しき国の民となるのだ。そして広めよ。我が教えを。

我を喜ばせられるように、全力を尽くせ。さすれば汝らの上にも奇跡は舞い降りよう

「はは！ 我らが神よ！ お言葉賜りました」

これ以上ないほど深々と頭を下げた者どもを一瞥すると、アインズは立ち去る。シャルティアを連れ、黒い渦の中へその姿を隠した。

その後

スレイン法国、いや、名をアインズ・ウール・ゴウン宗教国の動きは素早かった。

王国は、あの悲惨事があつたためか、何にでも良いから継り付きたいと思つていたのである。

あつという間に、アインズ・ウール・ゴウン宗教国へ取り込まれていく。

反論しようとした者は、アインズ・ウール・ゴウン神が遣わせた、デミ・ウルゴス教祖の言葉を受け瞬く間に惹きこまれていく。

帝国も、ジルクニフが精いっぱい抵抗しようと手を打った。

しかし、あの戦争の場に居合わせた帝国の騎士達は圧倒的な力を見せつけられ絶望の淵にいたのだ。

その絶望は徐々に帝国を蝕んでいった。

さらに帝国で最も魔法詠唱者として最高位にいる、

フルーダがアインズ・ウール・ゴウン宗教国の素晴らしさを説いていた。

多少の時間はかかったが、元スレイン王国と、リ・エステイーゼ王国、バハルス帝国は一つの国となり

アインズ・ウール・ゴウン宗教国は繁栄していく。

そこには、いつしか聖母となって祭られているシャルテイア・ブラッドフォールの姿があった。

2.2. やっぱりモモンガ様迷惑を受ける

アインズ・ウール・ゴウン宗教国は、今のところ順調に拡大している。デミウルゴスに任せておけば問題ないだろう。

だが、任せ過ぎて結構暇なのだ。神という立場のため滅多に表に出る必要がなかったからだ。

ふと、グレンが死んだ後に残ったアイテムの検分でもしようかと思ひ、回収を命じておいた物を自室に運び込ませる。

「ふん、あれだけの騒ぎを起こした割りには腕輪くらいしか見張るべきものは無いな」

装備品を一つ一つ見ていく。

鞭

帽子

服

指輪

首飾り

「予備の武器とか用意しなかったのか？」

消耗品や、使い切りアイテムはあるが、それほど価値の高いものはなかった。

「つまらん」

ポーションの陰に一つのカギを見つける。

なんの鍵だろうか？

ああ、そういえばカルネ村のあとで預かった箱があったな。恐らくそのカギだ。開けることは無い、と宝物殿に放り込んであったのを思い出す。

黒歴史本とか言ってたし、読んで暇つぶしにでもなればいいのだが……

カチャリと小気味いい音が響き箱が開く。

おや？これはロンギヌスじゃないか。警戒すべきと思っていたワールドアイテムが呆気ない形で手に入る。

ちよつと気を良くして、その本の1ページ目から目を通していった。

「ふくん、あの人間だけが書いたものじゃないんだな」

ユグドラシル時代に中二病を持った人間は結構な数がいた。

そのなかで僕が考えた格好いいセリフや、ポーズをみんなでまとめようぜっ

そんな企画を考えた人がいた。書きたいことを書き、その後、露店で売る。

意外にも、それは続いていった。細々とだが、ユグドラシル最終日に近づくまでずっと……

「はは、自分で考えた物を見せるのは恥ずかしいが、人の考えたものだと、それなりに面白いじゃないか」

読んでいてくだらないと思うが、つい吹いてしまう。

ここからが、あのグレンの分のようだ。あまり書いてないが、ある一文が目に入った。

「ふん。よほどお疲れの様子——ああ、いいぞ。生きて帰るがいいさ。だが——今度ま

た村を襲うというのなら……

飼い主に伝える。この辺りで騒ぎを起こすな。騒ぐようなら、今度は貴様らの国まで死を告げに行つてやる」

えつと……確か俺のセリフだよな。確かカルネ村で、こんなセリフを言った気がするが。

あいつ書き込んでいたのか。しかも挿絵付で。

ん？書く暇なんてあつたか？

文字だけならなんとか書けたかもしれないが、絵は無理だろう。

それに、この後にも、色々と書き込まれているようだ。

おかしいな。カルネ村の後で預かつたんだから、これより後に書かれている訳がないはずだが？

ページをめくつた……最初にある絵は、パンドラズ・アクターだった。

「え」

これに書いてあるはずがない。

何となく、道具鑑定の魔法をかけてみたら、言葉を失った。

アイテム名：中二病の本

所有者が思いついた格好良いセリフとポーズが自動的に書き込まれる。

破壊不能なアイテム。

ユグドラシルでは再現不可能なはずの効果が付与されている。

アインズが、グレンがこの世界に転移した際に、なぜか効果が変わったのだろうか。

多くの中二病患者の呪いともいうのだろうか。

ページを捲るが、昔モモンガが考えた設定やポーズが次から次へと書き足されていく。

思わず投げたしまいが、それでも恥ずかしさが最高潮に達するたび沈静作用が何度も起こってしまった。

「あんな箱あけるんじやなかった．．．．．」

その後、微妙にセリフと動きが固いオーバーロードの姿があつたとかなかったとか。